

右臘月廿五日、柳川逆旅所作、

與鄭幹介（九月廿一日）

矩方襲家學、講兵法、謂、要在通知時務、而通知時務、要在讀輓近之書、讀輓近之書、要在知俗語官話、而宋・元・明・清、其言蓋代有變更矣、享保年間、華音之學、嘗大盛于藝林、而有唐音・唐話・唐詠・唐語・諸書出、然至于近世、若又有少變更、果然否乎、學之之要、果由何而下乎、或謂、非操華音、則未易得而知焉、矩方常疑焉、果有其說乎、夫渺漫吞天、一葦抗之、吾不得而爲之、雖然我往彼來一已、抑通兩情者、不有譯官乎、聞今有鄭先生者、譯局之翹楚也、乃踵門叩其說、先生無韜其秘、則益于家學兵法、不亦巨大乎、是區々之素願也、吉田矩方再拜、

○與鏗軒先生（九月念三、亦在崎而作、

嚴寒漸臻、伏惟萬福、告別之後、忽焉十餘日、寤寐反側、輒思待書幃奉警歎之時、茫然自失、畱在貴地之際、煩先生實多、感謝萬般、至飛船之事、最深拜辱、六日未牌開帆、天晴日暖（以下闕、未焚稿參照）

西遊日記終

（萩市松陰神社藏 校合濟）

*（第一卷未焚稿所載の本文には由の上の果の字を抹殺し、焉の字を抹殺し、末の吉田の二字がない）

東遊日記

解題并凡例

一、東遊日記は、松陰が兵學研究の爲、藩主の參勤に隨ひ、嘉永四年三月五日萩を發してより、四月九日江戸に着くまでの間の日記である、これは松陰第一回の東遊で時に年二十二であつた、當時、藩人子弟が藩吏の行役に食客として従行し、京江戸等に赴く、之を冷飯ヒヤメシと稱した、是時松陰は江戸方手元役中谷市左衛門の君公に扈從するので、其人の冷飯となつて行つたのである、

一、この旅行は、公の行列には關係なく、常に公駕に先だつて行つた、同伴者は井上壯太郎、萩萩より中谷松三郎、山山より中井次郎右衛門關戸より同行であつたことだけは、日記に見えてゐる、

一、途中宿泊の地は、三十一箇處で、其内、伏見今の京石部今の滋に各二泊したから、合計三十三泊である、玖波今の廣海田同の間の七里、絲崎・尾道廣島の間の二里、及び桑名三重宮愛知の間の七里は舟で、其他は皆陸路を取り、伏見以東は無論東海道を取つた、

一、東遊日記の松陰自筆本は萩市松陰神社の所藏で、廻浦紀略と合綴してある、大さは半紙二つ折形、總表紙は厚紙澁引、この日記の表紙は普通の半紙で、松陰自筆の日記の二字を題し、本文は無算紙に全面十行毎行二十字の割に文字が納められて、日記の終には安政己未十二月十四日門人高杉春風閣了の文字がある、本全集の編纂には是を原本とした、

一、東遊日記の從來の刊行物としては、明治四十一年十月十八日發刊の雜誌「日本及日本人」臨時増刊吉田松陰號の附録に載せたものと、吉田庫三編輯「松陰先生遺著」第二編に載せたものがある。

(委員 安藤紀一)

東遊日記

辛亥三月、從熊旛而遊學東武、乃有此記、

一、三月五日 牢晴、是日、熊旛發秋城、卯前半時、余與井上某^(壯太郎)、同先旛而發、午時抵山口、喫飯既畢、乃遠龜山、登鶴峯、龜山者大内氏故墟也、濠塹今尙可認、鶴峯之頂、有岩戶社、詣而拜之、峯者大内氏之時、蓋以爲置埃之地耳、哺時 熊旛至、

一、六日 霧、卯時與中谷松三郎^(後正亮)先旛而發、漫行誤路、經小郡大道之市、渡鰐石佐波之川、越佐野之嶺、而出三田尻、從山口至小郡、二里二十八町、從小郡至三田尻五里、午後達三田尻、未達里許而遇雨、既達乃訪高井・沓屋・橋本・飯田、夜雨歇、

一、七日 牢晴、卯時與護馱者、先旛而發、經富海・戶田・夜市・福川・富田・徳山・戸石諸邑、午後達花岡、九七里、其間道徑平坦、雖有二三小坂、絕無險阨可憚者、福川有若山、陶晴賢之所據云、山址連續、蓋非擁大兵、難以爲守、徳山市井嚴肅、無雜沓之態、觀其居貨、皆日用之要需、不然、武器画軸類已、少餅酒肉、其土風於是可想矣、其比隣戸石・櫛濱諸地、皆煩劇之地也、果不爲其所移歟、唯地無阨塞限暴寇爲根、戸石有船倉、相地甚好、

一、八日 晴、卯後與護馱者、先駕而發、午時抵高森、程凡四里半七町、其間道徑平坦、雖有三尾、中山坂、亦易與耳、山口而來、觀道上之所見、參輿人之所說、客歲救荒之政、入人也深、氓之蚩々、驩虞欣抃、匪夷所思、是以翁婦兒童出拜、熊旛者、倍他日矣、

一、九日 晴、笨車破曉而發、與松伴(中谷)、辰中刻至關戶、傳餐、其間坂有金明、水有御庄、戶口稠密、有玳珂市、柱野、既而越關戶坂、有水曰小瀨川、是防藝之界也、從赤馬關至此、三十六里、過川入藝、越久野坂、宿玖波驛、是日行程七里、至防藝界、有詩、曰、奔流滔々拖巨川、疊山複嶺高衝天、美哉山河是國寶、何以守之親與賢、嗟々富邑何必死號叔、克段于偃(哪)莊不勗、苟有至誠足感神、異類可擾况同族、維昔祖宗制長防、乃選骨肉鎮一方、爾來賢明迭輩出、萬世依然旧金湯、吾過此川越此嶺、長息却復思邊警、亂生於治古所稱、過慈祖訓屬画餅、

一、十日 晴、卯後與中井次郎右衛門、中谷松三郎、發舟而過宮島、海程二里余、上嶋、拜神祠、觀古釜、登塔岡、既而復舟行五里、抵海田、而宿、申後駕至、驛多巨戶大厦、

一、十一日 晴、卯後與松先レ駕而發、馱傍有川、發源于上瀨野大山、離海入山、道常與川相隨、亦無絕險、過嶺、則四山皆積、無重林深樹、下山、則平田漫々、有驛、是為西條廿日市、宿焉、日正午時、海田至、是五里半、

一、十二日 雨、卯前發、至本郷傳餐、過藝備之界、經三原城中、至絲崎、買舟而乘、薄暮達尾道、

從廿日市至絲崎九里、絲崎至尾道、海陸皆二里、三原城小早川公所築云、淺野甲斐居焉、吾通觀藝國、風教之頹敗、實為可哀矣、童稚立街、街賣餅者、馱丁跪路、要搬運而爭荷者、菜色之民、巧乞路人者、極多、鈔權輕賤、土人乃施々然誇說、嗚呼、國而如此、肉食之人、寧可忽然無憂哉、

一、十三日 晴、卯前發、登坂、坂上有藝州領福山領境碑、下坂、行平田中數里、左視福山城而過、閣老阿部伊勢守之封也、至神辺傳餐、未達高屋市驛少許、而福山領盡、公料始、宿天掛驛、阿部攝津守之封也、尾道至是十二里十一町、

一、十四日 雨、卯前發、道經猿懸古城之下、至河邊、乘竹笨車、是日雨甚泥滑、不能察河邊川、高松城之旧蹟、深為憾耳、至板倉、復步、自是備中國、而其二郡、則代官佐々井半十郎所管也、入備前國、宿岡山、池田侯居城也、歷觀市廛上所鬻、士人所往來、文武之教、果能如用熊沢之時乎、吾不信焉、

一、十五日 晴、卯時發、過京橋、觀治水之略、渡吉井川、宿三石、行程九里、吉井川中國第一之巨川、而熊沢之所治云、

一、十六日 雨、寅後發、越三石、有年二坂、三石坂上有備播界碑、時曉暗、字不可讀、有年坂、俗稱播磨箱根、下坂行里許、為有年驛、々傍有制札場、尾署藩侯名、曰越中、渡有年川、狸々川、阿宋川、手野川、或稱青山川、其間有脇坂淡路守、建部内匠頭、刑部卿殿之領、道左有脇坂之城、宿姬路城中、酒井雅樂頭之居城也、地形恢濶、戶口繁盛、手野川距城一里、蓋以為西面之險也、

一、十七日 晴、卯時發城、姫路・市川之間、有固寧倉二、因名而實可知矣、舟渡市川、過觀石寶殿、午前舟渡加古川、老臣河合如水在職之時、修堤防云、經明石城中、宿大藏谷、駅傍有二人丸社、往觀焉、有碑、(上欄)春亦安、文亦得、記文體妙、(春風)未署曰、明石城主松平日向守源信之立、姫路以東、山漸遠、地漸廓、平田漫々、菜麥青黃、乃知帝京之不遠也

一、十八日 晴、卯時發大藏谷、行里許、海濱松林之間、安巨砲一門、無砲臺、又無砲床、甬長一丈餘、口径三寸半強、此地與淡路島、隔海可一里、而相對峙、左則紀國之斗出南海者、渺茫際天、而淡路之右、鳴門之險、不可輒過、故海舶之飄外洋者、皆由此而入裡海云、巨砲之設、可謂得地利矣、過播入攝、經一谷之麓、平氏之所築、源軍之所襲、雖不及詳悉、其山勢峭峻、亦足想當時、至兵庫傳餐、此地戶口繁盛、海舶輻湊、風俗華奢、以浪華都會之地近也、至湊川、拜楠公墓、遙視摩耶山、過阿保親王廟前、宿西宮駅、兵庫・西宮之際、酒戶之夥多實為可驚矣、又多見牛車、是日入駅、休憩少時、公有病宿兵庫之報至、諸先駕而至之官員、各乘竹策車走回、吾輩乃留宿、而心之疑危、寧可道哉、

一、十九日 雨、公病痊、駕發兵庫之報連至、吾心乃降、未前駕至西宮、從駕而發、渡武庫・池田二川、宿郡山、行程六里、皆平疇之間、周道如砥、但雨寒泥滑、行步艱澁、聞見無可紀者、

一、廿日 雨、卯後發郡山、攝國多小藩封地交錯者、而區域難悉、獨尼崎領、每每樹碑標之、是松平遠州之封也、經山崎、道左山腹有寺、曰天王山觀音寺、此道路路狹隘、田澤泥濘、光秀拒義兵于此、不為無策、光秀之敗、豐公之勝、特一着之先後耳、亦唯天不與不義之所致歟、入山城、沿淀川、左視淀城而上、宿

伏見、淀城、稻葉長門守所居也、是夜、松平阿波守・立花左近將監・松平主殿頭・松平兵部丞、四侯同宿焉、

一、廿一日 晴、尚雷伏見、楠公墓下作成、曰、為道為義豈計名、誓與斯賊不共生、嗚呼忠臣楠子墓、吾且躊躇不忍行、湊川一死魚失水、長城已摧事去矣、壞良書批正人間生死何足言、廉頑立懦公不死、如今朝野悅雷同、

僅有圭角乃不容、讀書已無術、道志、臨事寧有取義功、君不見滿清全盛甲子內、乃為么麼所破碎、江南十萬竟何為、陳公之外狗鼠輩、安得如楠公其人、洗尺弊習令一新、獨跪碑前三嘆息、滿腔客氣空輪困、義膽良書批正

一、廿二日 晴、卯前發驛、道傍有碑、曰長沼澹齋先生墓距此三町、此地多植孟笋梨樹、入近江、越逢坂、至大津傳餐、阿侯亦憩于此、湖水當前、渺茫可愛、徑膳所城中、抵勢多遇雨、抵草津、食姥餅、宿石部、九十里、夜間甚雨、至曉乃歇、

一、廿三日 晴、橫田川大水、不可渡、因留于此、

一、廿四日 晴、卯時從駕發驛、抵藍輪、與薩少將遇、觀薩之儀仗、多老成之人、又侍御之槍靶二十根許、叢聚隨跟、是皆可觀之事也、經甲賀郡之水口城、加藤能登守所居也、過土山驛、抵鈴鹿坂、坂嶺則江勢之界、而古昔置關之處也、橫田之水、發脉于此、下注于湖中云、下坂五六町、形勢壁立、鳥徑九折、杉松陰翳、既而至平地、有駅曰坂下、宿關驛、鈴鹿至關之間、山近地窄、與東海諸州不相類矣、夜雨、

一、廿五日 終日陰雨不暫休、發驛、經鈴鹿郡之龜山城、石川日向守所居也、過庄野・石藥師・四日市、宿桑

名城外、鈴鹿以東、沙川數條、圮橋數處、略與播州地方相類、而此較開廓耳、桑名郡桑名城、松平越中守居也。

一、廿六日 晴、航桑名海、抵宮、海程七里、風汎得宜、辰時發舟、午後抵宮、既而拜熱田社、午後晴、

一、廿七日 晴、辰時過登寺之前、經鳴海、大濱、抵尾參之界、有川曰界川、桶峽而拜今川上總介義元及諸

將之墓、觀勒石之文、弔古悲今、恨々而去、至池鯉府傳餐、過矢橋、入岡崎而宿、橋長二百八間、稱日本第一之大橋、岡崎有城、本多中務少輔居也、

一、廿八日 晴、卯後發岡崎、過大岡紀伊守之邸前、至藤川、赤城山漸迫近、譬如舟進海門、然亦無高峯峻

嶺、過赤坂、則復漸曠漠、過吉田橋、左顧則粉壁土壘、屹然臨流、是松平伊豆守之城也、過橋、入市而宿焉、夜間大雨、至曉乃晴、

一、廿九日 晴、寅半發吉田、抵三川始朝、抵白瀉始望富岳、道右望大東洋、抵荒井傳餐、過關而舟

渡一里、(上欄前恐舞誤、春亦妄)達前坂、穿列松之間三里、宿濱松、井上河內守所居也、遠州之俗、以五月操風箏、蓋他邦重陽

節、豎旛幟于庭之類云、今三四月之交、而既多見之、又聞放銃聲數箇、意習其技也、

一、四月朔日 晴、卯後發濱松、舟渡天龍川、取便道、一里而抵見付、由大道、則二里許云、抵袋井傳

餐、宿懸川、大田攝津守所居也、袋井、懸川之間、樹木柱、書曰松平美作守知行所、申時、久留米侯過懸川

馭而西上、

一、二日 晴、寅前發懸川、越日坂、小夜中山、過菊川、踰金谷臺、此間險阻崎嶇、人馬共困、肩輿過大猪

川、是遠駿之界也、大井々字、俗多用井字、此更書猪字、亦有所以乎、春安、(欄外)大猪川之情狀、以見聞之所及、菅普帥之詩所稱、可謂破的矣、草茅危言所謂石梁、未

知何如、但隨流派之交易而架橋者、亦甚便、有甚便之術而不為、徒糜諸侯之金、以餓金谷、島田之人口、

悲哉、宿藤枝驛、夕前有瀬戸川、可揭而涉、大猪川以東、爲田中城主本多豊前守所領、

一、三日 晴、寅時發藤枝驛、曉暗不能親田中城、憾甚、過岡部驛、越宇都屋嶺、嶺勢峻峭、四山連屬、

與日坂、中山、金谷臺、形勢相類、過鞠子驛、渡安部川、水深及腰、經府中、而宿江尻驛、

一、四日 晴、卯後發江尻、抵興津、江尻、興津之間、有清見寺領、自餘皆寺西直次郎代官所也、過興津川之

假橋、越薩陀嶺、過田子浦、經由井、蒲原、皆濱海之地也、海面斜斗出者、爲伊豆、繞富士山之麓、舟渡

富士川、此川發源富山、直注于海、水勢駛疾、宿吉原、驛前有木柱、書曰、從是東、江川太郎左衛門御代官

所、夜間雨、

一、五日 微雨、卯後發吉原、過原、沼津、宿伊豆國三島、沼津城、水野出羽守所居也、武田信玄之時、高坂

彈正築焉云、城外有鹿野川、因以爲險、本月三日、遇先考十七忌辰、欲作一詩、構思數日、至是乃成、

因錄于茲、曰、二千里外逆旅人、鳥鳴花落亦傷神、況乃四月初三日、遇先考十七忌辰、先考青年乃大志、欲

明經義、究武事、天道無知不假年、命夫空濺淚、吾曾阿姪爲螟蛉、六歲爲孤太伶仃、定省無由悉平生、訓誡何得與趨庭、奮然擔笈何所許、父志方將續前緒、成業由來在苦辛、任重道遠肯寧處、獨收淚痕

詠悲歌、情懷多緒附長嗟、乃眷西顧墳墓遠、雲山萬疊天一涯、

一、六日 翳、寅後發三島、登宮根嶺、行里餘、乃天明、後顧則沼津三島在自下、左顧富山、則半腹以上積雪皓々、嶺上有豆相之界、又有馭、有湖、有關、越嶺、宿小田原、海濱之地也、有城、大久保加賀守所居也、宮根嶺、上下八里許、道峻泥滑、人踏馬仆、所謂天險者也、戲作小詩、曰、風波起平地、荆棘塞通衢、誰謂箱根險、請嘗觀世途、

一、七日 翳、卯後發小田原、肩輿渡酒匂川、經大磯、平塚、舟渡馬入川、道常與海相隨、未後抵藤澤、未抵里餘、遇雨、夜雨益甚、至曉而晴、

一、八日 晴、卯前發藤沢、經戶塚、保土谷、神奈川、午後抵河崎、從藤沢至河崎、皆代官青山錄平之所管也、戶塚、保土谷之間、相武之界也、但未得詳其所、在耳、保土谷、神奈川、皆濱海之駅也、河崎駅前有川、橋曰鶴見、蓋依郵名也、

一、九日 翳、丑半時發河崎、舟渡六郷川、抵品川、乃天明、過泉岳寺前、辰時抵于江戸櫻田邸、自三月五日出家、三十五日、長途已倦、抵邸則如瘴鳥入巢、已時 熊旛嚴然到邸矣、

安政己未十二月十四日

門人高杉春風闕了

(萩市松陰神社藏 校合濟㊟)

嘉永四年辛亥

費用錄

口腹之欲、應感而發、見斯錄也、泯然沮喪、

吉田大次郎

解題并凡例

一、松陰は、嘉永四年三月五日、兵學研究の爲、萩を發して東行し、四月九日江戸着、爾後同輩と共に、専ら藩邸内に居住して修業した、此の費用録は其の時の金錢出納簿である、

一、原本は半紙八ツ折十四枚を綴ぢたるものである、

一、扉の文字は原本表紙の通である、

(委員 廣瀬豊)

覺

一 壹步 周布氏武教全書代
 一 貳朱 飯田氏同斷
 一 貳步 阿兄買書料
 一 壹步 同中同斷

受

月別之分八月^(ムシ)
 一金壹兩二^(ムシ)□□六百六十文

覺

一 壹兩壹步ト五百拾五文
 但道中宿料
 四百六拾八文^(朱書)
 一 壹步ト八百六文
 但竹策車料

費用録

一 貳步與九六錢^(ムシ)□貳拾八文

但道中^(ムシ)□□料
 一 壹朱步^(朱書)
 一 五百文 楠公碑
 一 貳朱 大橋手本沿革圖共
 一 貳步 卓一脚

一 一百五十文 藤倉一足
 一 一百五十文 木履緒共
 一 貳朱ト百文 諏訪平袴地
 一 百文 伏見扇子三本
 一 二百六十四文 甲懸濱松
 着府已來

一 五百五十文
 但硯壹面朱墨各壹
 一 貳步貳朱
 但繪五幅^(ムシ)□團壹枚代

一四百六拾文
 但武鑑二冊江^(ムシ)圖一枚
 一貳步貳朱與三百^(ムシ)九文
 但武教全書二部練兵実備壹部にて
 一八十文
 但朱研壹面
 一貳步^(朱書)
 但上下地半^(ムシ)
 一八文
 梅実
 一十六拾四文
 榊三枚
 雲井香元結
 一七文
 書翰袋
 一八文
 金山寺
 一廿五日
 同断
 一八文
 聖武記附録
 一拾八文

一壹歩ト三百文
 脇さし
 一拾六文
 易經集註
 一貳匁三分
 量地必携
 一八拾文
 經板一冊
 一拾三文
 草り
 一壹歩
 良齋に束修
 一拾六文
 梅実
 一^(朱書)百文
 四月分
 風呂錢^(朱書)
 一貳匁壹分
 一^(刺カ)匁刀
 一^(砥カ)匁刀
 一貳匁
 一廿四文
 一十五拾文
 但四月分木錢
 朔日^(五匁)
 一五拾五文
 但五德火著買得三人分割符^(箸カ)

一四拾八文
 瓢狀德利
 同日
 一貳百廿四文
 手拭二ツ
 同日
 一卅貳文
 鯛
 二日
 一四拾三文
 土瓶代三人割賦
 二日
 一拾六文
 金山寺
 三日
 一九拾文
 炭
 四日
 一三拾六文
 茅卷
 一八文
 もち
 一貳百文
 書物箱
 一八拾六文六分余
 但風切じよたん炭ととも三人分割符
 六日
 一拾六文
 煎豆
 八日
 一廿八文
 漬菜^(朱書)
 同日
 一六拾八文
 鯉節^(朱書)
 一金壹兩ト錢五百四拾七文

但明キ荷壹箇懸目拾五貫八百目之賃御中前達持登り相
 頼候分
 一十一日
 一八文
 金山寺
 一十三日
 一八文
 ラツケウ
 同日
 一八百六文
 モチ
 一十四日
 一八文
 ヒシヲ
 同日
 一壹歩
 茶溪先生に束修
 同日
 一十七拾四文
 半紙五帖塵紙二帖
 一十五日
 一三拾貳文
 但良齋會々直様庄原文助に行候節途中にて餅ヲ以而飯
 二當候代
 一十六日
 一八文
 梅実
 一十七日
 一七文
 やたら漬
 同日
 一貳朱ト五百文
 八大家文
 一十八日
 一八文
 於るれ

費用録

同日 一三及百二十四文 笠緒共
 十九日 一六拾六文 ちち
 廿日 一八文 梅実
 廿一日 一四文 塩
 廿二日 一八文 ちち
 同日 一六文 きうり漬
 同日 一貳朱ト五百文 蚊轆
 廿三日 一四文 煮豆 (朱書)
 廿四日 一四拾文 濯鈍
 同日 一貳拾四文 藤くら
 同日 一貳百文 佐久間修理に扇子
 同日 一壹歩 山鹿素水に束脩
 廿五日 一貳拾文 ちち
 同日 一拾六文 料理
 廿七日 一拾文 蠻語箋

一八四

同日 一壹及八分 士道要論
 同日 一四文 新漬大根
 廿八日 一拾六文 鱒
 同日 一貳拾八文 ちち
 廿九日 一三文 しお
 同日 一三文 す
 同日 一四文 のり
 六月朔日 一八文 美濃紙
 同日 一貳拾文 ちち
 同日 一四文 大根漬
 二日 一四拾文
 但五月分木錢
 三日 一八拾文 (朱書)
 貸本代落穂集見料
 同日 一拾貳文 料理

同日 一五文
 五月分風呂錢
 同日 一四文 漬もの (朱書)
 同日 一四文
 同日 一四九拾四文

但去今月油付木燈心割方

一五文 塩 (朱書)
 五日 一拾六文 煮豆
 七日 一壹歩 七嶋圖
 同日 一壹歩 八紘通誌
 同日 一拾文 四書集註古本
 同日 一拾六文 陳艾
 同日 一貳拾八文 料理 (朱書)
 八日 一十六文 餅
 十日 一五六錢 きうり
 同日 一廿錢 煎豆 (朱書)

費用録

一八五

十二日 一五拾八文 肴
 同日 一貳拾貳文 煎豆
 一三拾貳文 書挟み
 一四拾貳文 刀懸割賦
 一貳歩二朱許 浦賀行雜費
 廿二日 一十六文 煮染
 廿三日 一四文 ヤタラ
 同日 一四文 房州圖
 同日 一貳百八十文 矢立墨池
 同日 一八文 黒目
 廿四日 一十二文 梅實
 廿五日 一四拾八文 ソバ
 同日 一貳拾文 煮豆
 同日 一四文 茄子漬
 廿六日 一十五文 豆腐

費用録

廿一日 一八文
 廿二日 一百四十四文
 同日 一百四十四文
 廿四日 一二十四文
 廿四日 一五十四文
 同日 古賀に暑中見舞
 餅 一廿四文
 煮豆 一八文
 ヤタラ 一八文
 餅 一四十文
 廿七日 一八文
 廿八日 一五十六文
 同日 一十二文
 廿九日 一廿四文
 同日 一八文
 晦日 一八文
 ヒシヲ

同日 一百文
 七月分風呂銭 同日
 同日 一四十四文
 同日 木錢
 八月朔日 一十七十四文
 同日 一八文
 同日 一八文
 三日 一八文
 四日 一八文
 四日 一八文
 四日 一八文
 同日 一四十二文
 同日 一四十二文
 同日 一四十二文
 同日 一八文
 同日 一八文
 五日 一四文
 此已下 一四文
 一二十目 一四文
 一一步二朱 一四文

目黒行費
 ヒシヲ
 ラツケウ
 テツカ
 テツカ
 朱
 半紙五帖
 煮豆
 塩
 訳鍵
 少微通鑑

費用録

六日 一八文
 七日 一八文
 一三又八分
 一二又七分
 八日 一十二文
 同日 一十二文
 九日 一八文
 十日 一八文
 十一日 一四十八文
 十二日 一十二文
 一八文
 一壹步二朱ト四又五分
 十二日 一二十文
 十二日 一二十文
 十二日 一八文
 懐中
 結髪
 鏡戈

テツカ
 テツカ
 楠子碑文懸物二卷
 茄子漬梅実
 處天
 鏡架
 金山
 蕎麥
 梅実金山
 金山大根
 陣笠壹ツ緒共

十三日 一八文
 一四十四文
 十四日 一十二文
 同日 一十七十文
 同日 一四十四文
 同日 一八文
 同日 一八文
 同日 一八拾貳文
 十五日 一貳百文
 但中谷送別之節板橋にて
 十五日 一十六文
 同日 一十二文
 同日 一五十五文
 同日 一五十五文
 同日 一五十五文
 同日 一五十五文
 但今月半月分木代

梅実辣薑
 藤庫
 鏡戈茄子漬
 煙草入
 眞書筆
 水
 水油
 草鞋旧債
 青木に錢
 三分利に同
 久ト淺に同

辛亥日記

一十六日	一十二文	桃実
同日	一四十八文	温飩
十七日	一三十二文	髪附
十八日	一三十八文	飯
十九日	一三十四文	團子
同日	一壹匁	弁當宮
廿一日	一九文	線香
同日	一八文	鏡戈
廿二日	一八文	蔗
廿三日	一四文	鏡戈
廿四日	一五十六文	飯
廿五日	一貳朱	追々遣尽ス

(東京市吉田茂子氏藏 校合濟園)

解題并凡例

一、辛亥日記は嘉永四年、松陰江戸遊學中の日記で、五月朔日より十二月六日に至る、但し六月十三日より二十二日迄、相房沿岸視察中の日記は別に記すとあるが、失ひて今は見えない、原本は半紙縦横四折八枚の小冊子で、表紙はない、吉田庫三氏は辛亥江戸遊學日記と名づけて居るが、長いから略して表記の如くした、

一、巻尾衣服其外用具附立は編者の附けたものである、半紙八ツ折七枚の小帳で、嘉永四年東行出立の際準備した物品の品目扣であらう、

(委員 廣瀬豊)

日記

- 一 五月朔日 晴、朝馬場、午後良齋書經會、
- 一 二日 晴、夕方雨、未後良齋有備館講義承る、
- 一 三日 雨、夕方有備館兵學會、
- 一 四日 雨、夕方有備館大學會、
- 一 五日 雨、手習三枚、兵學小識五、論七卒業二十九枚、通鑑三十九枚、
- 一 六日 翳、通鑑五十七枚、落穂集十六枚、手習六枚半、
- 一 七日 翳、馬場三鞍、午後より雨、有備館大學會、夜吳子初會、通鑑二十五枚、論語大全九枚、飛脚來り、玉木ヨリ書狀至ル、
- 一 八日 翳、午後良齋論語會、通鑑二十四枚、臨池八枚、

- 一 九 (日股カ) (夜股) 朝馬場二鞍、午後飯田町ニ至ル、既ニ歸リ、有備館寄會稽古ヲ見ル、通鑑十五枚、易經六枚、書四葉、写書三枚、通鑑又七枚、
- 一 十日 午後有備館大學會、通鑑四十三枚、手習三枚、
- 一 十一日 朝擊劍二、兼山、午後良齋書經講、通鑑二十五枚、
- 一 十二日 朝孫子進講、晝有備館中庸會、通鑑二十七枚、夜田上字平太至ル、
- 一 十三日 朝馬場三鞍、通鑑四十二枚、午後有備館兵學會、手習五枚、
- 一 十四日 古賀茶溪先生・増如川ニ見ユ、夕方有備館中庸會、通鑑二十二枚、
- 一 十五日 (宋書) 晴、朝良齋易會、直訪ニ莊原文助、中庸會ヲレ之(風書)キク、通鑑十四枚、手習二枚、
- 一 十六日 三井善右衛門今日出足之事、朝馬場三鞍、通鑑二十八枚、午後大學會、漢書蕭曹傳

ヲ讀ム、朝劍(朱書)一糸、
 十七日 雨、通鑑六枚、論語下読、午後初高杉會、夜
 吳子會、朝劍(朱書)一粟、午後晴、
 十八日 晴、香川惣右衛門ト兩國邊俳何、長齋論語
 會、夜書讀ヲ綴ル、
 十九日 晴、朝馬場二鞍、午後茶溪、
 廿日 微雨陰翳、書翰阿兄・井與・宇野(叔母)・黒川・平岡(兼母)に與
 ふる分ヲ作ル、通鑑二十六枚、劍形、
 廿一日 長齋書經講、馬場二鞍、劍形
 廿二日 朝館ニテ論語註會讀、長齋來リ講ス、其應接
 ナナス、山田亦介ニ與ル書ヲ作ル、又會讀、孫子謀功
 篇下見、通鑑十八枚、今朝ヨリ御飛脚立ツ、
 廿三日 晴、午後有備官論語註會讀、通鑑十五枚、八
 大家文二十二枚、
 廿四日 翳、朝山鹿素水・佐久間修理・宮部鼎藏ヲ訪

フ、午後中庸會、有備官ニテ 通鑑八枚、易下読、
 一廿五日 朝有備官論語註會讀、馬場、長齋易會、通
 鑑十八枚、
 一廿六日 朝會讀、擊劍一、馬、素水、武教全書會、
 宮部ヲ訪フ、練陣篇、八陣
 一廿七日 雨、朝會讀、劍形、午後古賀ヲ訪フニ不
 遇、平戸邸ニ至ル、葉山野内(佐内の息)・楠木定太夫ニ逢フ、通
 鑑十四枚、五月十五日ノ家書來ル、
 一廿八日 劍形、素水會、今日ヨリ少シク蛮語ヲ學フ、
 一廿九日 劍形、朝會讀、夕方大學會、通鑑十枚、
 一六月朔日 朝會讀、劍形、夕方素水會、通鑑十一枚、
 一二日 馬二(馬名)、若葉(馬名)、劍形、長齋來講、午後語註會讀、
 兵學會、
 一三日(朱書) 今日ヨリ足痛、朝論語註、通鑑八、八大家
 文十、

一四日 午後有備館中庸會、
 一五日
 一六日 午後大學會、大學卒ル、
 一七日 宮部來リ、聖武記ヲ會讀、聖武記一、通鑑
 九、曹參論、
 一八日 今日ヨリ出ル、長齋、曹參論ヲ持テ行 古賀・山鹿會へ
 至ル、
 一九日 朝 宮部ニ至リ、會讀、
 一十日 夜椋氏孫子會初ル、
 一十一日 文学 上聽、送三人登富山ニ序ヲ得、午後
 九鬼式部少輔御屋敷兵學會へ行ク、
 一十二日 今日文成ル、是ヲ出ス、
 十三日(補記) 浦河行ヲナス、廿二日歸ル、其間別ニ記アリ、
 廿三日 八家文十一、廿六日、兼重著、史記一二、
 廿八日 昨夜御飛脚來ル、麻布ニ至ル、士道要論會讀

始ル、梨羽・永井著、史記三、新論、與中
 七月三日 細川に行、甲冑ヲミル、
 四日 史記四五、
 五日 葉山野内來ル、
 九日 宮部・長原來ル、有備官ニ會讀、
 十日 史記六七、
 十五日 蜷川・中川・西村・吉田著、
 七月廿日 佐久間入門、
 晦日 兼重・小倉著、
 八月朔日 長井發、
 八月二日 佐世著、
 劉氏人譜四冊卒業、
 八月五日 小倉同舎に來ル、
 八月九日 御飛脚立ツ、仕舞次第、武道初心集三冊卒
 業、

八月十五日 (松三郎正亮) 中谷發程、送テ板橋駅ニ至ル、

八月十六日

御發駕八、後雨、

八月廿四日 筑州・堀川・中川・吉田等發、

八月廿七日 向嶋七草、隅田川木母寺・上野篠笠等散

步、

九月五日 御国狀來ル、

九月朔日 日課△史十枚□写二枚、不_レ及者不_レ補、過者棄去、○佐久間、史十四枚、写

二枚、二日△□、三日○△□、四日○、旅_三の意味不明

九月九日 山鹿素水ニ從ヒ、成島桓之介に行ク、同日

御目付木梨其外來ル、

九月十四日 御国狀落手、

九月十三日 井上御目付發、

九月十一日 伏見_三之御飛脚立、

九月十五日 神田祭、本多伊與守様之屋敷、書狀仕出

ス、

九月十六日 梨羽直衛立、

九月十七日 (良藏・壯太郎・照藏・新三郎・五藏即江橋五郎) 來原・井上・宮部・鳥山・安藝與永代橋下舟

遊、

九月廿一日 御飛脚來ル、

九月廿六日 素行祭、惣七着、

九月廿七日 泉岳寺・海晏寺に行ク、今日惣七來ル、事

斯語其外落手、

九月晦日 御飛脚立、

十月四日 斎藤彌九郎を訪ふ、

十月九日 葛飾御屋しきニ行ク、

十月十日 安藝・鳥山與目黒・池上・矢口新田義興ノ祠へ行ク、

十月十一日 祖式縫殿着邸、

十二月六日 肝付七之丞を訪、

九月中旬_三佐久間に勤怠

十一日、十二日、十三日、十四日、十五日十六日、十七日、十八日、十九日廿日廿一日廿二日廿三日廿四日廿五日廿六日廿七日廿八日廿九日晦日

(日附の下の點は日附に密接して居つて、勤怠の何れかを示すものか、或は單に句切であるか不明である)

九月十七日_六

一五兩

△一部兎初に戻ス、

内二朱_三舟遊之節酒料

二朱_三追々雜費、

△二朱泉岳寺に行し時錢ニ代フ、

内

壹匁三分 日本圖

百二十文

二百廿四文 下駄

辛亥日記

一十六文 義士墓圖

△二朱 九月廿八日兩替、

△二朱 九月分下用、

△二朱 十月十三日兩替、

七十二文 羽折締

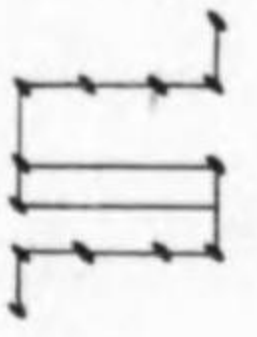
百文 九月分風呂錢

△壹步 二朱

△壹步 十月分下用、

(高杉筆) 此、先生、辛亥東都着後之日記、先生邸ニ抵四月五日也、因_レ是可知、

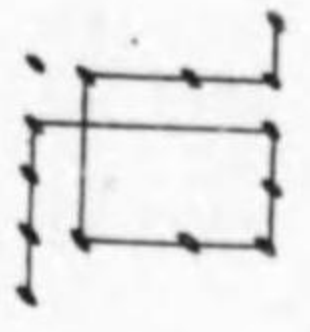
門人高杉晋作闕了



一三六八 山鹿

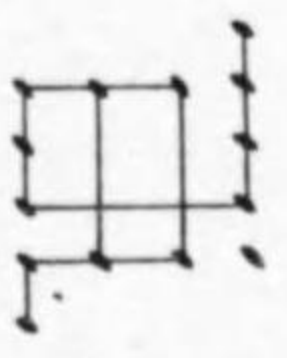
二三七九 聖武記

四八



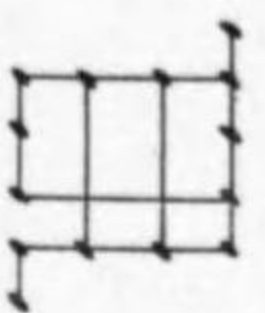
佐久間

一五八



長齋

二



許謨

有備館

山鹿 有備館 山鹿

一 二 三 四 五
長齋 同長齋 輪邸 佐久間

長齋 山鹿
六 八
山鹿 佐久間 聖武記
長齋 佐久間
(東京市吉田茂子氏藏 校合濟堂)

(附錄)

辛亥仲春
衣服其外用具附立

吉田大次郎

行李入込

- 一 紋小倉尻割羽織 一ツ
- 一 縞袴 一ツ
- 一 日記 壹冊
- 一 詩韻含英 四冊
- 一 日本圖 一折
- 一 武鑑 二冊
- 一 地名附立 一冊
- 一 和漢年代學要 一冊

隨身之具附立

- 一 揮 一ツ
- 一 襦半 一ツ
- 一 綿子 一ツ
- 一 綿入半服 一ツ
- 一 縞ノ袴 一ツ
- 一 浮織尻割羽折 一ツ
- 一 股引 一ツ
- 一 帶締 一ツ
- 一 帶 一ツ
- 一 大小 壹腰
- 一 矢立 一ツ
- 一 扇子 一ツ
- 一 懐中 一ツ
- 一 手拭 一ツ

衣服附立

- 一 袖形付綿入 壹
- 一 羽二重上張 壹
- 一 縞縮綿綿入 壹
- 一 同半服 壹
- 一 同綿子 壹
- 一 鬘斗目 壹
- 一 岸縞綿子 壹
- 一 縞半 五
- 一 羽二重半服 壹
- 一 形式袴 貳
- 一 縞袴 三
- 一 木綿上張 三
- 一 縞綿入 貳
- 一 形付綿入 壹

- 一 尻割羽折 三
- 一 形付羽折 壹
- 一 紋付羽折 壹
- 一 縮綿羽折 壹
- 一 形付拾半服 壹
- 一 縞綿入羽折 壹
- 一 形付綿入半服 壹
- 一 帶 五
- 一 御紋御上下 壹具
- 一 自紋上下 壹
- 一 半袴 三
- 一 散木黙袴 壹
- 一 踏込 壹
- 一 火事羽折 壹
- 一 御紋形むら 壹

自紋さらし同

- 一 自紋さらし同 壹
- 一 きむら 貳
- 一 縞單衣 四
- 一 形同 壹
- 一 紋付同 壹
- 一 さらし羽折 壹
- 一 縞半 壹
- 一 仙臺平袴 壹
- 一 馬乘袴 貳
- 一 浴衣 壹
- 一 襦袋 壹副
- 一 筆 壹

書籍附立

- 一 武教全書本文 八冊
 - 一 同註書 拾冊
 - 一 七書直解 拾四冊
 - 一 吳子副註 一冊
 - 一 孫子魏武註 一冊
- (東京市吉田茂子氏藏 校合濟園)

東北遊日記

附東征稿

解題并凡例

一、東北遊日記は、松陰が嘉永四年十二月十四日より、同五年四月五日まで百四十日間、江戸を起點として、東北地方を旅行した時の日記である、

一、この旅行は、時恰も冬季を經過し、地も東北地方であるから、風雪の難苦が多く、二月七八日奥越の界の雪、同月十九日、二十日、越後北部の雪には行路の難澁が思ひやられ、佐渡海上風波の荒き爲、出雲崎・小木兩地滞留の久しき苦悶も知られる、要するに、時候といひ、不便の境といひ、日數といひ、旅行中最困難なもので、二十三歳の松陰の身に取つても、普通の試練ではなかつたであらう、

一、當時の藩法、凡そ藩人の旅行には、必ず過書を授くるのであつたが、松陰は同伴者との約束の爲に、已むを得ず、その過書の國元より來るを待たず、即ち藩允なくして出發した故、藩としては亡命の取扱にした、後年自ら亡邸、上書、入海などといへる、その亡邸が此事であつて、この過失は後の功で償はんと誓ひ、さてこそ、これより次々に著しき事蹟の局面が開かれた、故に、この遊歴は松陰の所謂二十一回猛の序幕である、

一、遊歴中、始は熊本の宮部鼎藏、南部の江幡五郎變名安藝五藏 又は那珂彌八の二人が同伴者であつたが、二月廿八日より、江幡は白河で別れ去り、後は宮部と同伴で往復したところが、三月二十二日刈田宮で、江幡と邂逅して、三人で二泊した事がある、さて、江幡のかく離合の定らぬは、其の亡兄春菴の爲に讐を尋ねるからで、この日記にも徹にその

事由が書いてあるが、これを明に記したものに、松陰の嘉永六年二月作の東征稿がある、この日記の巻尾に添へたのがそれである。

一、この日記の自筆初稿と、これを整理したと見える他筆本松陰の訂正とが、萩市松陰神社に藏せられてある、初稿は、當時携帯した日記本の紙を一々離して順々に貼り繼いで、大幅の懸物にしてある、その紙数が三十九枚、其内日記が最初より閏二月十八日まで紙数三十五枚、其餘の紙には、閲讀や談話の書取らしい雜記がしてあり、つまり日記は完備して居らぬ、さて、熊本の鑄方氏に藏する東北遊日記は正しく松陰自筆であるが、これを松陰神社藏の他筆本に比べるに、孰れも完備しては居るが、鑄方本の方は未だ文章洗煉の至らぬ處があつて、他筆本がそれよりも後に整理せられたものと見えるから、本全集編纂には、神社藏の他筆本を原本とした、但、初稿本、鑄方本の記載中、この日記中の事實参考の料となるものは、上欄、行間若くは巻尾に附加して置いた、尤も原本が明かに誤寫と認められる場合は、その旨を註して鑄方本を本文に入れた。

一、附載した東征稿は自筆本不明につき、岡村閑翁の手寫本によつた、岡村は嘉永六年五月四日に松陰に面會した事のある藤川禎二又は於菟馬と同一人であるから、この寫本は相當信頼するに足るものと思はれる。

一、東北遊日記の原本は、大さ半紙二つ折形、表紙は厚紙綠色で標題はない、本文用紙は墨野、全面二十行で、横線なく、毎行二十字で他筆、行間上欄に松陰の書入がある。

一、東北遊日記の刊行本としては、尊攘堂藏版の木版本と、吉田庫三編輯「松陰先生遺著」第二編にあるものがある。

る、又東征稿は、大正六年雜誌「史文」に和譯して掲載されたことがある。

(委員 安藤紀一)

東北遊日記

有志之士、時平則讀書學道、論經國之大計、議古今之得失、一旦變起、則從戎馬之間、料敵締交、建長策而利國家、是本生之志也、然而茫乎天下之形勢、何以得之、余客歲遊鎮西、今春抵東武、畧跋涉畿內山陽西海東海、而東山北陸、土曠山峻、自古英雄割據焉、奸兇巢穴焉、且東連滿洲、北隣鄂羅、是最經國大計之所關、而宜觀古今得失者也、而余未經其地、深以爲恨矣、頃肥人宮部鼎藏謀東北遊于余、余喜而諾之、會與人安藝五藏亦將抵常奧、遂相約同行矣、余因作一冊子、古今得失、山川形勢、凡所目擊、皆將以日記之、

嘉永四年臘月

吉田大次郎藤矩方識

辛亥十二月十四日 翳、已時亡命櫻田邸、留一詩云、一別如胡越、再逢已無期、擧頭觀宇宙、大道到處隨、明月無今古、白日同華夷、高山與景行、仰行豈復疑、不忠不孝事、誰肯甘爲之、一諾不可忽、流落何足辭、縱爲一時負、報國尙堪爲、又留一封書、與宮部鼎藏。安藝五藏、言其由、初以本月十五日赤穂義士遂事之日也、余與三子約東行發輒以是日、

*地名に讀假名を附したものは、多く讀方本による。

江戸日本橋ヨリ千住へ二里、而ノ新宿へ一里半、而ノ松戸へ一里半、凡五里餘、(初稿記載) 人家頗多シ、然レ氏子ガ亡命ヲ知ルカ、亦一家ヲ旅故カ、一家モ予ヲ宿セシメズ、本郷村ニ至リ、民家ニ入、隣ヲ乞フ、亦許サズ、(同) 十五日、村童ノ爲ニ学而ノ首章

前数日、過書之事起、藩人來原良藏曰、勿レ憂、吾論諸大夫、子以必行一定志、乃謂三子曰、決無不可行之理、余服良藏之果斷、心窃自誓曰、官若不允、吾必亡命矣、於是遲疑、人必曰長州人優柔不斷、是辱國家也、亡命者、雖如負國家、而其罪止一身、比之辱國家、得失何如歟、既而良藏謂之大夫、大夫曰、且與參政議、參政曰、無過書而越境、万一有レ事、不レ得確乎稱松平大膳大夫臣吉田大次郎、口未開而膽先餒矣、安保不辱國体乎、此事縱令有千百故事、非仰公裁、決不レ可擅斷、大夫無如其論確而志堅、遂以事首國、而余則行所自誓、非不願負國家、誠丈夫一諾不レ可忽也、夫大丈夫出國、一言可以榮國、又可レ以辱國、國家榮辱之所係、豈區々一身之故哉、越千住橋、至千住驛、日本橋至此二里、皆連蔓鱗々中也、右折取道、是爲水戸道、狹家稀、四顧不見山、唯有平田漫々耳、過綾瀨川橋、經新宿至松戸驛、新宿駅前中川、松戸駅前松戸川、皆舟濟之、其不架橋、便舟之上下者張帆而過也、松戸川兩岸有番所、駅前立柱、書曰御代官竹垣三右衛門支配所、自此下總葛飾郡也、時日已落、欲宿此驛、而恐追捕或及、至本郷村、入山二町許、投三本福寺、寺係時宗、僧了音者在焉、變姓名曰長州鄙人松野他三郎、亦遊歷中一奇事也、行程五里餘、

十五日 晴、辰時出寺、行三里、爲小金驛、過驛則廣原漫々、即小金原、而幕府操場也、

ヲ講ス、朝五ツ時寺ヲ出、(同) *題句一字足らぬが原本のまゝ。

山田三郎ヲ問ヘ水海道ヨリ、一奴ヲ伴ヒ行ク、(同)

右折ノ小路ニ入ル、是ヨリ奴ト半腹ニ宿ス、通一丁目ト云所ニ、(同)

十七日朝、主人山田飛カ詩數幅ヲ出シ示シ、且余ガ作ヲ求ム、(同) 此日行程八里、山ヲ攀テ荆ヲ排キ、月出テ笠間ニ入り宿ス、牧野左京大夫八万石ノ城下ナリ、(同)

見野馬九匹、正(讀方本)過原、右視手智沼、直行則可下經安彦諸驛、過土浦、以至水戸、余欲過水海道、故左折而入小路、經花井村、出船戶、舟濟刀根川、筑波山當面前、因作詩云、筑波山、刀根川、吾今俯仰發浩嘆、刀根之川遠達海、筑波之山高衝天、吾原浮蹤淺露質、觀物寓戒豈徒然、氣象高峻志趣遠、須臾勿忘川與山、濟川行平原中、宿水海道、行程八里、自左折入小路、皆田間原中、路岐多端、且迷且得、而後始得達水海道驛、時既夜、(此の三字、讀方本にはない) 十六日 晴、出驛行少許、右折入田間小路、舟濟小貝川、是爲四手渡川、發源于小栗、至土田井入刀根川云、出豊田驛、又右折入松間小路、經大砂・田中諸村、出北條驛、是土浦侯所領、登筑波半腹、有驛、宿焉、筑波、山名、亦以名驛、名郡、屬常陸國、時天日尙高、眺望甚潤、快不可言、行程七里、 十七日 晴、出驛、極筑波二嶺、一曰男体、一曰女体、是日、天氣晴朗、眺望特宜、關東八州之形勢、歷々可指、山而富士・日光・奈須、水而刀根・那珂、皆聚于目前、但余暗于地理、且獨行踽々、不能論評其山水爲憾耳、有詩云、去年今月在鎮西、溫泉嶽上極攀躋、當時風雪掠空起、蘇山筑水望總迷、今年反作關東役、季冬乃跨筑波脊、左右顧盼快愉哉、富山白玉刀水碧、一身踪跡且難常、何況天上陰與晴、賀生哭死定幾許、千里人煙色蒼々、嗚呼溫泉自有蘇筑友、筑波自有富刀耦、不似游子辭家鄉、睽離兄弟與父母、越嶺、下

此夜、大町ト云ニ宿ス、(同)

眞壁、々々、駅名、亦以名郡、係三笠間侯所領、過レ駅行里許、越^{キツエ}三休惠山、便道出^{キツエ}三笠間、々々文武分館、文日三時習館、武日三講武館、夜録余姓名、使^{キツエ}人文館教授森田哲之進、且告^{キツエ}所以來者爲^{キツエ}學兵與^{キツエ}經也、

孟子首章ヲ講シ、登筑波山ノ詩ヲ示ス、(同)

十八日 晴、朝、時習館小吏大田尾安藏來、問^{キツエ}余學所主、午時、又來、導^{キツエ}余至^{キツエ}館、學館番頭加茂多十郎、須藤文太夫、目附某々、教授森田哲之進、長沼流兵家守岡善八郎、及諸學職、諸生、皆會、凡二十五人、坐次齊整、談論不^{キツエ}其快、使^{キツエ}余講^{キツエ}經、余講^{キツエ}孟子首章、蓋館法也、夜、手塚多助來訪、兵家也、談論數次、多助語曰、往年水府老公之時、余嘗遊^{キツエ}焉、寓^{キツエ}砲家梅澤孫太郎家、一夕比隣喧嘩、余驚問^{キツエ}之、梅澤曰、鑄^{キツエ}砲耳、余起往見^{キツエ}之、銅佛鐘磬、積堆如山、方鼓^{キツエ}鑼起^{キツエ}火、叩^{キツエ}其所^{キツエ}由來、則曰、收^{キツエ}佛寺所^{キツエ}有而聚^{キツエ}之、余拍^{キツエ}掌稱^{キツエ}快、後聞^{キツエ}之、有^{キツエ}忽砲口徑六寸、及七寸、共以^{キツエ}三六十四卦^{キツエ}爲^{キツエ}號、又有^{キツエ}以^{キツエ}周興嗣千文^{キツエ}爲^{キツエ}號者、其他以^{キツエ}八卦^{キツエ}以^{キツエ}三六禽^{キツエ}爲^{キツエ}號之類、不^{キツエ}可^{キツエ}勝數^{キツエ}矣、方^{キツエ}是時^{キツエ}、比隣之國、見^{キツエ}公之所^{キツエ}爲^{キツエ}、且嫉^{キツエ}且駭、爲^{キツエ}狂爲^{キツエ}暴、不^{キツエ}久、公遂獲^{キツエ}罪於幕府、於是武備之政忽^{キツエ}諸、小國從^{キツエ}大國之後、亦將^{キツエ}有^{キツエ}所^{キツエ}更張^{キツエ}、及^{キツエ}公既獲^{キツエ}罪、憐^{キツエ}々畏縮^{キツエ}之不^{キツエ}暇、又何能^{キツエ}爲^{キツエ}、千歲機會、一朝而去、可^{キツエ}勝嘆^{キツエ}哉、

十九日 晴、發^{キツエ}笠間、經^{キツエ}新關、大足、大塚、赤塚、至^{キツエ}水戸、未^{キツエ}至^{キツエ}水戸一里、立柱標、曰、從^{キツエ}是東水戸領、訪^{キツエ}永井政助、政助不^{キツエ}在、逢^{キツエ}子芳之助、留^{キツエ}余宿焉、行程五里、笠間水戸皆屬^{キツエ}

此所ヨリ又少シ手前、破城アト云、(同)

茨木郡、

廿日 晴、終日不^{キツエ}出、晴時政助歸、夜作^{キツエ}詩曰、書劍飄然滯^{キツエ}天涯、志業未^{キツエ}遂歲空加、一身百感向^{キツエ}誰說、枉借^{キツエ}三七字、發^{キツエ}浩歌、嗟^{キツエ}吾天賦原劣弱、闕^{キツエ}如雄才與^{キツエ}大畧、慷慨志氣雖^{キツエ}空存、讀書未^{キツエ}得^{キツエ}涉^{キツエ}浩博、文字章句措^{キツエ}不^{キツエ}精、經濟實用亦無^{キツエ}成、舍^{キツエ}魚遂併^{キツエ}熊掌^{キツエ}舍、廿年失策愧^{キツエ}此生、家有^{キツエ}父兄^{キツエ}鄉師反、期^{キツエ}我甚重吾空負、送^{キツエ}我之言警^{キツエ}我書、三復^{キツエ}忤^{キツエ}吾顏厚、今年之日又將^{キツエ}除、吾心之感竟何如、中宵思^{キツエ}之眠那得、剔^{キツエ}燈且觀^{キツエ}大史書、君不^{キツエ}見^{キツエ}先主肉髀悲^{キツエ}歲月、三分功業永^{キツエ}不^{キツエ}沒、丈夫存^{キツエ}志豈空死、百年勿^{キツエ}教^{キツエ}壯心歇、

廿一日 晴、訪^{キツエ}會澤憩齋、即常藏也、憩齋宅見^{キツエ}高倉平三郎、

廿二日 晴、終日不^{キツエ}出、

廿三日 晴、訪^{キツエ}會澤、々々宅見^{キツエ}青山量太郎、々々々延^{キツエ}于子、本爲^{キツエ}天狗黨、聞^{キツエ}近爲^{キツエ}三益黨所^{キツエ}驅使、出^{キツエ}入^{キツエ}于史局、意所謂^{キツエ}昆蕩黨者也、因爾後不^{キツエ}復相見^{キツエ}矣、婦見^{キツエ}根本孝五郎、芳之助執友也、夜作^{キツエ}題^{キツエ}上總五郎忠光闕^{キツエ}源右府^{キツエ}圖^{キツエ}詩、芳之助等社友課題也、其詩云、失^{キツエ}母慈鳥啞^{キツエ}々音、反^{キツエ}哺未^{キツエ}尽哀怨深、此情禽鳥尙或有、何況^{キツエ}人生^{キツエ}臣子心、嗚呼^{キツエ}西狩^{キツエ}之駕無^{キツエ}還日、闔門^{キツエ}死^{キツエ}難^{キツエ}不^{キツエ}遺^{キツエ}一、六十六州悉^{キツエ}歸^{キツエ}源、義軍糾合已無^{キツエ}術、成^{キツエ}敗利鈍命存^{キツエ}天、且殲^{キツエ}隻身^{キツエ}報^{キツエ}黃泉、嵌鱗^{キツエ}眇^{キツエ}目矧^{キツエ}役徒、一握^{キツエ}匕首^{キツエ}志偏^{キツエ}堅、人衆勝^{キツエ}天亦何悲、斯人忠孝天地知、獨憾^{キツエ}霸府^{キツエ}逞^{キツエ}私怨、坐令^{キツエ}天下^{キツエ}義

水戸城下ニ至リ、掘土居ニ遇フ、二ツ巾町ト云フ所ニ至リ、永井政介ヲ訪フ、政助不^{キツエ}在、子順成ニアフ、廿日、終日不^{キツエ}出、晴時政助歸、夜作^{キツエ}詩曰、書劍飄然滯^{キツエ}天涯、志業未^{キツエ}遂歲空加、一身百感向^{キツエ}誰說、枉借^{キツエ}三七字、發^{キツエ}浩歌、嗟^{キツエ}吾天賦原劣弱、闕^{キツエ}如雄才與^{キツエ}大畧、慷慨志氣雖^{キツエ}空存、讀書未^{キツエ}得^{キツエ}涉^{キツエ}浩博、文字章句措^{キツエ}不^{キツエ}精、經濟實用亦無^{キツエ}成、舍^{キツエ}魚遂併^{キツエ}熊掌^{キツエ}舍、廿年失策愧^{キツエ}此生、家有^{キツエ}父兄^{キツエ}鄉師反、期^{キツエ}我甚重吾空負、送^{キツエ}我之言警^{キツエ}我書、三復^{キツエ}忤^{キツエ}吾顏厚、今年之日又將^{キツエ}除、吾心之感竟何如、中宵思^{キツエ}之眠那得、剔^{キツエ}燈且觀^{キツエ}大史書、君不^{キツエ}見^{キツエ}先主肉髀悲^{キツエ}歲月、三分功業永^{キツエ}不^{キツエ}沒、丈夫存^{キツエ}志豈空死、百年勿^{キツエ}教^{キツエ}壯心歇、

氣衰、義士事逝成千古、于今聞者淚如雨、豫讓子房一流人、豈於世道為小補、漢高公義戮丁公、為劉左祖人知忠、忠光一斃事可慨、牝雞集鳩有誰攻、漢四百年源三世、修短寧可委時勢、忠孝之氣塞兩間、自是國家千年計、當食誰敢不食稻、當行誰敢不由道、人心忠孝出自然、稅政使人不如鳥、

朝、東萊博議卒

和泉丁伊勢屋彦六(初稿記載)

廿四日 晴、夜、宮部・安藝來、相伴抵其(旅舍)、各語數日間之奇事、快甚、聞以余亡之日、來原良藏上書、為余任其罪、因是官不追捕余也、二子與鳥山新三良、以十五日發、先至泉岳寺、拜義士墓、平日所交遊、皆追送焉、乃取路于行德、過佐倉、至下妻、鳥山自是而歸、二子則來水戸、皆未發之前所預約也、而余以先發不得與焉為憾耳、安藝有故、變姓名詐鄉貫、稱藝人那珂彌八、々々之先江戶但馬守、實出于那珂彦五郎、則其稱那珂、亦非妄也、那珂、常陸郡名、而江戶、那珂村名也、彌八之先大於常陸、彦五郎死南朝王事、近年水府議為立碑勒銘、遭國難不果、彌八之遊常、欲探祖宗之逸事也、是夜、余亦留宿焉、

那珂彦五郎名通辰、為佐竹義篤所擒斬、年四十三、或云戰敗自殺、年月不詳、(自註)

廿五日 晴、朝、朝、二子亦相尋來、午後、與三子訪會澤、夜入市、買米炭諸品而還、二子亦同寓焉、

彌八云、此レ事

廿六日 晴、與三子訪豐田彦二郎、以病不逢、觀好文亭、借樂園即是也、亭一高墻也、

ニ臨マバ、牙城トナスベシ、二人然レ之、(初稿記載)

列植以梅樹榭棠、環以三障塹、建制札云、四月至八月、三八之日、下及百姓町人、不禁釣漁、余嘗讀景山老公所撰借樂園記、又聞其所作歌、云、世遺捨天、山ニ入人、山丹天毛、尙憂時波、是遠尋福世、蓋公之志可見矣、而今則荒廢、為之唏噓不能去、過千波湖西、登高陵、有平原、蓋操場也、拜車丹波祠、車佐竹氏之臣也、佐竹氏徙封時、嬰壁戰死云、彌八母中田氏、實丹州之裔、彌八悵然作詩云、鴻雁北來雲氣惡、滿路墜葉驚索々、下馬再拜墓門松、感古涕淚揮又落、憶得故侯北徙時、滿城人士泣追隨、祖宗城闕夜不鎖、推與他人恬不疑、獨有此君重苦節、笑跨孤馬任鞭馳、縱橫衝突氣益奮、十萬大軍遂披靡、馬革裹屍常事耳、男兒當為天下奇、我家與君本姻族、何以苦節揚先德、腰下宝刀鳴有聲、死矣負家生負國、強收涕淚上前途、落日風寒洗馬湖、出千波湖西、繞城東北而還、城、初常陸大掾国香居之、後江戶氏、佐竹氏更取之、千波湖・那珂川、環而為險、

廿七日 晴、終日不出、
廿八日 如昨、

廿九日 晴、將觀西山・瑞竜、同三子出永井家、舟濟那珂川、是為青柳渡、過常福寺、經額田、宿大田駅、出駅十丁許、登瑞竜山、是列公墳墓所在、歷世諡号曰威・義・肅・成・良・文・武・哀、舜水朱之瑜墓亦在焉、薄暮還駅、行程六里、

（地理介、初稿には、
理平とある）

宇ニ、五本骨ニ
日ノ丸ヲ出シタ
ル扇ヲ彫ス、
（初稿記載）

※十年前、初稿には
八年前、鎗方本には
十年前とある）

壬子正月元日 晴、旅中閑靜、歲將除也無事可厭、歲已改也無新可賀、是遊歷中最快事也、出駅、將觀西山義公菟裘也、路過民根本儀兵衛家、拜民長山理介之先所賜義公手彫木像、立像高八寸許者也、世藏三理介家、近理介死、其子猶幼、故暫托根本云、西山、瑞竜近地、道傍多植櫻樹、至西山觀菟裘、門舍屋壁、簡朴質陋、而泉石樹木則甚有風致、守者云、此地義公命舜水所相、義公以來、屢次修葺、而未嘗少失旧様、因追想義公之風、感嘆久之、前庭有景山公手植松、高已過屋、下西山取路于山間、至佐竹寺、佐竹侯舊菩提所也、門額彫佐竹氏章、寺背則佐竹故城址、而今則湖望漫漫、菜田麥圃也、有民清水民之進者、以爲吾輩秋田士人也、來爲導、特有懷古悵然之態、亦可觀人心矣、至小場村、宿所伊賀右衛門家、所、江戸氏姻族、彌八欲問古、過之、伊賀者、十年前國難之時、與四人共詣江戸、以公冤訴紀州侯云、今語其事、悲壯淋漓、使入落淚、余作詩記之、云、雄坡村中弔古城、落日歸牛冥煙生、倦客來尋民家宿、樹際松肪照眼明、老翁見孫相環列、引吾入座不復驚、翁說吾祖所氏某、帶弓跨馬往勤王、爾後征戰經幾世、二百年來混編氓、又說先公遭厄日、抗疏侯門奉丹誠、賑恤撫字恩澤重、小人一死鴻毛輕、氣息奄々生何益、不如拔身當鼎鑪、何圖恩裁出分外、延生六十有五齡、語意慨然聳動坐、忠憤不忝祖先名、嗟乎舉朝士夫皆如此、生民相忘擊壤聲、男兒流落未易料、時窮草莽見豪英、

※この註自筆、鎗方本にはない）

至湊傳午餐、湊、人口衆庶、水戸封内最繁盛之地也、大田次之、
（初稿記載）

二日 晴、発所家、觀小場城址、小場佐竹族也、伊賀右衛門送至城址、指示塹壘之所、址背那珂川、沿川而下、至江戸村、訪民斎藤權兵衛、亦江戸氏也、彌八將寫其家古記、於是余與宮部先婦、沿川而下二里許、渡青柳上流、入水戸、薄暮至永井家、歲首樹松于門者、天下之通俗、而水府獨插松枝耳、極爲簡易、其制達庶人、按常陸帶、門松之制、天保元年所改也、先是蓋亦如天下之通俗、
三日 晴、終日不出、酉時、那珂婦、
四日 晴、初以歲晚歲初、家々冗劇、不便訪人也、爲西山瑞龍之行而歸也、人家未間、乃與三子及芳之助、謀銚子之遊、已時出家、渡青柳、過小川修理、沿那珂川而下、經三河、至湊、此川注海處也、城至是二里、此及大田、水府封内最繁盛之地也、港口艱澁、岸上安礮臺、不赴觀爲憾、舟濟川、沿海過大貫村、至古奈地村、而宿焉、村前有木柱、書曰、從是北、御代官小田又七郎支配所、行程凡六里、夜分韻賦詩、足跡遍天下、肩輕輕一囊、書畫數十葉、詩文幾百章、詳郡國形勢、寫忠孝心腸、可資膺懲、可維綱常、男兒平生志、蓬桑報四方、誰知汗漫遊、家國豈暫忘、
五日 晴、發古奈地、行三里至汲上村、出海濱、行砂上五里、宿鹿島社傍、鹿島、社名、亦以名郡、夜課題曰客愁、各賦詩、余詩云、去國桃花節、復聞黃栗留、發都圓月曉、復見新月鉤、客子悲歲月、歲月空自流、不願千金富、不願万户侯、韜畧吾曾學、欲成報國

二人皆鹿島祠官、雖或讀書、或作歌、要離解人物、而非落開、標語言者、(同)夜商量都下儒師、數次、吾樓善辨、吾善睡矣、(同)

*(この字、端方本にはない)

謀、武威煌々耀、一朝畧五洲、宇宙古今際、斯志有誰倚、故國三千里、客愁永悠々、
六日 晴、訪北條時之助(鹿島流劍法家、初稿記載)、吉川伸之助、二人皆鹿島祠官、拜鹿島社、行里許、至鯉川、航行一里餘、至潮來、宿宮本庄一郎家、其子曰千藏、庄一郎頃撰常陸志云、夜少雨、作詩云、孤牀半夜夢難成、聽斷四檐點滴聲、回首山河鄉國遠、阿兄今夜定何情、兄伯教愛雨、余所以有此感也、
七日 朝與庄一郎語、庄一郎、國難之時繫獄、々中有詩、云、死去豫期葬首陽、百年身世劍霜、眠醒草底尋殘夢、落月光寒頭斷場、午前出宮本家、行一里、至牛堀、泛舟於刀根川、刀根川、發源于上野、浩々蕩々、至銚子口注海、俗所謂坂東太郎是也、常總以是川為界、順流而下三里、至息栖、日已沒矣、登陸喫飯、反而登舟、又下六里、至松岸、則夜已二鼓、登陸而宿焉、

八日 晴、經長塚・本城、觀海及刀根川注海處、此地狀類銚子、是所以名之歟、戶口殷盛、百貨粗備、市廛間甚有江戶樣、但港口沙淤、不便通舟為憾、關係登間侯信地、而守備單弱、蓋有所恃于地利歟、余乃作詩曰、巨江汨々流入海、商船幾隻衝尾泊、春風吹送絲竹聲、粉壁紅樓自成郭、吾來添纜壬子年、倚檣一望天地廓、遠帆如鳥近帆牛、潮去潮來煙漠々、歐邏亞墨知何處、決毗東南情懷惡、眉山之老骨已朽、何人復有審敵作、仄間身毒與滿清、宴安或被他人掠、杞人有憂豈得已、閑却袖中緩邊略、強開樽酒發浩歌、滄溟如墨天日落、

歸松岸而宿焉、往復四里、

九日 晴、舟派刀根川、宿息栖、舟行六里、

十日 晴、發息栖、至牛堀、欲航霞浦直至玉造、舟子以風烈辭、強之不聽、不得已舍舟、陸行五里、宿玉造、夜雨、

十一日 晴、朝發玉造、還水戸、則夜已初更、行路八里、此間糶慶及鄉貯稗倉在焉、然失地名、*常陸帶云、稗倉、義公所創、

十二日 晴、午後、訪豐田彦二郎、彦二郎學問該博、議論痛快、使三人慙然、其嘗在史局、以獨力作神祇氏族兵制諸志、其外紀傳則分任諸子、所著有靖海全策・世書・明書等、或成、或未成、率皆卷帙浩瀚云、夜根本及渡井初之進來話、助端方本去則雞鳴、

十三日 晴、訪會澤及山国喜八郎、兵家也、共不在、訪桑原幾太郎、亦兵家也、

十四日 晴、訪會澤、會澤宅見海保帆平、帆平安中人、先公時、以善劍聘以祿之、慰齋以女妻之、慰齋云、先公時有造大艦之議、材既聚矣、會有回祿之變、焚材、後不及再聚、而國難作焉、遂不果、慰齋今年七十一、嬰鑠哉此翁也、

十五日 晴、終日不出、

十六日 晴、訪豐田、設酒歡語、

*この註自筆、端方本にはない)

十七日 晴、訪會澤、訪會澤數次、率設酒、水府之風、接他邦人、歎待甚渥、歡然交欣、吐露心胸、無所隱匿、會有談論可聽者、必把筆記之、是其所以通天下之事、得天下之力歟、夜根本及原甚藏來話、

十八日 晴、作上父叔兄書、與來原良藏、兒玉初之進、小田村伊之助、林壽之進書、昨小田村、林書至、初二子在麻布邸、余以亡之前日、抵其邸、謂暴白其事、使二子預議、則或至分其罪、因故欺二子、以下有過書之事、暫緩其行、而二子不曉其意、反以不謀爲啣、遣書詰責、然是非大義所關、故不敢辨矣、但以余爲負家國、而有所僥倖者、是不可不辨也、因復書云、辱書、見責以僕連亡、僕之背家國、其罪固大矣、不必爲區々緣飾也、然僕嘗窃奉君子之教、天下無無君之國、亦無無父之鄉、安有永棄君父以謀利者乎、但僕出門之日、有所自誓焉、不爲知己一言之上也、夫枉尺直尋、雖孟子之所不取、然忍小謀大、則孔門之教也、僕已枉尺矣、安能直尋乎、但當奉孔門之教、自効以贖前罪也、今二兄乃喻以當速歸、大非所望於知己也、僕雖驚下、亦人也、使僕無成、則何面目復還鄉國、見故旧也、万一見迫甚急、則僕有刎首刺心謀、自贖耳、又安有永棄君父以謀利者乎、抑林兄歸國、見僕父兄師友、爲僕言、二郎亦男兒耳、願勿過慮、觀縷絮談、無益于家國、不多及也、矩方再拜、

(初稿には小瀬千藏の下に渡邊初之助がある)

十九日 晴、將以明旦發、至會沢、豐田、桑原告別、至常照寺後天神社、拜義公筆塚、寺、佐竹支城故址也、夜、渡井、及菊池鉄五郎、原田誠之進、菊田剛藏、小瀬千藏來話、臨去開戶則雪積數寸、

廿日 晴、聞在國大夫鈴木石見守、在江戶大夫大田丹波守相尋罷免、二人皆姦黨巨魁、々々已斃、脇從將從而殲、非特爲水府賀而已、亦爲天下賀也、芳之助書詩三首、贈吾三人、宮部・那珂皆有詩、余亦賦與芳之助云、四海皆兄弟、天涯如比隣、吾生山陽陬、來遊東海濱、長刀快馬三千里、迂路水城先訪君、一見指天吐肝膽、交際何論旧與新、分席三句吾去矣、決毗奧羽万重雲、浩然之氣塞天地、東西何嘗有疆畛、一張一弛有國常、弛之張之在其人、澹菴封事愕金虜、武侯上表泣鬼神、大義至今猶赫々、大夫敢望車前塵、見君年少尙氣義、白日學劍夜誦文、斗筭小人何足數、勿負堂堂七尺身、吾亦孩提抱斯志、欲將韜畧報國恩、聚散離合非所意、誓將功名遙相聞、午時、辭永井家、芳之助送到青柳渡、放歌陸魯望離別詩、不顧而去、至菅谷右折、行小路里許、出大道、經石神大橋、宿森山、水戶至此六里、

是日渡久慈川有橋、(初稿記載)

廿一日 晴、發森山、過助川、山邊兵庫邑城也、宿手綱、中山備前守邑城也、行程七里訪阿久津彦五郎、夜彦五郎來話、往時檢田之事、民間多謗論者、而以彦五郎所說、則曰、手綱

歲入、原二萬三千石、檢田後、僅收二萬七千石、則似非專損下益上者、蓋農民愚魯、不辨利害、且爲富豪奸民所騙耳、

廿二日 晴、訪阿久津、々々々宅看長赤水所著龍子山記、有云、應永廿三年三月十五日、吉野帝末孫常翁率三戶條伊勢守・中條播磨守・北條陸奥守、至常陸國、永祿二年二月十八日、梅翁薨、常翁經大翁・覺翁・筑翁、至梅翁無子嗣絕、辭阿久津宅、阿久津亦相伴出送、謁三御塚、至赤濱、過長久保源五兵衛墓、源吾兵衛農家子、好漫遊天下、精研地學、後拔登士籍、即長赤水先生也、及其子、復歸于農、至今分爲數家云、至足洗、過民篠原貞之助家、乃拉貞之助至磯原、行程二里、過野口源七家、阿久津篠原由是辭、吾輩留宿焉、赤濱至是、皆海濱之地、沙軟松翠、宛如舞子濱也、乃作詩云、濤聲碎碎和松聲、十里白沙撥眼明、憶起舞妓灣上夢、一樽綠酒醉班荆、夜作詩曰、海樓把酒對長風、顏紅耳熱醉眠濃、忽見万里雲濤外、巨鼉蔽海來三艤、我提吾軍來陣此、鏡絲百萬髮上衝、夢斷酒解燈亦滅、濤聲撼枕夜琴々、

廿三日 晴、出野口家、登臺場、無架砲、過大津、人家稠密、二十八年前、映夷舶來于此、卸隻船二隻、夷人十數人登陸、數日不去、初不知爲何夷、會沢慰齋爲筆談役、按地圖詰之、知其爲映夷、時永井政助在豆菰山、聞變走返、至藤田幽谷所、幽谷命政助、

（龍、原本は雲に作る、歸方本により訂正した）

（以下の批點は歸方本にあるのを移した）

斬殺夷人、會夷船颺去、事遂不果、蓋幽谷意龍削七國之策、命諸政助也、而失機不遂、識者惜焉、越勿來故關、故關在山上、而今道則山下海濱也、過關田・荒峰・大島、渡鮫川、宿上田、行程四里、至平潟、常陸盡焉、水戸領則止于大津、大津以東、小国封地參錯、平潟爲棚倉侯松平周防守所、關田・上田爲平侯安藤長門守所、荒峰爲泉侯本多越中守所、領、是日彌八任口唱曰、君不見叱咤生風楚項王、一曲悲歌淚數行、又不見一劍驅敵旭將軍、帳中之淚落紛紛、英雄元是多情緒、不似九士輕去留、風雨蕭々日將夕、來宿勿來關下、與君分手無多日、休言英雄有泣辭、余乃步其韻云、吾無骨相似侯王、且向蝦夷爲啓行、吾無斧越統六軍、且向世議破紛紛、丈夫功名固多緒、須卜西就與東去、與君追隨幾晨夕、踏尽山亭又水驛、報國策定泣何妨、遠遊豈爲雲煙癖、夜雨、

廿四日 朝晴、既而雪、離海濱、入山間、兩山之間有澗焉、經山田・松川・根岸・齊所諸村、宿高貫、乃淵發源處、昨所渡鮫川即是也、是日經白川、菊田二郡、行程九里、

廿五日 雪、經鑛田・仙石・石川・赤羽、至白川、行程十里、上田至白川、山簷道窄、田圃極少、鑛田以北、少有田地、而亦礪確瘠鹵、其山水雖或適吟人墨客之觀、其於農桑之業、困苦亦何如哉、奧棚倉稱天下瘠地、今所過、距棚倉不甚遠、則雖不造觀、亦可推而知也、白川、阿部播磨守之都也、封疆十萬石、

廿六日 雪、滯白川、訪劍客箕田大六、其人愚魯、目無一丁字、所語尋常俗談耳、而記一事焉、曰、白川城、織田氏之時始築焉、置丹波長秀、近修城、得石材刻五郎左衛門字者、越後流兵家平井勘五郎、青木造右衛門、山田喜內來訪、亦趙家之奴歟、勘等云、近鑄貌砲、彈重三貫、礮長三尺、重十八貫、架以三車臺、又云、岩城海濱、距白川二十里、有變、白川差兵援之、白川雖在亂山中、東山本道、而西通肥之長崎、東極松前蝦夷、與羽諸侯必由之地、市廛繁盛、

廿七日 晴、尙滯、彌八將有所爲焉、故欲以明日訣、事甚祕、不可紀、作一詩示之云、白水關下風蕭々、與君永訣在明朝、壯士策定休遲疑、勝敗天數非人爲、君不見我有忠光、彼豫判、素謀不成大節明、興來須盡酒千鍾、人間既是無再逢、

廿八日 晴、斷然與彌八訣、午前發、初約與彌八訣於此已久矣、及期、情事難裁、買醉遣悶、所以致延留數日也、出、馱越小坂、行少許、道左有二路、是爲會津道、余與宮部將抵會津、取道于此、而彌八則直行矣、宮部痛哭、呼五藏五藏數聲、余亦嗚咽不能言、五藏不顧而去、注視久之、及不得見而去、至飯豐而飯、天少雪、至牧、內取便道、一里、出永沼、從大道則二里、宿勢至堂、行程七里、與彌八訣之後、終日茫茫如有所失矣、

廿九日 朝雪、已而晴、發勢至堂、登坂少焉至山嶺、是爲勢至堂嶺、々々與盤梯山對、經三代・福良・赤寸・原・赤井、宿若松、會津侯松平肥州之都也、原・赤井之間有坂、爲黑守、過赤井、有二坂、爲香掛、爲瀧澤、々々城外村名、而以名坂者、坂上下瞰城市、一望瞭然、田野又甚潤、土人云、十八万石許、果然否、是日經郡二、曰安積、曰會津、行程九里、晦日 晴、朝少雪、訪井深藏人、々々既沒、逢其次子某、孫茂松、訪志賀與三兵衛・黑河內傳五郎、共不在、逢傳五郎子百太郎、會津之法、以外套緞色、分士人等級、以衣領色、分輕卒等級、緞色、小納戶爲貴、御敷居內用之、黑次之、花色又次之、紺又次之、猪苗代舟士用之、猪苗代在城外五里、有城、置城代、附士若干、茶又次之、獨礼用之、萌黃又次之、御通用之、淺黃又次之、領色、黑、甲賀格用之、柿、足輕用之、萌黃、長柄用之、二月朔日 晴、志賀・黑河內・井深、來訪、

二日 晴、訪高津平藏、々々老練之人、曾入古賀精里之門、朝鮮使之來對馬、從精里而往焉、魯西亞之寇北邊、藩出兵三千援之、平藏亦在遣中、昔時藩盛講朱學、天明享和之際、聘肥後人古屋十次郎、古学稍行、至近時、又復于古、蓋阿部井弁之助、及平藏之力居多、井深及廣川元三郎來、夜與井深訪醫生馬島瑞園、庄田長之助亦會焉、

三日 晴、志賀來、伴至廣川勝助、勝助爲軍事奉行、西郷十郎右衛門亦會焉、藩今侯四世祖

病于祠、是日事畢、兵庫延吾二人於祠、示所藏宝物、曰八幡公冑鏝、曰横笛、曰芦名日記、曰古鼎、曰至德年時弓箭、皆可觀之物也、藩祖中將正之公以還、歷世墨跡詩歌等、亦藏焉、
 七日 晴、發塔寺、經舟渡、野津、野尻、白坂、寶川、八田、福島之諸地、越東松、車、鳥井之三嶺、宿燒山、行程八里、是間雪甚深、行步甚難、而牢晴可喜、鳥井嶺上為奧越界、過奧河沼郡、入越前原郡、

八日 朝霧、已後雪、發驛、至津川、是至新潟、陸道有二、而其左者山勢峻嶮、積雪間過之、往々致死傷、故從右者、湯川與諸川合、至是稍深大、舟可以下于新潟、而水勢迅疾、加之兩岸壁立、是以往々有舟觸石角爲所碎、覆溺者、不能登岸而死者、經行地、新谷、宿綱木、行程六里、津川、行地之間、有諏訪嶺、雪深路險、行步甚難、八田、福島、及此、最以深雪稱云、因作詩云、吾游北越正雪時、涉艱跋涉阻欲探奇、八田、福島、諏訪嶺、土人稱雪最所推、八田、福島吾不懼、雪也雖深地勢夷、獨難諏訪高凌雲、峻嶺万仞攀欽巖、僂僂而登腰欲折、胸喘膚汗脚亦疲、有時驚風掠空起、染鬚搏面冷砭肌、有時日脚射雲壁、返照眩眼光陸離、辛苦乃極最高處、四顧稱快始解願、奧野越山連天白、平川一條走青蠅、雪深幾丈不可測、老樹埋沒欲無枝、吾自山陽抵東海、一雨一晴喜又悲、艱阻未有如是甚、艱阻愈甚奇亦隨、土人漫稱雪中艱、艱中知奇果是誰、夜大雪、

津川之民二人、昨同越諏訪嶺、遂同宿、共係雪、祇易魚于新發田一者、(初稿記載)

九日 霧、發驛、至赤谷、此間雪深行艱、會津領止于此、有一番所焉、自是以往、雪漸淺、地漸夷、行不甚艱、經山内、米倉、五十公野、出新發田、是溝口主膳正五万石之都也、市中頗繁盛、每月以九之日爲市、而今日會當其日、民庶雜沓、貨物粗備、市廛兩邊、皆並列輕卒宅舍、經生田、御輿、佐々木、島見、宿木崎、行程八里半、回顧諏訪嶺、則已渺々于雲間、新發田封地、東西廿四五里、南北七八里、昔多爲泥濘不毛之地、後開墾、今則實入四十余万石、每苞今價二貫六百元、苞容六斗、越前每歲豐稔、絕無天凶歉、
 十日 霧、時々電、舟發木崎、至新潟、水程四里、中間新川堅冰僅碎、昨來始通舟、々行有鏗々之音、投日野三九郎、々々々劍客、好與會津黑河内傳五郎、江戸齋藤彌九郎交、新潟戶數一万、元和二年、至三十年前、爲長岡封地、爾後爲公料、今奉行、爲河村對馬守、屬官、廣間役六人、組頭二人、定役二十人、並役三十人、足輕二十人、浜信濃川二十六里、爲長岡、長岡七万三千石、實入十八万石、藩士等級、曰家老、用人、御奉行、番頭、物頭、大組、小組、食祿士五百八十四人、初新潟之屬長岡、市租歲入六千兩耳、若及七千兩、則賞該官、自爲公料、歲率一万四千兩、其重稅可知矣、北地往々見白兔、因問之、云、平時黃色、冬雪降則白、亦奇矣、夜得三詩、男兒橫劍行天下、時平常恨阻難寡、踏雪越山與奧野、大雪盈尺不通過馬、徒跳奔走吾何瘴、拊掌稱快自大嚼、寄言城中肉食者、飽暖何情居大廈、云、排雪來窮

海濱有^三哨鋪、^一曰^三洲崎番所、^一所以望^三海寇、^一夜又訪^三中川、^一喫^三茶、遂宿焉、^一（同）

（原本□の處空白）

北陸阪、日暮乃向^三海樓^一投、寒風栗烈欲^レ裂^レ膚、枉是向^レ人誇^三壯遊、^一悲夫男子蓬桑志、家鄉更爲^三慈親愛、^一慈親愛^レ子無^レ不至、應^レ算今夜在^三何州、^一枕頭眠驚燈欲^レ滅、濤声如^レ雷夜悠々、十一日 翳、與^三日野^一訪^三中川立菴、^一立菴子曰^三東菴、^一仙臺藩士氏家晉、久寓^三于此、^一以^三講讀^一授^三後進、^一見^レ余、作^レ詩見^レ示、余乃步^三其韻^一曰、萍跡相逢忽結^レ親、酒間豪語見^レ情真、男兒交際要^三唐突、^一心事何論旧與^レ新、^一商味形關右衛門等來會、乃相携上^三日和山、^一縱步海濱、佐渡雲霧渺茫、峙^三于正面、^一海風如^レ剪、不^レ可^三久留^一也、夜宿^三中川、^一十二日 翳、午時抵^三日野、^一夜宿^三中川、^一十三日 如^レ昨、謀^三新潟直航^一松前、新潟□里爲^三粟島、^一又□里爲^三飛鳥、^一又□里爲^三止賀、^一又□里爲^三深浦、^一又□里爲^三松前、^一凡□里、得^レ汛、三日夜可^レ達、陸行則非^三十數日^一不^レ可^レ至、且積雪或有^三梗路者、^一航^三松前、^一始^三于春彼岸、^一而止^三于秋彼岸、^一今待^三數日、^一舟當^レ發焉、蓋新潟之船、載^三五穀菓蔬貨物、^一至^三松前^一者甚多、而其最先至者、除^三今年船稅、^一故舟人以^レ死爭^レ先、往々有^レ先^三彼岸^一而發者、中川^三日野爲^一吾輩^三周旋船事、^一因與^三宮部^一謀曰、徒待^レ之無^レ益、遂謀^三佐渡之行、^一將^レ以^三明日^一發、新潟航^三佐渡之水津二十五里、^一而舟小海險、不^レ如^レ自^三出雲崎^一之安、是日作^レ詩云、吾骨未^レ可^レ暴^三砂礫、^一吾肉未^レ可^レ飽^三鯢鯨、^一三分天下^一歷^三其二、^一亂髮敝裘一劍橫、北塞欲^レ窮張蹇跡、先^レ卜梯攀與^三航行、^一氏家見^レ此次韻示^レ余、余又却示、不^レ能^三文思如^一懸河、寧得^三

酒量如^三長鯨、^一吾儕所^レ期異^三于此、^一只要逸氣千秋橫、與^レ君相逢忽相別、贏得浩歌壯^三遠行、^一又作^レ詩示^三氏家、^一吾於^三才學^一無^三寸長、^一仗^レ劍杖^三策行^一四方、自謂浮華無^レ益國、男子元是要^三木強、^一君是右經左史士、學^レ顏志^レ伊應^レ不忘、書生通病君知否、不^レ磨男子鐵石腸、彫章繪句畢生苦、弄^レ月嘲^レ花終歲忙、與^レ君同是臣子身、寧與^三此輩^一相翱翔、學^レ志示^レ君欲^三相質、^一百年志業君勿^レ藏、^一示^三東菴^一云、曰^レ才曰^レ氣學爲^レ基、曰^レ博曰^レ精勤爲^レ資、十室之邑必有^レ丘、不^レ學不^レ勤老^レ大悲、才氣或與^レ學相負、飽煖常與^レ怠爲^レ期、奇才之童多易^レ狀、千金之子多易^レ癡、獨君年少乃^レ知^レ學、且學且勤勿^レ失^レ時、

新潟至^レ是、四望^レ恢廓、無^レ崖際、^一特有^三此數峯、^一耳、^一（初稿記載）

抵^三寺泊^一午餐、^一驛中有^三長門屋、^一用^三一字三星之章、^一詰^三其由、^一以^三主人^一不^レ在、^一不^レ知、^一（同）

十四日 翳、經^三內野^一赤塚^三稻島、^一宿^三岩室、^一行程七里、赤塚立^三木柱、^一書云、篠本彦次郎支配所、稻島柱曰、長岡領、岩室則上之高崎零地、高崎之地、在此者二万二千石、稻島^三岩室之間、^一大山蟠踞、曰^三角田山、^一々後又有^レ山、曰^三彌彦山、^一高峻特起、新潟遠望而發、十五日 翳、發^三岩室、^一過^三石瀨、^一出^三彌彦、^一拜^三彌彦大明神、^一是爲^三越後一宮、^一祀^三天照大神宮會孫某、^一有^三碑文、^一審記^三其事、^一文政年間、菅原爲顯卿所^レ撰也、越^三猿坂、^一亦彌彦之支山也、下^レ坂則依^レ海有^レ村、爲^三野積、^一沿^レ海而行、抵^三寺泊、^一有^三菊屋、^一相傳、原氏五十嵐、源義經之走^レ奧也、隱^三此家浴室、^一浴室已壞、建^レ碑記^レ之、文、白河藩臣片山成器所^レ撰也、承久三年、^一順德天皇之蒙^三塵於佐渡^一也、亦以此爲^三行在、^一留^三蹕三十日矣、^一時張^三菊號御幕、^一遂稱^三菊屋、^一々後置^三小

寺僧不在、唯
有二僕燒火、
(初稿記載)

年、奉行會根五郎兵衛建白、定以地方五十間爲陵地、疊石爲垣、樹扉爲門、陵上旧有老松、數年前爲大風所吹折、今植榧松代之、陵下有真輪寺、余乃與宮部迂路登陵、拜哭曰、以萬乘之尊、幸孤島之中、何者奸賊乃爲此、宮部不覺悲憤、題扉云、陪臣執命奈無羞、天日喪光沈北陲、遺恨千年又何極、一刀不斫賊人頭、某年月日、肥後藩臣宮部增實百拜題之、余亦有詩云、異端邪說誣斯民、非復洪水猛獸倫、苟非名教維持力、人心將滅義與仁、憶昔姦賊乘國均、至尊蒙塵幸海濱、六十六州悉豺虎、敵愾勤王無一人、六百年後壬子春、古陵來拜遠方臣、猶喜人心竟不滅、口碑於今傳事新、下陵出新町、海濱也、小木至是、越一山脊、路皆崎嶇、過此而往、始得平地、人家頗衆、土人云、二百五十戶、是佐州西海最凹入處、蓋順德御船、亦至于此也、過四日町、渡國分川橋、經越松原、渡三石田川橋、過河原田五十里、澤根、新町沿海而來、至此右折、而越一坂、出相川、則亦海濱也、行程九里八町、每里五十町、

廿九日 晴、訪廣間役藏田太中、佐州官員、廣間役者六人、太中其一也、蓋奉行屬官最重要者、中二人、江戶所差、以三十年爲限、奉行二人、每歲以五六月之際交番、今在江戶者、曰中島平四郎、在相川者、曰羽田竜助、々々頗好文事、頃修佐渡志、又好講長沼兵法云、組頭二人、亦江戶所差、以三十年爲限、佐州之士、下至同心、二百六十戶、戶數六七千、本州

釣山
(初稿記載)

所語(初稿記載) 三郡、二百六十一村、雜太郎百一村、加茂郡百村、羽茂郡六十村、外是小比叡村、御朱印地、不在此數、人口十萬、歲入十三萬石、御城米一萬石、太中所語(初稿記載) 本州之洋有青島、海濱間有異樣芦漂至者、即島所產云、佐渡年代記云、天正十六年、十七年、上杉景勝再遣兵討之、先是地頭二十二人、本間佐州高統居河原田、同攝州永州居沢根、湯上喜本齋秀高居湯上、本間左京亮豐季居和泉、土屋下總守照邦居二方湯、藍原和州泰理居吉井、本間信州高滋居竹田檀風、本間遠州正方居吉井、本間六郎滿繁居北方、本間十郎高納、居谷塚、澁谷十郎左衛門尉直清居加茂、同四郎左衛門尉直正居哥代、同半右衛門尉直茂居梅津、同三郎左衛門尉直住居羽黑、本間間泉州居新穂、本間源三郎季本居吉井、本間對州高貞居羽茂、同參州高賴居赤泊、同加州泰亮居城腰、阿部兵庫義任居澁子、石花將監居石花、名古屋源四郎居瓜生屋、金鑛、鶴子山、太中所語(初稿記載) 爲始、文祿年時也、今所掘則異于此、其所生則金銀銅耳、旧有鉛鑛、近年以利薄廢、有鑛砂、以不知淘鎔之術未起、下三河有金砂山、四年前亞墨利加船至本州鷺崎、放脚船二隻進陸、望遠舖誤放銃、由是去、是歲羽州洋飛鳥、有亦賊船來焉、
晦日 寒風栗烈、時々飛雪、金鑛吏松原小藤太、爲吾輩導、觀採鑛製金、先抵勝場、觀粉鑛淘粉、已而登屏風澤、觀撰石、鍛擊、欲更入坑中觀穿鑛、小藤太乃發大工二名爲導、各名携油燈一盞、吾輩脫衣、着短弊衣、以繩爲帶、豎帶短刀、頭蒙天邊、以紙

小藤太者、屏風
澤番所吏也、入
少藤告歸、小藤
太則留宿、日暮
還宿(初稿記載)

坑中穿鑿、仰而
向、上者謂之
光、俯而向、下
者謂之直、平而
向、橫者謂之引
也、皆坑中之言
也、(初稿記載)
藏田云、佐州御
城、米、每歲一萬
石、佐州產物、
清、松前、者云
(同)

屑爲之、入坑二十間許、坑分爲左右、乃入左坑、坑中或登或下、或橫木爲梯、或刻木爲梯、坑中四分、或穿而登、或穿而下、或右或左、入十四五町、坑中有光、打聲丁々、歌音琅々、入而視之、則穿鑿者也、觀穿鑿者五六處、轉路至槓場、觀棄水、如浚水狀、坑中甚暖、僂僂曲折而行、滿身生汗、出坑則雪片觸身、甚清爽、如萬地獄出人間界、大工鑿卒也、雖時有少多、大率四十人許、晝夜更番、雖強壯有力者、至三十年、羸弱不適用、氣息奄々、或至于死、誠可憐也、而其自言則曰、此山最不善人、於吾爲多幸、至他山、或三四年、而既至于死、其日直、則惟錢四百耳、鑿鑿之治數十人、傷鑿甚多、非動爲之則不給、採鑿之法、大工先入坑、以鑿穿金埋之石、坑中金自有理、非滿地皆有、荷揚數十人、負鑿而出、鑿傷則鑿通統而致之、荷揚鑿通、日直二百、或二百五十耳、聚鑿撲立場、以分其品、輸之勝場、粉之淘之、然後炙之、凝固爲塊、其間經多少困苦、費多少財力、兼傷多少人命、嗚呼語之、亦可下以寒視金如糞土者之膽、孰又忍棄之夷船乎、槓場水替夫、多用江戶、大坂、長崎無賴之徒、亦有本土人、鑿坑、幕官所管凡五所、曰青盤、曰鳥越、曰清次、曰中尾、曰屏風、々々即今日所親、始于慶安五年云、外、商賈所管、尙有數所、閏月朔日、晴、抵春日崎、觀藏臺、訪藏田、佐州產物、漕松前者、租貨耳、草鞋、席、竹器、草器類也、

湊、夷及水津、皆
與越新、海、相
對、隔、而、二、十、餘
里、耳、而、吾輩、乃
欲、抵、小、木、航、
出、雲、崎、而、至、新
湯、海、陸、里、程、
凡、四、十、餘、里、然
勢、有、不、利、便、自
然、者、且、利、便、自
在、焉、於、是、知、後
世、兵、家、徒、案、地
圖、指、三、面、形、勢、
論、古、戰、得、失、成
敗、必、有、三、隔、靴、
痒、者、非、三、實、踐、
其、地、一、則、不、可、
概、論、也、(初稿記載)

出雲崎海上、有
盤石而巉、齒狀
者、土人號之曰
甚、舟至此、苦
艱、號曰、面楫、

二日 雨、朝太中子某來、相伴至銅床、觀鑿金、及分離金銀銅、還寓、結束而發、依來時道而行、至八幡、左折而入、拜順德天皇行在所、老松一樹及廢池在焉、經金丸、目黑、入加茂郡、經新穗、湯上、原黑諸村、宿湊、此地有湖水、曰越湖、長一里、廣十町許、行程七里、湊與夷、隔二橋而相連、湊四百五十戶、夷不及四百戶、是日始聞鶯、有詩云、四山殘雪尙曖々、梅葉未看一點開、忽聞鶯語驚尋思、二月已終閏月來、又有詩云、冬寒夏暑不便身、一歲風光無若春、天意似爲游客計、枉於三月加三旬、

三日 大風、或霞、或雹、道路泥濘、行步頗困、先上湊、夷間之橋、眺望湖海、煙霧濛々、咫尺不可弁、取來時路而行、至目黑、轉路出新町、湊至此四里宿小木、新町至小木、亦來時所由也、行程共十里、
四日、五日、六日 共晴、風烈、舟不可發、
七日 晴、發舟行里許、風逆而還、
八日 雨、九日、翳、風烈、四日至是、情況一如滯出雲崎時、
十日 晴、辰時發舟、風順帆飽、午後至出雲崎、復取來時路、宿寺泊、行程四里、
十一日 晴、發、至新湯、行程十二里、亦來時所經也、宿日野、
十二日 晴、宿中川、

取母、善候、如始、怒如、駭、而後始安、崎、與、飯、少、愈、復、來、時、路、濱、海、而、至、寺泊、(初稿記載)
十四日終日修紀行、(同)

十七日、抵後藤堤、告別、皆不在、夜宿中川、讀救荒孫杖、(初稿記載)

十三日 晴、午後、與晉東菴、飲後藤宗謙宅、乃相携至海濱、又飲(初稿記載)天日晴朗、佐渡及粟島、皆可指而數之矣、宿日野、

十四日、十五日 雨、十六日、翳、抵河口、觀形勢、作鄉書、山縣半藏在江戶邸、作詩贈之、云、少時論志膽如斗、希聖希賢徒任口、記否村塾學文日、欲下排李杜拉韓柳、爾來在再忽十年、疇曩心事如等閒、百年只是如斯過、何以永留天地間、君自洋林經史藝、夙以才名取高第、更聽奮然負笈東、銳志直將跨一世、嗚呼功名素有數、毀譽何關情、所貴于志士、卓然有自成、今之儒士何爲者、自欺々々人了此生、文辭富麗何足寶、學投時好果何道、致身報國豈因循、誓回狂瀾於既倒、噫吾辜負國恩深、忸怩無顏見知音、獨有微志磨不盡、泣約無失赤子心、又作一詩、與味形關右衛門云、學之益人其大矣、成德達材總在此、爲子死孝臣死忠、士農工賈事已、斯道由來不遠人、誰言無用屠龍技、無奈俗學弊端多、毫釐每爲千里差、或爲便便經史笥、博聞強志向人誇、或爲風流詩酒客、風花雪月醉爲家、喜君賈客好文墨、々々亦未廢其職、自古英雄善治生、請見范蠡計然列貨殖、

十七日 翳、十四日至今日、皆宿中川、

十八日 微雨、近日港口沙淤、不便出舟、且舟人不喜載士人、設辭々謝、因決意陸行、

十八日、朝、日野堤來、(同)

自來新潟已三十七日、延留實爲舟也、今則陸行矣、策之最失者、而亦無如之何、巳時發新潟、中川父子、日野・氏家・味形、送至五材橋、引信濃川於新潟市中、通渠數條、橋亦架渠者、乘小舟泛渠、橫絕信濃川、至松崎、舟行三里、行海濱平沙、經次第濱宿藤塚、陸行四里八町、松崎至是、皆係新發田侯所領、

十九日 雹、發藤塚、出海濱、行平沙、出桃崎、是以北係村上侯所領、舟濟荒川、々迂回、可泊舟、過塩町、又行平沙、至岩舟、々々駅名、亦爲郡名、戶數八百許、海灣可泊舟、出駅渡橋、离海右折、行一里半、出村上、是內藤紀州五万石之都城也、城在山上、過村上渡橋、行少焉、有瀨波川、舟渡之、過猿澤、宿塩町、瀨波川以北、雪猶深矣、愈進愈深、至塩町、則四尺許、塩町有米澤侯陣屋、猿坂・塩町諸地、米沢御預地凡二万石、是日行程十一里、夜雪、至曉不暫止、積一尺許、

廿日 雪、發塩町、至大隅、大雪道梗、未行行踪、漫不可行、待人行久之、而遂無一人過者、因雇一夫、至葡萄駅、中間初逢五六人結伴而來者、自是稍々有人行、過駅則山谷險阻、凡三升降、至大澤、此間雪最深矣、是爲葡萄山、土人特稱其險、戲作詩云、兩脚踏盡北陸道、連山崎嶇是無道、無道之山非無道、大雪沒道疑無道、去年三月東海道、楊柳掩堤花夾道、晴明降雪果何道、嗒然仰空問天道、經中村・田中、出海濱、有一小山、

*鹽町は藩方本には鹽谷町とある

曰：碁石、下山愈進則雪愈寡、至此絕無、所降亦雨耳、沿海至大川而宿焉、此間海上常見粟島、高陸九里許、亦係米沢御預地、是日行程僅七里半耳、而雪深路險、困憊倍常、

廿一日 雨、發_レ駒、又沿海而行、過_二小村_一、則越地尽、猿坂至此、皆係米沢御預地、入_二羽州田川郡_一、有_レ關、乃庄内侯所置也、_{（温カ）}過_二濱熱海_一、離_二大道_一、入_二村里_一半里許、有_二溫泉_一、是謂_二湯熱海_一云、熱海亦以爲_二郡名_一、至_二三瀨_一、離_二海濱_一、入_二田間_一、碁石至是、海岸皆有_レ山臨_レ海、路繞_二山腰_一、崎嶇升降、其間山阿寢平者、有_レ馭市村里及溪澗、形勢比々皆同、宿_二大山_一、大山戶口繁殷、係_二庄内侯御預地_一、地形寬廣、行程十一里、

廿二日 霧、出_レ駒少許、有_レ高隴如_二城趾_一者、指而問_レ之、土人云、昔酒井備中守所居也、封地一萬石、行里許、出海濱、行_二平砂中_一、至_二最上川_一、中間有_二濱中馭_一、舟濟_レ川、澗六町餘、越_レ川則酒田也、戶數五千、或云、今增至_二七千_一、川可_レ泊_二大船_一、新湯以北、最繁盛之地也、離_レ海而行、峻嶺含_レ雪、卓然當_レ前者、爲_二鳥海山_一、又濟_レ川二次、皆發_二源于山_一者、宿_二吹浦_一、海濱也、行程十二里、此地米價、苞_二二貫八九百錢_一、苞_二容_一五十斗、

廿三日 晴、出_レ駒有_レ關、至_二女鹿_一、又有_レ關、共_二庄内侯所置也_一、過_二關登山_一、石路_{（哈呀カ）}稔_レ、是爲_二武也武也關_一、乃鳥海山伸_レ脚于海濱者、關望_二飛鳥_一甚近、土人云、離_二陸五里_一、鳥人家二百五十戶、多產_二魚物_一、又有_二好馬頭_一、係_二庄内所領_一、下_レ關經_二小砂川_一、行_二海濱平砂_一、至_二塩越_一、人

家頗多、比屋以_二小板_一扁_レ戶、書曰、百姓某、大工某、漁師某等、又曰_二松前出稼某者_一甚多、出_レ駒、有_二象潟_一、古有_レ寺、四十九年前、地震毀_レ寺、今則_二平田漫々_一、經_二木浦_一、舟濟_二一川_一、此間稍_レ離_二海濱_一、至_二平澤_一、又出_レ海濱、行_二平砂_一、宿_二本庄_一、是_二六郷筑前守二萬石之都城也_一、行程十三里半、

廿四日 晴、發_二本庄_一、有_レ川、舟濟_レ之、出_レ海濱、行_二平砂_一、至_二道川_一、午食、是_二龜田侯岩城伊豫守所領也_一、本庄道川之間、有_二石脇・松崎二馭_一、以_レ行_二海濱_一不_レ經焉、過_二道川_一有_二長濱_一、亦不_レ經焉、塩越至_レ是、_{（此處方本）}本庄・龜田二封地、皆以_二四十八町_一爲_レ里云、至_二長村_一、離_レ海入_レ村、自是係_二秋田所領_一、經_二新屋_一、舟濟_二御裳川_一、川雪水方漲、澗可_二八町_一、渡處至_二三川口_一一里、而大船可_二泝而至_レ此、宿_二久保田_一、_{（今秋田）}是_二佐竹左京大夫二十萬石之都城也_一、行程十一里、久保田之地、最斗出者爲_二牡鹿_一、二峯峙立、爲_二本山_一、爲_二新山_一、從_レ昨遠望_レ之、以_二爲_二三島_一、稍近又以_二爲_二三島_一、至_二長村_一、初知_二其與_二內地_一連_レ、土人云、是地五十三村、歲入二萬石、港_二三_一、曰_二止賀_一・船川・船越、秋田米價、以_二三斗_一爲_レ苞者、一貫七百錢、數日間、見_二土人往還者_一皆裹_二面冒_一頭、僅露_二兩目_一耳、比々皆然、亦土風之可笑者、新湯至_レ是、大抵海濱平沙、漫々浩々、行步頗困、

廿五日 晴、滯_二久保田_一、訪_二商敦賀屋新六_一、澁江内膳使家臣熊谷恆次來、因_二二人言_一、得_二粗聞_一國事、羽州十二郡、内六郡係_二本藩所領_一、曰、仙北・秋田・平鹿・河辺・山本・雄勝、津輕界至_二

新庄界、六十里餘、置大山若狹于院內、祿千石餘、士七八十名屬焉、佐竹左衛門于湯沢、(一万三千(鑄方本))祿千石、戶村十太夫于横手、祿六千石、佐竹乙菊于角館、祿七千石、共士百名余、澁江内膳于刈和野、祿三千石、士三十名、梅津小太郎于角間川、祿三千石、士六十名、多賀谷下總于檜山、祿八千石、士百名、茂手木將監于二十二所、祿三千石、士五十名、佐竹大炊于大館、(一万三千石(鑄方本))祿八千石、士若干、在郡下者、大番士十隊、每隊二十名許、藩士三等、一門家廿四五名、廻座七十名、諸士若干、海濱之地、野代、湊、備砲、湊有二貫砲一門耳、院內有鑛鑛、森吉山下、阿仁、有銅鑛、森吉山又出孔雀石、道法以八十間爲町、癸巳甲午之飢饉、國用罷弊、以紙鈔續之、然以鈔與金不稱、鈔權漸下、今所行、以鈔一貫、當銅錢七十孔、

*この四字、鑄方本には巳午に作る。

廿六日 晴、癸久保田、行里餘、出土崎湊、海濱也、戶口繁盛、(二千餘戶)有劇場、近日將演技、過湊瀨海而行、道傍起廩五六、樹柵圍之、土人云、癸巳甲午凶荒後、歲貯粟及稷、今則已充矣、未至大久保一里、賃馬而騎、至大久保而步、至阿不川、又騎、經大川、舟濟川、過一市、宿鹿度、騎行七里、步行四里、

廿七日 晴、騎而癸、經森岡・豊岡、大久保至^{コルマヤ}此、道過八郎湯之傍、湯廣四里、袤七里、鯉鮑諸魚多產焉、至檜山、即多賀谷所居焉、其第宅地形頗高敞、士百家之外、家臣又有二百許家云、至是造人馬簿、雇馬、凡雇馬、用簿、則每里直十五錢、(五六(鑄方本))而無簿亦五十錢許耳、經

鶴形、有廩、如昨所見、至^(富カ)飛根、飛根、荷上場之間、舟濟野代川、而雪水方漲、不通載馬

之舟、故駢不發馬、因步而行、荷上場・小綱木之間一里、舟派野代川、亦以漲甚不通人、因取小路、舟濟小川、越籠山、山下有製銀銅所、即阿仁坑所出云、披蒙茸、扳荆棘、登山二町許、始至其巔、又下數町、得本地、山中殘雪尙多、宿小綱木、騎行八里、步行三里、是夜與加賀船頭自青森歸者同宿、云、西洋船過松前津輕之間者、今年已三四隻、

廿八日 晴、癸、經坊澤・緩子、至大館、有城、即大炊所居、所屬之士三百余名、而其家臣又有三百許、戶數二千餘、皆極矮陋、經釈迦内、宿白沢山内儀兵衛家、文政四年、南部通臣下斗米秀之進欲要津輕侯、即是驛也、行程十一里、儀兵衛爲據人方、職主南部津輕封疆之事、因其所語、頗知村間之事、木村有肝煎一人、長百姓十二人、肝煎每村一人、而長百姓、因村大小、多寡不同、代官近改爲御扱役、每郡一名、御扱役巡郡歲四次、春謂馬調、檢馬數也、夏謂人調、檢人口及宗門也、秋謂諍馬、駒馬二歲者、定價市之也、往年駒馬至三歲、附之牝馬、今則至三歲耳、冬謂暮廻在、斂租也、田地、方十間、或十五間、因地肥磽、廣狹不同、是謂一人役、大率獲米二石許、斂租二斗五升至三斗、釈迦内有廩、即如向日所見、其法以十村爲部、村數多寡、各處不同、民一口、歲出粟五升、或米三升、藏之、米蒸爲稜、八歲以下、七十歲以上者、免之、始于天保甲午、而至嘉永己酉而止、每

歲秋陽暴之，米價今升四十九錢，而尚爲甚貴，往年十六七錢耳，米價賤而物價不其廉，是農所_レ以苦也，木綿一反極美者直二貫百錢，炭重十貫，直二百八十文，塩一苞容三斗五升，直一貫六十錢，塩取之野代，距此十六里，舟泝野代川而來，

廿九日 晴，出山内家，至長波志里，有關，過四十八川，是地兩山迫狹，澗水迂回，如走蛇狀，而無修路之政，過者涉川凡數十次，是所以有四十八川之稱也，雪水奔漲，往々沒膝，冷不可堪，久保田至綴子，大館，稍有寬廣之地，漸北漸迫，至四十八川而極，乃有矢立嶺，川流發源于此者，皆注野代川，嶺雪深尚有二尺餘，杉木蒼翳，其巔爲奧羽界，川與嶺，天之所疆奧羽，而佐竹侯不修其路者，亦似非無故，然津輕已不善于南部，則其往來江戶，不得不_レ由此，而道路荒廢如此，交隣之道，果何如哉，山内云，往年下斗米，蓋欲要津輕於此險也，前事數日，其黨數十人，徘徊村里，雖土人，爲之疑懼，又使仙臺人某鍛大刀數把，不顧其直，是其所_レ以致敗露也，下斗米之事，余曾聞之山鹿素水，質之安藝五藏，向在水府，讀藤田虎之助所著傳，今又聞其土人語，感其志，惜其事不遂，慨然作詩云，兩山屹立如屏風，一溪屈曲流其中，山窮水極欲無路，矢立之嶺當其衝，杉檜掩天晝亦暗，天以絕險疆三邦，聞說文政辛巳歲，津輕就藩過此際，南部通臣米將眞，糾徒欲要遏輿衛，幾日徘徊驚人視，敗露忽空數年計，地利人和兩得之，自謂籌畫萬無遺，休言

奇變出意外，一特每與百禍隨，君不聞韜鈴上乘存一句，初如處女後脫兔，下嶺渡橋，入關，乃津輕所置，駅曰碓関，有溫泉，浴焉，經於阿仁，亦有溫泉，至石川，直行則可至青森，左折渡橋，雪水方漲，溢于橋，傍石川取便道，入弘前，是津輕越中守十萬石之都也，此間田間小路，雪水洋溢，往々沒脛沒膝，岩城山含雪高聳，三峯巍然，宛如富岳，宜矣俗謂之津輕富士，碓関以北，愈進愈濶，至弘前，四望蒼々漫々，皆肥沃之田也，行程九里，

三月朔日 晴，滯弘前，訪伊東廣之進，伊東之先兵部，居奧之前田沢，或屬伊達政宗，或屬佐竹義明云，伊東云，津輕之海岸五十里，砲臺九所，大間越・金井澤・小泊・竜飛・三馬屋・平館・大濱・青森・野内，三馬屋原成一隊，今稍減，僅百人耳，平館近設成，比三馬屋更少，又有松前非常，海岸非常，各一隊，操練，每歲輪操一隊，非常隊，則輪操之外，更操隔年一次，每隊組頭一人，士三十人，物頭二人，卒各廿五人，長柄二十根，合三隊，家老一人總之，學校謂稽古館，古在城外，兼教文武，文化中，国用匱乏，乃徙于城中，狹小其式廓，特置文學書學・和學・數學諸礼局，文学官・總司一名・小司三名・學士・副學士・會頭補，各四五名，典句十名，句讀師也，授業之法，尤爲有見，素讀卒業，則以次會講小学・史・漢・左氏・詩・書・三礼・易・明律・四書，々々學官，學士四名・副學士二人・典筆七人，和數礼，皆學士副學士各二名，和有典句，

數有典數、各編方本禮有典禮、亦二名、館以二之日講經、小司至副學士、輪次爲之、以三七之日講兵、山鹿流之師三家、輪次爲之、皆一藩子弟悉得聽之、去月廿五日六日、夷船過津輕松前間、皆一夕繫泊、至晨乃去、意即前夜加人所語、即是也、夜微雨、

二日 騎、至新邸、訪荒谷貞次郎、山鹿素水弟也、七年前、藩遣定府士十七名就國、新構邸于城門前、置之、荒谷亦在遣中、繞城四面而歸、將發、結束訪伊東、伊東賦三絕、送吾二人、余次其一詩韻云、男兒欲畧北夷陸、難奈吾無百萬師、猶忻半日高堂話、幸爲此行添一奇、鈴木善二郎亦至、談論久之、辭出則日已中、寓城市、越二橋、至藤崎而宿焉、行程僅一里、弘前・杉森有劇場、近日演技云、田地之制、以二百坪稱一人役、然盈縮不一、肥瘠亦殊、其收穀、三苞至四五苞、間有八九苞者、苞容四斗、租三斗至六斗、多寡亦不同、而又有收少而租多、租少而收多者、田法之不均、天下之通弊也、而欲均其不均、則蚩々之民、不知乘除之所、疑以爲損下益上之政、豪農富戶、從而唱之、遂致謗議洶々、民生不安、水府之政事是已、也錄方本是治民家所當深察長思也、

三日 晴、發藤崎、經板柳・鶴田、至御所河原、自此經金木至中里、是爲本道、爲土人所誤、至赤堀、舟濟岩城川、下西岸、至蒲原、復濟川、至富野、高川、々發源於矢立嶺、經石川・藤崎、注十三湯、藤崎至此、路常與川相隨、至是右折、取路田間、至中

里、行程十一里、以故稍遠、

四日 晴、發驛、經今泉・合津、過十三湯邊、越小山、山臨瀉對岩城山、真好風景也、下山出海濱、經磯町・脇本、々々戶數百三四十、去年夷船之過、去此里許、越山出小泊、亦海濱也、戶數三百、行程七里、此與松前、隔海相距七里、

五日 晴、推戶望之、松前連山在咫尺間、出駅沿海而過砲臺下、安砲二坐、以板屋掩之、不得詳砲長口徑、行二里、寓海入山、山有澗、沿澗而登、是爲寒沢、藩嚴禁旅人過此路、以故不修道、涉澗數次、深每沒膝、行里許、始至其嶺、越嶺而下二里許、雪深二三尺、愈下澗流愈大、又涉數次、困苦太甚、作詩云、去年今日發巴城、楊柳風暖馬蹄輕、今年北地更踏雪、寒沢卅里路難行、々尽山河萬夷險、欲臨滄溟叱長鯨、時平男兒空慨、誰追飛將青史名、出海濱、是爲三廐、俗傳、義經騎渡松前、由此、戶數百許、灣港可泊舟、松前侯之朝江戶、乘舟亦到此、經今別、戶數灣港、亦與三廐相類、經大泊、宿上月、戶數僅十七八耳、行程八里、小泊三廐之間、斗出于海面者、爲竜飛崎、與松前白神鼻、相距三里耳、而夷船憧々、往來于其間、比諸榻榻容他人酣睡者、爲更甚、苟有土氣者、誰不爲之切齒哉、獨怪當路者、漠然不省、竜飛崎之近地、有五村、曰上字鉄、本字鉄、釜沢、六十間、筆島、戶數共六十許、其人物旧係蝦夷人種、今則與平民無異、夫夷亦人耳、教

自評、今而思
之、臺位未爲
得也、

而化之、千島唐太、亦可爲三五村也、而奸商之待夷人、則蓋以三人禽之間云、噫可惜哉、
 六日 寒風栗烈、飛霰繽紛、至午後乃晴、朝發上月、出平館、平館有砲臺、砲門七箇而不常架炮、此與南部九艘泊、隔海相對、間僅三里耳、而內更有大海灣、此尤其要扼之處、臺位已得其所、而臺制亦頗佳、四年前、夷船一隻來于此、距陸里許、下錨、日放脚船一隻、乘五六人上陸、夜則還船、如此者凡三日矣、至二矢村、行程四里半、小泊至此、除寒沢三里外、路皆海濱沙礫、而其山勢突兀臨海、無田地原野、米穀皆仰於青森、弘前、而嚴禁舟運、價苞二方金、村有舟載魚物赴青森者、因欲乘之、休憩舟子家、以待其發、舟子云、松前戶數三千、去此十七里、惠佐志千戶、三十五里、宮館五百戶、三十三里、奧之北濱人多衣白布衣、析樹皮以織之、名白割織、尤能堪雨濕、精者一端、直一貫三百錢、薄者發舟、遙望青森神田嶽、右視蟹田、大濱諸浦、曉達青森、舟行八里、以人家未起、舟中又寒烈不可居、入海濱船舖而眠、雪霰繽紛、青森一大灣港、宜備軍艦數十隻、以備非常、
 七日 天氣如昨、夜明、入青森市中而食、至野內、有關、經栗坂、麻蒸、土屋、中野、山口、藤沢諸村、出小湊、亦有關、經濱子、清水川、口廣、狩場沢、有關、立柱標界、西北黑石侯津輕木次郎所領、東南盛岡侯南部美濃守所領、津輕之地、率膏腴之地而此間則多不毛赤地、至馬門有關、盛岡所置、有砲臺、備砲一門、宿野辺地、戶數三百、九艘泊、平館至此二十

里許、海灣止于此、與田部釜伏山相對、中間三里許、見泊船二十隻許、行程十里、土屋、小湊之間、路稍寬、海、殘雪特多、

八日 天氣如昨、發、高海行平原荒漠中四里、至七戶、路與獵夫四人伴、二人持、梁、二人負銃、皆被獸毛外套、率犬而行、云、將獵熊、凡獵熊、始于春彼岸、去年獲五六頭、而今年未獲一、經藤島傳法寺、宿五戶、行程九里、藤島前有川、謂逢坂川、依村名也、七戶而往、稍有村落田圃、然要之亦皆荒原也、圃中無菜無麥、不見青蒼色、只存粟、藪稗株、蓋收穫之後、不復墾也、道傍間有植樹木、非不繁茂、用心于稼穡種植、赤地悉可爲良田茂林、惜哉、地曠而人不足、五戶訪藤田武吉、々々來話、五戶地著之士六十名許、率稟祿甚微、散在村里、以耕爲生、五戶三戶、福岡、地著皆可若干名、南部多產大豆、漕于大坂者、皆馬載致之野辺地、牧場數所、產野馬、是日所過荒原、亦連于牧場云、五戶數五百、有川注荒川港、去此三里、

九日 晴、風甚烈、未後陰翳、時有過雨、發、越淺水坂、出淺水驛、始見麥芽寸許、至古町有岐、可赴八戶、去此四里半、道東有四方嶽、以界八戶領、野邊地、七戶以來所遠望也、至三戶、戶數比五戶更多、土人云、地著士百名、同心四十名、駅傍有古城址、二百年前、盛岡侯都于此云、過養坂、經金田市、福岡、越末松山、宿二戶、行程七里而甚

*（編方本には下の武吉の上に夜の字がある）

遠、一戸戸數三百、魚塩仰之八戸、比近諸村皆然、福岡一戸、米粟稗豆及漆林、稱最多、漆稅每株銅錢四孔、諸藩制札、多署疾名、津輕不署、而獨錄方本秋田・南部則連書家老姓名、十日 晴、發、渡、橋、行二里餘、有高原、々以北之水、過二戸・三戸・至八戸、注于東海、以南之水、過盛岡、注石卷港、北上川是也、經沼宮内、戸數三百許、一戸至是五里、有三四村落而無、市、禿山連繞、荒涼畧如七戸以北、過北上山下、宿川口村、行程六里、甚遠、道右舍雪嶺、天者、爲岩鷲山、南部富士是也、路逢大畑成兵、大畑南部北海濱、間置戍卒五百名、以四月十月交番、南部之地、多產良馬、名於天下、而其利多在官、而不在于民、民家產牡駒、至二歲、官爲賤定其價、以價之半賜民、及鬻之、價遙貴于向所定、而官皆收其利矣、官之所收、歲二萬兩云、田圃間、絕無牛馬耕者、問之、云、土質堅牢、非鐵不可墾、果然否、農人常有守古之癖、田畯之誨、或有所未盡歟、十一日 晴、未後有雨、發、村、經、澁谷、民錄方本至盛岡、渡中津川橋、訪村井京助、至石丁宿焉、行程三里、是南部美濃守二十万石之都也、南部封地、里法六尺爲間、六十間爲町、六町爲里、是爲小程、七里有瘠樹、是爲大程、精米升八十錢、南部壤地雖大、少平坦肥沃之地、米粟不、然以其僻在極北、穀價不甚貴、十二日 微雨、已時乃止、訪坂本春汀、至山陰村、訪江幡春菴母妻、及遺孤文虎、至長町

此の原本は焼失した
たが、寫本によれば
次の通りであつた
いふ
なき人によその
袂をしほりつゝ
涙の雫手向こそ
すれ
あはれいかに草
葉の蔭に思ふら
ん同しこの葉の
行衛いかにと

香殿寺、拜春菴假葬所、春菴、(即那珂彌八兄、(壽方本)忠義之士也、以待醫從駕于江戸、爲奸臣所陷、繫于獄、乃自仰藥而死、拜哭之餘、不堪、抗慨、鼎藏題國風二首、予亦題數句云、人衆勝天亦何久、請俟他年天定時、云、男兒報國一死足、黃泉之下君瞑目、渡夕貌瀨橋、觀厨川城址、阿倍二曾擲于此、實八百年前事、而溝壑今尙可認、城據北上川爲險、訪山田齋宮・瀨山命助、二人皆坐春菴事、爲所禁錮、並辭不逢、未後、發盛岡、々々南北邊、皆列輕卒宅舍、間有下掲板書某組者、尤爲良法、渡北上川舟橋、過津志田村、方仆道樹、廢良田、新起妓樓數十家、南部國事、實可悼哉、宿郡山、行程五里、盛岡至是、大道如砥、其直如箭、道松鬱蒼、郡山有一小墟、是爲斯波御所城址、駅繞山腰、斷爲三部落、戸數頗多、夜雨、南部鈔幣、蓋坂都豪商所出、署三商二人名、雖不知其制度何如、安得非國用乏缺、不得已、屈膝於豪富、以彌縫目前者哉、堂々大藩、不能行國鈔、而用商鈔、其如國體何哉、十三日 微雨、午時乃止、發、驛、經石取、至花牧、有城、道傍有輕卒之家四十戸許、過、驛渡橋、又有輕卒四十戸許、至黑澤尻、以和川雪水方漲、不可通舟、宿于此、行程九里、是日始見梅花爛漫、黑澤尻戸數三百、而花牧稍多、石取一小驛耳、十四日 晴、發、驛、舟渡和川、至鬼柳村、有關、南部封地疆于此、盛岡至鬼柳、左右有山、而山間稍寬廣、蓋南部封內沃地此爲最、至相去、有仙臺關、自是以南、地形益寬廣、

又舟渡一川、至水沢、伊達將監采地也、祿一万五千石、至前沢、三澤頼母采地也、祿三千石、至中尊寺、離道入山五六町、有二十八坊、杉樹蒼翳、頗有幽邃之致、寺藤原氏所創也、曾聞之鎌倉僧、源羽林既滅藤原、見此寺宏麗、謂二衡特跋扈奧州耳、尙且有此大伽藍、況吾爲天下總追捕使、安可無大營造乎、乃營三階堂、經山目、渡岩井橋、宿一關、田村右京大夫三万石之都也、行程十三里、夕法與南部同、但以小程六里爲大程、即三十六町也、十五日 晴、將迂路觀石卷港形勢、治裝訪佐世岱太郎、發一關、左折入松島道、經鹿沼和久津、出石森、笠原內記采地也、祿千二百石、經黑沼、宿登米、伊達式部采地也、祿二万石、家臣頗多、式部第據高敞地、塹壘環之、隱如二城堡、行程十一里、十六日 翳、發驛、舟濟北上川、沿川而下、至柳津、布施某采地也、祿千七百石、至飯野川、大立目下野采地也、祿千二百石、北上川至河股、分爲兩岐、西者直注石卷港、而其東者、即飯野川、而注天仙、港曰乙巴、舟濟飯野渡、又濟舟場渡、入石卷、行程八里十二町、石卷分管四名主、石卷四百戶、蛇田六十戶、住吉八十戶、門脇百八十戶、東岸爲湊、四百戶、港船數七八十隻、川口沙淤、往々傷舟、本藩出米於海船、或曰、歲七八十万石、或曰、三四十万石、果如何否、北上川傍置番所二十餘所、禁闌出者、不可勝數云、湊及住吉、有米廩、又本藩及南部侯一關侯、皆置會所、登米大夫亦置之、皆爲海運也、登日和山、以

*湊有八皇子
義良親王、爲先
帝所建碑、
(鑄方本)

縱觀、山係葛西城址、今置鹿島祠、地形高敞、臨川與海、一關至石卷、絕無大坂峻嶺、土地恢廓、田野肥沃、而道路四通八達、旁徑多岐、獨石卷道最大矣、精米升直七十五孔、仙臺所行銅錢甚少、皆銑錢之極弊惡者、藩所鑄也(鑄方本)鈔幣有二步札、二朱札、原與金相抗、漸失其權、今則一步札三百七十五錢、若四百錢耳、

十七日 翳、發驛、至矢木、大道平直、砥箭不營、左右皆平原荒蕪、土質沙土含潤、開墾可以爲美田地、意人力未足也、經小野、舟濟成瀬川、川口亦可泊舟云、取便道登富山、山上有寺、望松島、一眸無遺、秋天半晴、則見富士山于未位、故以名云、山有杉栢良材、下山出高城、海濱有塩田、又越一小坂、至松島、舟至鹽竈二里半、陸行則三里云、是日陸行七里半、夜雨、

十八日 朝微雨、已而晴、訪塩竈別當鈴木軍人、々々導吾二人、登法蓮寺、々地高敞、可望松島、寺有藩侯所臨之室、拜塩竈明神祠、是爲陸奧一宮、有古鐘、按文、明應六年所鑄、有大旦那留守藤原朝臣藤王丸之文、留守氏、登米大夫伊達式部之祖也、祠有神馬、藩侯每世獻二匹、九月十七日祭事、侯在國則來詣、仙臺封地、嚴(鑄方本)最禁賣色、而以塩竈石卷、船舶所輻湊、不禁焉、未後、發塩竈、至市川、觀多賀城碑、有詩云、多賀古址尋古碣、蝦夷鞅鞞字尙新、憶昔 朝廷壯遠圖、香胡氣象懾百蕃、千餘年後問往事、空使男兒淚沾巾、

經今町、過燕澤、觀弘安五年里末清俊所建碑文、怪奇不可讀、相傳、鎌倉圓覺寺開山祖元、爲蒙古戰亡者建之、時有忌諱、故省字畫而隱之、過原町、橫出大街芭蕉衝、是即中山道也、貫街市、南北長二里許、行程四里半、訪入江長之進、々々近任記錄役、出入評定所、々々置町奉行二名、記錄役六七名、以司刑法、藩制居是官、雖同藩人、不許交接、因不得相見、其弟及其父權大夫出接、歎談移晷、辰時至国分街宿焉、其弟送至寓舍、十九日 翳、求接養賢堂學頭大規格次、々々使塾生森本友彌來、友彌羽之上山侯松平中務少輔之臣也、談話數次、相伴至城之前門、廣瀨川繞城、前面架板橋、々内曰川内、亦多士大夫第宅、城背拋山、々後峯々相倚、直接羽州、至街市東邊躡躡丘、一名釈迦堂、地稍高敞、臨平田、建天神祠、昔政宗公之撰城地、以此及石卷之日和山、青葉三所、請決於幕府、々々乃允青葉、即仙臺城也、岡、今則植櫻樹、爲士庶遊樂之所、有劇場、三四五月之間、每天晴演技、是日陰翳、故不演、假設賣酒茶餅店、頗有江戶風、聞劇場不特此、五月之後、更移他処云、午晴還寓、未後至養賢堂、學官二人、引吾輩、周旋于堂中、堂文化年間、拔大槻民治爲學頭、增廣其規制、入大門、右爲劍槍場、左爲學頭舍、即格次所居也、左折而行、渡橋、正面爲堂、堂左有聖席、門扁中和二字、堂右爲諸生寮、堂方二十四間、有兩階、右爲君侯所臨、左爲諸士出入處、中央及左右前後五區、皆方五間、中區爲君

侯視學諸生進講所、後區爲君侯安息所、四隅爲雷、亦皆方五間、東南植梧、南西植竹、西北植松、北東植梅、是謂梧庭、竹庭、松庭、梅庭、後區之後、三區平列、謂亥子丑、各廣五間、長三間、左則寅卯辰、前則巳午未、右則申酉戌、廣長共同、四隅之區、皆方三間、四外繞以一間半緣通、區画井々、尤爲可觀矣、習書、素讀、筆法、諸禮、皆習之于堂中、學校獨闕、弓銃場、馬埭則在學校後、學田一万三千石、巳午兎荒稍減、爾後開墾、今至一万石、去年起小學校于川内云、文學賞格、素讀試、終小學四書、則賞賜小學一部、五經則四書一部、小學四書、皆藩學刊本、講究試、終小學四書、賜左傳一部、五經則史記一部、周禮儀禮、則侯章上下、或朱子語錄一部、養賢堂學頭、以三世儒爲之、班爲番頭、管學校附士及足輕以下、凡百四十八人、儒家學業、不稱其職、則減其祿、或至其半、訪格次、小野寺玄廸、国分平三亦來會、供酒食談話、藩臣等級、第一、一門十一人、次、一家、準一家、次、一族、次、着坐、次、大番組、凡十隊、長曰大番頭、祿千石以上者任之、然撰其才能、不其拘祿高卑、間有五百石以上者任之、副番頭、不拘祿高卑、以隊中士爲之、大番任殿中番衛、爲廣間番、每歲登衛十日、次、組士、次、旗本組、足輕四十八隊、每隊五十人、弓銃分隊、足輕地著者、不在此數、每歲正月二日、爲追立狩、清晨、侯親臨案內村、不拘士庶、捕雉取頭、獻于廳下、一番頭、賞銀錢三文、二番三番、遞減一文、一番至三番、侯親臨賜酒、不拘貴賤、是以衆

皆爭先、早曉得雉、候未臨、則直趨城門而獻之、是日、足輕數隊射弓放銃、以爲操演式、仙臺追立狩、與相馬馬取狩、並稱以爲壯觀矣、

廿日 翳、森本及金子平作來、亦上山藩人也、午後伴森本及藩人三名、詣瑞鳳寺、寺在城背山麓、貞山公政宗・仁公忠宗・義公綱村三廟在焉、登愛宕山、山眺望極闊、近之街市第宅、皆在目中、遠之金華七森諸峯、渺々可望、廣瀨川過其麓、歸寓、山本文仲來、云、安藝五藏欲見公二人、來自塩竈、謬問二人已發也、未時發此、申後、同國分、訪吉岡九左衛門、石川才八郎亦會、終宿焉、仙臺侯封地二十四郡、四十年前、檢歲入實數、稟諸幕府、以二百二萬三千石、見今大小臣祿、共八十万石、大臣地着于采地者、星羅棋布于二十四郡中、有四十八箇、其他小祿士之地着、無往而不入、入其疆、使人悚然、祿制有賜采地者、曰奉公人前、今土地人民爲己有、與祿者稱家中、農稱足輕、皆充諸軍役、有賜地而不賜人者、是謂寄合百姓、租稅之制、共以四公民六率之、有以月賜慶米者、是謂扶持方切米、(總方本)一人扶持米四苞、苞容四十五升、有以五月十月賜慶米者、是謂倉米、稱祿以貫、々五斗苞十箇、軍賦百貫三人、郡村管轄、每村肝煎一人、間有村大而一村置二人、村小而二村管一人者、肝煎下置組頭三四人、集三十許村、置大肝煎一人、有郡奉行、仙臺六十万石、分爲奧四十万石・南二十万石、奧置三人、南置一人、巡郡歲二次、春視苗、秋視稻、奉行下

有代官、々々下有村役人、民一戸、禁田過五貫文、以防兼并之害也、

廿一日 翳、辭吉岡家、訪桑原隆朝、至國分入江、訪大槻・田邊・森本于養賢堂、山本于醫學館、皆告別而去、申時發仙臺、行里許、渡廣瀨川橋、爲長町、因分町至此、市廛倚壘不暫斷、過町則大道平直、左右平田、渡名取川橋、宿中田、行程一里二十町、(少總方本)

廿二日 晴、發驛、經増田・七千石・大内・岩沼・槻木、至舟迫、仙臺以南、沃野漫々、而至舟迫、左右山勢稍迫、阿不熊川流其傍、越小坂二三、而出大川原、地勢稍潤、道左有城址、宮内某所居云、過刈田宮、道逢彌八、々々斬奸之策定、欲必逢吾輩、以廿日朝發塩竈、至仙臺、倍道兼行、日夜不休、追吾輩至福島、行程三十里、意遂不可追及、將復歸仙臺、至是相逢、無勝拚躍、相伴至白石、同宿焉、馭前有川架橋、是日行程十一里、白石、昔上杉臣甘糟備後居焉、後爲伊達所拔、有城、今片倉小十郎居焉、祿三万石、市廛頗繁盛、城據高陵、家臣宅舍繞之、市廛又圍之、川流帶其外、注入阿不熊川、城背有南部山、以本月廿日、練兵、四方來觀者、以万數、市上有鬻行軍圖者、聞練兵之日、鬻諸操場、蓋江戶風也、彌八白河別後、至湯村、滯數日、至鹽竈、又滯數日、至石卷、寓粟野木工右衛門家、彌八復姓名、曰安藝五藏、又以仙臺自古與藝不善、至今痛拒藝人、不肯入封内、變鄉貫、稱備後人、別後有詩云、浮名恐累百年身、棄絕文章已幾春、昨夜松洲誤

觀月、又呼筆硯作詩人、有歌云、明日茂又櫻翳而遊奈武、今年計農春止思波、夜間五藏定策、又爲語其家國近狀、酌酒劇談、快愉甚、

廿三日 晴、吾二人將迂路至米沢、過駅右折、取路于乱山中、行二里、道右八丁許、小原村有溫泉、浴者頗多、出戸沢、行程四里、此至桑折四里、津輕及羽州諸藩、往來江戸者、皆自上山至此、出桑折云、地方多製楮紙、奧羽之地、率不種種、但名蚕桑、道傍多有桑圃、五藏送至戸沢、將以明日永訣、遂同宿、夜招淨瑠璃語、使語忠臣藏十二回、相見恍惚、淚數行下、

廿四日 晴、五藏(次)期在近日、是以訣別、殊不勝情、五藏作與森田謙藏、鳥山新三郎、村上寬齋、來原良藏、土屋彌之助、井上壯太郎書、託吾二人、又招淨瑠璃語、使語忠臣庫八回、未後断然捨五藏而去、經渡瀬・關町、宿滑津、行程五里、

廿五日 晴、發驛、經峠田・湯原、有關、過關里許、惡黨合、即奧羽界也、下新宿、嶺甚峻絶、嶺尽得平地、是爲新宿、自右至此、皆乱山間、而道不甚艱、此以往漸進、山漸廓、有肥饒地、桑圃漆林尤多、嶺以南之水、皆入阿不熊川、以北皆入最上川、即注酒田港者、至高島、戸口頗殷、旧係小田侯封地、經龜岡、至河井、新宿至此四方石、係米沢御預地、高島有倉、標曰御城米溜倉、其輪于江戸、必牛馬載、至阿不熊川、而後船載、入浦河港、

云、過花沢關、渡橋入市、即米沢也、上杉彈正大弼十五万石之都也、宿荒町、

廿六日 晴、訪高橋玄益、求介藩諸學士、會藩侯將以明日発朝江戸、是以諸士繁劇、不得相見、米澤領、羽置賜一郡、東界中山六里、越界玉川十六里、奥界板屋六里、綱木三里半、南界則花澤、不能二里、有三百余村、每村名主一人、或二人、欠代一人、村役五人、皆撰平民中才能者爲之、置郡奉行一人、代官五人、掛役四十人許、代官付足輕七十人許、郡村中、不置代官所、代官所、在城内三之丸、糠目・中山・荒戸・鮎返・小国・玉庭、六所、置城代、玉庭在城西四里許、又地著足輕、張番警固等多用之、藩臣等級、高家四家、曰武田・島山・三本木・二本松、分領家次之、八十二騎次之、大小姓次之、三手次之、馬廻・五十騎・與板、是謂三手、凡八百人許、三扶持方次之、猪苗代・組外・十八組、是謂三扶持方、花沢有原八町、城南二里有南原、皆小祿士之地著者、即三扶持方之徒也、藩制、雖君侯不蓄妾、除夫人(少婦方本)在江戸邸外、國更有御部屋様者、亦率列侯之女也、宮女十人、皆用藩士婦女、國產之最大者爲蚕及漆、蚕置蚕桑方、賤價賣蚕卵、以利下民、而未詳其制度、漆則詳之、蓋提封以漆樹二十六万三千三百三十三株半爲限、每株納柏漆重一錢九分於官爲稅、其稅既輕、而欲更利民、以銅錢八孔、代重一錢、以納于官、漆直則實過之、漆實則官買之、米沢會津諸地、製蠟燭蠟附、皆用漆實、米沢多用車運、一人挽之、載米十苞、苞四斗五升、城外有諸士

宮女の事、本全集第一卷、武政と書寫録女子教戒の條参照

*(原本には一さあるも、購方本により訂正した)

第宅、繞以溝塹、市廛又圍其外、夜以下候、駕將以明日發、巡視市街、警戒非常者、自宵至曉、不暫止、馬(鑄方本)

廿七日 晴、辰時候駕發城、至大町、觀儀衛、疾騎而發、家老亦騎、其他騎從者三人、駕過三板谷口、出福島云、群臣送者皆著上下、駕已發、而吾輩亦發、行平路二里、越舟坂、至關、越松坂奈古坂、至綱木、有關、登檜原嶺、嶺上與羽界也、下嶺則檜原也、山中多出椀皿材、樹名謂不奈、假填以椀字、造椀器爲生者、山間自爲部落、是謂某小屋、々々云、嶺上望磐梯山、即向至會津、勢至堂所望也、宿大潮、(鹽カ)檜原、大潮之間二里餘、亦皆峻坂、而坂上殘雪尙多、仙臺白石、桃櫻大半飄零、新綠陰々、而此間櫻花盛開、而桃未開、樹葉尖新、滑津以往、嫩蕨未生、多用獨活爲羹、大潮有鹽井二、地中湧出、以手試之、則溫泉、試之于口則鹹、而其色赤黃、每歲四月至九月煎之、率得六百苞、々容四斗二升、但以費薪多、不能常煎云、是日行程九里、

廿八日 晴、發、至熊倉、由此始云云(鑄方本)至熊倉田、此始爲平地、至塩川、有二川、皆架橋、川發源於猪苗代湖水、流入津川、至若松、行程六里半、訪井深、志賀、黑河內、高津、志賀宅逢一關藩人佐世岱太郎、高津云、飯豐山北麓、米沢封內、有二村、相傳平氏一族所遁匿、木帥家佐藤平三郎中陵漫錄載之、會津封地跨六郡、會津、河沼、安積、大沼、耶麻及越前原、南界大內五里、西界勢至

堂九里、東界十里、北界十九里、凶荒列國所爲憂、而獨北越之地甚少、仙臺南部、則數々有之、會津介于其間、比越爲數、而比仙臺南部甚少、又聞會津絕無蠱賊之患、北越亦然、廿九日 微雨、發七日町、抵高津告別、渡湯川橋、湯川古稱黑川、平藏號縮川、原此名也、過飯寺、至本鄉村、々造陶器、市上多標御許瀬戶捌間屋者、舟渡會津川、川下流合津川、經関山、越火玉嶺、嶺上下二里、出大內、經倉谷、至檜原、々々臨川、乃會津川之上流也、沿川而上、又舟渡之、經長野、道傍有植入菘者、云三年而堀之、宿田島、戶口頗多、田野少廓、大內至碓、五万五千石、係會津御預地、置陣屋、總稱此地方曰南山、(山カ)駅傍有城址、昔長沼盛秀居之、屬蘆名氏、是日行程十一里、晦日 晴、發、經川島、至糸沢、又入亂山間、越三王嶺、是爲奧野界、水脉亦疆于此、嶺以北者入會津川、嶺以南者入下野絹川云、經上三世利、中三世利、至碓、澗流稍大、有高原嶺、攀躋二里餘、始得其嶺、嶺平原也、是爲此行中第一高嶺、是以南爲宇都宮侯領、所鑄方有駅曰高原、宿焉、行程十一里、原上荒涼、氣候比平地稍異、此地馱馬、晝間服役、夜則放牧原野、

四月朔日 晴、發高原、下嶺三里、有駅爲藤原、澗流發源于嶺者、至此稍大、即絹川也、經大原、高德、乱山始尽、路皆與澗流不甚相遠、過高德、舟橫絕之、自此爲二荒社領、

過大瓜、出今市、戶口繁殷、大道坦平、翠杉夾道、即所謂日光街道、而幕府詣二荒、由此道也、至二荒山、僱二夫爲導、社、造築宏壯、文采華麗、金章朱楹、銅瓦粉柱、爛々眩目、噫美矣、吾知雖使阿房宮大成、其美則固讓此方々也、有澗流繞其前、是爲大谷川、下流亦合編川、去此三里、有中禪寺、不詣觀爲憾、社率以二十年修造、費用四十萬金許、社領一万三千石、土人云、源賴朝之時十萬石、果然否、市廛二所、共千戶、夜宿鉢石町、行程十一里、社下法親王殿在焉、有三十六坊、三十六院環之、又有祠官六人、伶人廿四人、地人七十五人、同心七十五人附焉、寬永寺法親王、以三歲末歲初、及祭時等親臨、法親王臣百名許、亦居于此、

二日 晴、早發、至今市、直行、即幕府所由之道也、二里而有二大沢、社領止于此、右旁有一路、是爲例幣使道、吾輩將抵足利觀學校、因取路于此、經三板橋、路人云、昔板橋將監居焉、至文挾、二荒至此五里、社領止于此、社領之地、道傍列植杉樹、渡滑川橋、經鹿沼(奈佐原カ)、奈良佐原、榆木、金崎、至合戰場、合戰場、不詳其所以名、或云宇都宮彌太郎、與壬生忠宗戰所也、距此不遠、有壬生村、宿朽木、朽木與嘉右衛門新田、市街相連、戶口繁殷、有旗本土島山民部少輔陣屋、采地三千石行程十二里、

三日 霧、發、驛、渡橋、有岐、右折而行、經富田、茂呂、犬伏、天明、又有岐、左側例幣使

道、而吾輩右折至足利、宿焉、行程□□、路互都賀、安蘇、足利三郡、鹿沼而來至是、宇都宮、

壬生、佐倉、濱松、關宿、古河封地、及旗下士采地、參伍相雜、又有御代官小林勝之助支配所、抵

學校、正門扁曰學校、往昔小野篁所創、旧在去此數町十年寺村、後徙于此云、慶長年間修

造、定以學田百石、拜聖廟、廟扁大成殿字、廣中分爲三區、中安孔子木像、像甚有古色、

云宋代物也、像側列顏、曾、思、孟、木、主、左置小野篁像、右置扁入德二字、正門外、旧有入

德門云、廣門與正門相中、扁杏壇二字、觀文庫、經史諸書畧備、內有宋版本、及上杉憲實

手書學校公用等字者、最爲可珍、此地四遠皆見名山、南爲富士、西爲淺間、東則筑波、

而北則日光南西隅小山、曰淺間山、似尼丘山、東北隅、有兩甲斐山、足利氏之時、長尾但馬

守所城、封地十八萬石云、夜微雨、

四日 晴、朝發足利、過三十年寺村、猿田村、舟渡、覺川、沿川而下、過梁田駅傍、是即例

幣使道、而吾輩不由是、沿川直下、梁田駅名、亦以爲郡名、離川至荒萩、有小橋、名落

合、三野之界也、越橋則邑樂郡木戸邨、而館林所領也、行一里許、入館林、秋元但州六万石之

都城也、欲訪三科文次郎、抵大手門、問守門者、々々云、三科宅在城内、法不許入旅

客、因至片町、作書遣价、會文次郎不在、索然而去、聞藩近下地于三丸外、造操場、土人

相聚、身親役作、雖不詳其信否、實爲一佳話矣、行一里余、羽附、岩田二村之間立木柱、

書曰、自是東西南館林領、至板倉、右折取便道、舟渡小川、過高島天神社傍、出刀根川堤上、沿川而下、至泉、見二舟載人而下者、呼而乘之、足利至是六里、舟去館林二里半、河股所發、每月以四九之日至關宿者、下川少許、又有二川、自左方流入焉、即向所渡覺川、及其他諸川相合者、是稱坂東二郎、下川二里許、左岸爲中田、右岸爲栗橋、即奥州街道也、上陸有關、御代官竹垣三右衛門支配所、反舟又下少許、川分爲岐、左則刀根川、舟由右川下、至關宿、上陸而食、時日已暮矣、是日宮部作五七言絕句各一首、乃步其韻、賡歌曰、遊歷幾年渾是客、晚花新葉子將還、檜山白水且休說、不耐憂思塞胸間、曰、積雪又殘花、與君徒然還、獨羨吾廬子、已在英雄間、又乘一舟、順流而下、直達江戶々々橋下、關宿至此十三里、風力甚勁、且睡且醒、以五日巳時達焉、乃抵桶町、投鳥山家、土屋兄弟、及越後三條一向僧北條秀英寓于此、相共劇談、至夜宮部歸邸、余猶止焉、將有所處、次日、藩人來、懇勸歸邸、余以前日之言與前日之志拒之、藩人云、子之亡、官不其咎、蓋以子初得遊歷之許也、然子之得許、以十月爲限、過限則罪不可測、及限而還、則官或不深罪、今急還邸服其罪、然後再申素願、徐贖其罪、亦未晚也、且子非負國家者、十年之後歸國、則其學雖已成、身已無所容、不如急還爲容身之地、然後出成其學也、宮部亦以余亡、謂爲已故、欲必還之邸、以塞其責、論之甚力、於是婦計決矣、以十日入

*（投鳥山家の語、地方本には、助樂山泊としてある）

邸、井上壯太郎以是日發邸歸國、乃走筆作序曰、井上壯太郎曾以血氣犯科獲罪、忼慨愧赧、不能自堪、將居而死、會官裁有望外之恩、於是、感憤負笈、東遊江戶、折節讀書、將大有爲爲、今茲四月、有故、學未就而歸、來告吾曰、吾之婦、實無面目以見父兄、雖然事亦不可已、爲之如何、余乃憫然曰、吾子實無面目以見父兄矣、而吾則有更甚焉者、吾向執匹夫之諒、爲唐突之舉、上犯邦典之重、下貽父母之憂、其罪固天地所不容、然自誓以謂、前罪已不可追、但有盡一身之力、繼之以死、勉立後効、以贖之耳、苟能卓然自立、不顧俗流、直以古之大丈夫爲師、毀譽利害、毫不足以動吾心、則可庶幾也、吾子向已不辭其死、則於吾言、固將有所豁然、古曰、同病相憐、吾子之病、吾固憐之、而吾之病、吾子幸勿契、他日子歸于山陽之阪、時々出此文誦之、其必有憶于東海之濱、居數日、歸國之命下、於是愕然、初覺爲所賣、而今則無可如何、交朋來者、皆慨然相弔、或曰、子能途而亡乎、則爲之、謹勿途而屠、余曰、匹夫匹婦、尙能引決、大丈夫誠重死矣、知不能知爲人所賣、至所賣、又求苟免、益見其拙、且吾計數斷、而志則益壯、志壯則安往而不可成學矣、

余以三述亡之罪、壬子十二月八日、削籍奪祿、賦此示諸友、
 士窮見節義、世亂識忠臣、二語吾常愛、服膺書諸紳、四海澄鏡二百春、豐祿幾人襲祖勳、
 時平無復斬將奪旗事、政清寧有排闥曳裾人、魚躍龍潛皆自得、恩波浩蕩豈有垠、嗟吾
 狂頑覆家門、俯仰何面對乾坤、吾罪万死猶尙輕、放逐况賜自在身、艱難崎嶇非所問、誓蓄
 節義報國恩、與人傭作有匡衡、弟子都養乃兒寬、孫敬閉戶繩繫頸、仲舒下帷不窺園、
 青史所記載、一々養吾真、一朝業成臥故山、松陰梅下烏角巾、時向世事迴頽波、且爲
 古道解糾紛、致君澤民雖已矣、立說濟世尙可言、有是死後可謝祖、有是生前不負
 君、敢爲窮途不堪窮、屈節失義徒沈淪、有客誠我語諄々、努力可邀恩光新、主人不
 答愧滿面、此言到吾果何因、寧忍百年報國志、翻陷一身祿利間、

東北遊日記終

(森市松陰神社藏 校合濟)

(編者附載)

(初稿本中參考事項)

長瀨 米津伊勢守	大方て月夜も愛し是そこの 積まて人の老とふるもの	(前)
此書先師所賜、 宜以珍藏也、八十	長州	(後)
和漢諸藝手引	松野他三郎	
紙鑑 タラノ類 スケタノ類	(折り目)	

東北遊日記

二六七

(表紙面の雜記上圖の通り、此書云云の二行は門人佐世八
 十郎の筆、その他松陰自筆、松野他三郎は松陰の變名)

(二月十六日の條)

船頭來、蓋菅商上蝦夷、北蝦也、東蝦、居ニカモヒ、距ニ松前、運上
 船頭來、蓋菅商上蝦夷、曰ニ下蝦夷、居ニカモヒ、距ニ松前、運上
 錦者、因叩以三北地之事、其所談、歷々可聽、云、山丹人之
 來、止唐太、云、蝦夷產物、ニシン、キンコ、アハビ、アキア
 ジ、エソ錦等、云、山丹人、語言類ニ蝦夷、故用ニ蝦夷通詞、云、
 蝦毒矢附以下用ニアス、鳥製之藥、試之熊羆、怒甚則毒益漫、溢于滿
 身、獸死體冷則毒復萃于創所、云、オクシリ、距ニ城下、三四里、
 生ニ海狗、二年所獲、不超過一二頭、叩ニ佐渡之事、云、崎、至ニ小
 木港、二十八里、指レ戊、而佐之中則戌亥也、小木至三相川、九里八
 丁、兩津至三相川、七里、佐渡三郡、二百八十餘村、商船六七百石

以下者二十艘許、歲入二十万石弱、御城米五千石、往來松前之舟、或過佐渡外海八十里許、又云、出雲崎有篠本陣屋、所轄七万石餘、崎船隻五百石以下者十八隻、又云、越後海岸九十里餘、

(二月十七日の條)

曇、尙滯出雲崎、午後、寂寥難慰、散步市中、抵向昌寺禪僧廬、地僻俗俚、固不望僧之能解事、然至與之接言、駭其愚魯、會有二丐僧來乞宿焉、見其痛拒之、亦駭其殘忍吝嗇、(勿カ)凶々辞去、市中有妙福寺、地頗高敞、因登臨、佐渡在目、其峯最高而雪最白者爲金北山、近地雪消最遲云、夜大雪、至曉不歇、

(二月十八日の條)

雪、尙滯出雲崎、崎之近村有小島谷(守カ)、近時捕見佐渡寺出馬、○佐渡掘金銀、每歲三千兩耳、然或有多焉ヲ之歲、○諸國御代官、皆管御勘定、而捕見則小村之民、而一旦起爲佐渡奉行、又爲御勘定、土人所說也、○市中有實梅漬于曲物者、問之則云、實易松前者、夜、歸佐渡者禪僧大禪來宿焉、即昨一相見于向昌寺者、

(二月十九日の條)

雪、尙滯焉、終日看讀、無奇事可紀、讀教草、誦進學解、

(二月廿日の條)

朝雪、午後晴、尙滯焉、晚抵浴鋪、此地鋪凡十五所、一鋪每夜浴者四五百人、誦過秦論、

(二月廿一日の條)

晴、尙滯焉、誦原道、

(二月廿二日の條)

曇、浪穩風便、已時發舟將直航小木、愉快甚矣、舟離岸僅里許、細雨沾衣、既而風亦轉方、舟不可行、乃復歸出雲崎、向之快、變為怪、徒茫然自失耳、午後、雨益甚、竟日夜而不止、

(二月廿三日の條)

或雨或雪、竟日不霽、午後、與鼎藏及大禪抵貸本鋪岡村氏、借常山奇談、北越雪譜、北越奇談、昔語質屋庫等書而還、亦可少慰閑矣、予先取常山奇談而讀之、讀至吾洞春公討陶賊一條、夜已二鼓、風雨擊窗、索々有聲、憂佐渡不可航、懷古悵然、

(二月廿四日の條)

天氣如昨、卒業常山奇談、取昔語質屋庫讀之、夜大雪、

(二月廿五日の條)

半晴、終日看雜書、貸本鋪來、借九州軍記、理齋隨筆、

(二月廿六日の條)

晴、如昨、

(初稿中の雜記)

豊臣秀吉譜

松下加兵衛之綱乃授金五六兩、○清洲城壁崩可(間カ)百門、信長命諸士急修補、○永祿六年夏、信長獵于河邊、爲講武也、○信長嘗問炭薪一年之費、監者曰、千石有餘也、○秀吉託美濃土(不明)又以偷竊穿窬爲業者千二百餘人、○三木城主別所長治自刎、年二十三、弟友行亦死、年二十一、○秀吉築姫路城、○秀吉使宮部善靜坊某守城、授食祿五万石、取鳥○上月、佐用、三木、鳥取、高松、○秀吉擊瀧川一益、檄于諸士曰、吾將出重伊勢、卿曹比往近江草津而待之、○毛受勝助自稱柴田修理亮勝家、力戰而死、○天下之賦稅、三分二者地頭取之、三分一者耕民可自取之、○浮田秀家重臣白川肥後守出三木標六百一分與朝鮮人、

水府

- 一 史官ヲ建テ、人才ヲ教育スル事、
- 一 學術を、各其好ミニ隨而、朱ニテモ、陸ニテモ、王ニテモ、皆兄弟ノ如シ、何ソ相闘フニ至ラン、
- 一 大船製造ノ議アリテ、材木等モ餘程集リタル處ニ、回祿ニ逢テ燒失ス、相尋テ公退隱シ玉フ、
- 一 會澤を、諸子ヲ讀ムテ餘リ不レ好、殊ニ莊子ナドハ、甚キライノ話シ、
- 一 綱目ノ書法發明、此モキライノ話シ、
- 一 宋李綱ノ文集ヲ譽ム、

一 天下ノ士ヲ集め事ヲ辨スル事、

渡邊登、鈴木春山、江川太郎左衛門、齋藤彌九郎、赤井巖三、清水俊藏、安積祐助、村越吉太郎、右永井政助ガ數々語ル處ノ人物、

一 農兵臺場掛リノ事、

一 土着離レ行テ、

一 小船難レ勝ニ大船ニ事、

以三関西二十八ヶ國讓ニ弟千幡實朝、以三関東二十八ヶ國讓ニ二幡、

一 二十七八年前、多賀郡大津江、英夷來舶之事、

一 豊田土著之説、

三上山、依藤太蝦蟇ノ、近江國湖水ノ南三里許ニアリ、近江富士ト稱ス、

深見宗方、肥後國相良ノ一族ニシテ、同國水俣ノ城ヲ守リ、拒レ薩事、

小堀遠江守政一、宗甫、以茶道用ニ豊公、後世稱ニ遠州流、

下總相馬郡、

秋風ニ水股オツル木葉カナ、薩、ヨセテハ沈ム月ノ浦波、

深見宗方參河守

木山紹宅阿蘇家、飯田山ノ花見ニ罷リテ、

風ヨリモ烈シキ人ノ心ニテ手毎ニ折ン花ノ枝カナ

○相州北條ノ幕下佐野城主天德寺、○大友ノ旗下佐伯惟常、

細川武藏守高國ノ城荒木安藝守、

細川參齋公藏百首

陶ノ臣永 丹後守、周防國岩國ノ城ニアリ

藝佐伯郡、○浮田直家居ニ備前岡山、

三齋公十二歳、甲着初ノ時、
有吉頼母、勝テ甲ノ緒ヲシメル、
○松岡助丹波一國割リ取クノ話

新發田因幡守治長、從ニ謙信ニ而至ニ小田原、後武為ニ景勝所ニ討

守ニ新發田五十野兩城ニ 五十野、疑脫ニ公字ニ

謙信賜ニ宇佐美駿州感狀、河中島合戦ノ、

上杉舊臣長野信濃守世在ニ上野箕輪、

朝倉士大將託美越前詩、 萬恨千悲有ニ暮然、誰知今夜入ニ黃泉、故國更勿レ灑ニ愁淚、屍暴戰場ニ唯是天、

山内土佐守一豊妻出ニ金十兩、令レ買ニ東國第一駿馬、猪右衛門 トイ、シ

大河内源三郎政房在ニ高天神石牢中ニ八年、

池出家護國公、 藤九郎國清公、

仁科五郎信盛守ニ高遠城、織田信忠攻レ之、城陷、信盛死レ之、勝頼弟也、

筒井順慶カ小姓刀ヲ持テ 居リシカ 牧野兵太、 池田紀伊守ヨリ丹羽山城等ヲ使トス

黒田美濃守職降後稱ニ宗圓、子官兵衛、後稱ニ如水、仕ニ播小寺藤兵衛職、政職城ニ五着ニ歟、文明十七年正月六日、
福岡備前城兵額田十郎右衛門戰死、其將臨陣也、託ニ其子又三郎於岡本筑後守ニ不ニ與レ己同陣焉、

福岡在ニ邑久郡、赤松兵部少輔政則ノ守護代浦上喜三郎則國等守レ焉、備後國山名俊豊攻レ之、

工藤木工、 伊藤、伊東、 加藤、加賀、 菟萱關在ニ筑前、 依散、タワ 苞、千束藁タ シル ハネワラ

田原、 理齋隨筆引ニ雲根志、攝大物浦今尼崎也、○三位以上謂ニ公卿、公卿子、雖ニ童體ニ爲ニ五位、故未ニ元服ニ

者、自稱謂ニ無官大夫、○諸大夫、五位以上總名也、五位以下、亦有稱ニ六位ニ謂ニ大夫、

豆駸界有ニ千貫樋、御代官田中丘隅、本河崎 宿民 所ニ築也、堤上建ニ禹廟、

九州軍記○立花氏、出ニ大友氏、大友貞載始築ニ筑前糟屋郡立花山ニ而居焉、○大友宗麟義鎮居ニ豊後府内ニ○戸次丹

後守鑑連入道道雪與ニ大友ニ同祖、出ニ左近將監能直、掃部頭齋院次官藤親能 子、實頼朝愛妾所ニ生 繼ニ立花家ニ○誅ニ大内輝弘黨、埋ニ諸長府

松原、是謂ニ豊後塚、

○吉弘左近大夫鑑理ニ男主膳兵衛鎮理繼ニ高橋家、後改ニ鎮種、剃ニ髮號ニ紹運、

○龍造寺氏、秀郷裔也、 文治三年、頼朝賜ニ秀家肥佐嘉郡龍造寺邑、及ニ其他諸家、

○島津祖又三郎忠久、頼朝寵ニ比岐藤四郎娘ニ而所ニ生、託ニ高山重忠、○伊東モ八千町ノ領主ニテ、○道雪養ニ高橋

紹運嫡男統虎ニ爲レ子、後改ニ宗房、○道雪肩輿、

淺猿ヤ思ヘハ日々ノ別レ哉昨日ノ今日ニ又モ逢テバ

右品川東海寺澤菴教_三稻葉濃州_二歌也、雖_三異端徒所_レ言、吾輩何可_レ捨哉、固不_二以_レ人廢_レ言而可也、

明日有_ト思_フ心_ノア_ダ櫻夜半ハ嵐ノ吹カヌモノカハ 古歌、

蜀山人、南畝、寐惚先生、大田覃字子相、通稱直次郎、後改七左衛門、葬_三白山本念寺_一、杏花園心逸日休居士、○

岩屋城、_{紹運守}寶滿、_{統守守}之、_{宗茂守}之花、_之、

(秋市松陰神社藏 校合濟)

(鑄方本中の雜錄)

(嘉永五年正月廿七日の條の次に左の雜錄が挿入してある)

一度さきへゆく_をの_{末乃松}茂山_{といつ}茂限りと残る白雪

(宮部照藏の號名) 緒入道賦_二此歌_一

(朱筆) 五月廿日 衣_二人衣_一、食_二人食_一、

(以下八行は原本に抹殺記號が附けてある)

(朱筆) 謚法、不_レ可_レ無者也、無則無_二以明_レ道、謚法、不_レ可_レ有者也、有則無_二以教_レ忠孝、不_レ可_レ無、不_レ可_レ有者、吾未_レ知_レ所_二以取捨_一也、

五月廿五日

防長二國古今事蹟、本藩始祖以來遺事、藩士氏族譜、

邊事遠征 民政 凶荒

寅我藩ニ來ル 年二十一 (この細字は熊本藩士佐々淳次郎筆) 西北遊二十二 投_三夷船_二二十五 建言就_レ死三十一

元和元年大阪落城 寛永十四年天草蜂起、十五年陷 正保四年南蠻來寇 慶安三年由井賊起寛文九年蝦夷乱

寛文十一年初、仙臺公族伊達宗勝、有_二奪_レ宗之志_一、至_レ是發覺、伏_レ誅、 文化二年魯西亞來寇 天正中葛西氏

国除

(宮部) 此行尖庵年紀

(マ、) 松蔭年紀二十二 (この細字佐々筆)

大空の光りハ日々清々れや光を下_二掩_レふ濃雲

(この八字佐々筆) 吉田大次郎矩方識

(卷末に他筆で漢詩十一首、和歌八首が書添へてあるが、松陰の作でもなく又松陰に關係もないから省略する、最後に左の跋がつけてある)

此雖_三寥寥_二舳舳_一、亦先師所_二自作自寫_一、則安忍_レ不_二愛惜_レ哉、宮部君稱_三先師爲_レ人、求_レ得_二其手澤_一、乃贈_二以此紙_一、亦欲_レ使_三君分_二吾愛惜_一也、

辱交 長門土屋敬之識

(熊本市鑄方徳次郎氏藏寫眞 校合濟)

東征稿

(嘉永六年二月)

東征稿叙

庚戌春、五藏聞_二國內有_レ變、而兄死_レ之、謂_レ余曰、我將_二東歸_レ為_レ兄報_レ讎、請與_レ子自_レ此別、爾來四年、不知_二其所_レ為_レ如何_レ也、頃者選_二迨吉田生_一、觀_二其東征稿者_一、其竄_二匿武總之間_一、奔走_二奧羽之外_一、欲_レ報_二其讎_一而未_レ得_レ之狀、歷歷_レ可_レ見也、嗚呼五藏以_二一書生_一、欲_レ為_二烈士所_レ為_一、難矣、而其志百折不_レ撓、可_レ不_レ謂_レ賢哉、吉田生將_二東訪_二五藏_一、使_二余叙_二其東征稿_一、因憶五藏之與_レ余別也、先考猶在、先考為_二畫計教_レ之、今觀_二五藏之所_レ為_一、率先考之意也、嗚呼先考往矣、五藏不_レ可_レ見、五藏縱奉_二先考之意_一、不_レ得_レ使_二先考復視_レ焉矣、今生行與_二五藏_一相逢、則先以_二此言_一告_レ之、癸丑秋、(安元社預藏、傳魯三郎)安元魯題

東征稿

安藝五藏、南部藩士江幡五郎假稱也、遇_二國難_一變_二姓名_一、五藏年十八、西師_二大和人森田節齋_一、從學數年、受_二師命_一遊_レ藝、入_二阪井虎山之門_一、吾藩士土谷彌之助亦後至焉、相得其喜、一日大阪人知_二五藏_一者、致_レ書報_二國變_一、初南部姦臣曰_二田鎖左膳_一、寵_二於老侯_一、廢_二先侯_一立_二今侯_一、五藏兄春庵首沮_レ之、遂下_レ獄死、其徒連坐者十餘人、事在_二某歲月日_一、

五藏聞變大驚、然不著於辭色、獨語彌之助以實、託事忽去、藝赴大和、與節齋謀決策、東來江戶、時某歲月也、一日遇素所識安房人鳥山新三郎、々々々為僦宅于桶町河岸、共居焉、五藏遇國難後、絕文辭交、獨與出羽人村上寬齋交、會彌之助亦東見五藏、喜出于意外、相共往來、因彌之助知五藏者、為吾藩士來原良藏、中村百合藏、井上壯太郎、而因我知五藏者、肥後藩士宮部鼎三也、皆一見如舊、每相會輒置酒、々酣、談及古今忠臣義士姦猾讒佞之事、則五藏先泣、寬齋鼎藏亦泣、座中皆泣、已而大聲劇談、旁若無人、蓋世有下号突社者、如吾輩謂之泣社亦可也、明年冬、我與鼎藏將游常奧、五藏亦有東行之志、謂吾二人曰、十二月十五日、赤穂義士遂志之日也、請以此日同發如何、吾二人曰諾、乃約同行、我有故先發至水府、主井政介家、以待二子、々々々以期日發、先至泉岳寺、拜義士墓、社友送者、至此而返、獨新三郎送至下妻、相泣而別、二子以廿四日來政介家、我欣然出迎同宿焉、水府諸才子、聞吾三人在焉、稍稍來話、夜々劇談、往々至鷄鳴為常、是以延留自廿四日、至明年正月廿日、凡二十七日矣、廿日告別政介及其子芳之助、發水府、芳之助送至青柳渡、五藏賦一詩示之曰、丈夫未殉國、戴頭枉遠游、欲別知心友、河梁哭放聲、相共攬淚而別、廿六日至奧白河、宿逆旅、五藏謂吾二人曰、吾初欲復先侯以成亡兄之志、時勢不可、獨有要擊之策耳、聞賊以四月叛國、機不可失也、請與二君永訣、吾二人請生死從之、五藏強辭之、遂定策、吾二人將經津津、秋田、津輕、以至盛岡、而五藏則向奧路、策已定、置酒、々酣、鼎藏探懷、出金十圓資五藏、々々辭曰、丈夫成事、何以金為、鼎藏正色曰、非金無以全策、且大行不顧細勤、何區々辭讓之為、五藏乃受、

吾二人入會津路、五藏直行奧路矣、已分手、吾二人痛哭、從後連呼五藏々々數聲、五藏不顧而去、實正月廿八日也、吾二人經奧羽諸地、以三月十一日至盛岡、訪阪本春汀、々々者春庵門人也、初春庵之從先侯西也、以母妻二孤、託之、春庵已死、春汀使之居城外山陰村農家、吾二人因春汀往訪之、老母時病眇一目、寡婦扶之而出、吾二人具言五藏無恙狀、老母喜曰、堅彌尙在世乎、吾見君等、猶見堅彌也、因泣數行下、吾二人亦泣、堅彌五藏小字也、初五藏在永府、聞江戶村有其同族齋藤權兵衛者、往訪其家、請寫其系譜、至白河、作一書附之、以與姪文虎、且戒之以勿令恨于本藩、是日告別母妻二孤、至香殿寺、問春庵墓、守墓者曰、春庵之死獄、假埋于此、固無葬祭式、而其夜衆聚供花、々枝委積為丘云、吾二人聞之、浩歎久之、各題一詩而去、五藏之發白河也、至石卷寓某家、為里人講兵書、時跋涉仙臺、福嶋之間、伺賊消息、確聞賊以某日發江戶、將要擊之、未發也、而吾二人以三月十八日至仙臺、欲見五藏、達南部狀、不知其所、在焉、延留數日探之、而五藏未知之也、以某日至仙臺、謬聞吾二人既發、日夜兼行、追吾二人至福島、料其不可及而反、吾二人聞之、亦走追之、遇諸逢隈河上、喜惡交至、為語其家狀、五藏大喜曰、吾可以死矣、五藏平日每言及其師節齋、輒泣、於是作一書寄之曰、回天之力、盡出於荆柯再政之計、非僕本志也、唯先生亮察焉、又各與書於江戶社友、以叙永訣之意、併託諸吾二人、初白河之別、五藏情緒甚傷、至是毫無憂戚之色、吾二人已與五藏別、以四月五日飯江戶、直至鳥山寓、時百合藏、良藏已叛國、彌之助、寬齋、壯太郎會焉、乃示五藏書、皆一讀泣下、獨寬齋怒曰、五藏何不臨發語我、々將挑臂而從、而今不能實、為千載之遺

憾、因淚數行下、一座為之聳動、乃相共謀曰、輯遺文、謀不朽、吾輩之任也、而五藏所著未定者多、他人改刪之、非其意也、獨節齋翁五藏所心服也、取正于此、吾輩與五藏、皆無遺憾矣、皆曰善、於是輯遺文、癸丑二月、我携之赴大和、質於節齋翁、如其傳、將待他日遂志、煩大手筆、姑記之以備採擇、

友人長門

吉田寅二郎矩方記

辛苦經營僅作文、々壇建、幟獨張軍、何如炭漆心如鐵、一劍橫衝陸奧雲、

癸丑三月念二日、吉田生似此稿、余不忍多讀、漫題一絕、以換評語、時余為與拙堂書、故句中及之、節齋森田益

右東征稿一篇、閑翁岡村先生所手寫也、錄以添云、

大正十一年四月十二日 病中執筆

* 安元彦識

* (閑翁は、森田節齋門人岡村達字仲章、閑翁は其號にして、初の名は藤川於菟馬又は定二と云つた、癸丑遊歴日録五月四日の條に、藤川頼二とあるは此人である。安元彦は、安元魯三郎の男彦助である。)

(奈良縣安元年彦氏藏 校合濟曠)

壬子歸國後

睡餘事錄

吉田大次郎

解題并凡例

一、睡餘事錄は、嘉永五壬子の年歸國屏居待命中の、主に讀書に關する日記である、この日記の自筆本は萩市松陰神社にある、本全集編纂にはこれを原本とした、

一、原本は、大さ半紙二つ折形假綴り、表紙・本文とも普通の半紙を用ひ、標題は松陰自筆である、

一、書中、讀書に關する記事の外に、來談客の事も書き加へ、公上に建白したいと希望して居るらしき意見數條を略記してあるのも珍しい、

一、この書に見える讀書に伴ふ抄出條項は、大部分が、屏居讀書抄に見えて居る、讀者はそれを参照されたい、

(委員 安藤紀一)

嘉永壬子五月十二日、歸國、爾後屏息、縮首於一室之中、以待斧鉞之誅、晝則懼暑、夜則憎蚊、惟睡是愛、然進不能爲將相于一時、退尙友聖賢于千古、平日之志也、是以愛睡之餘、亦未敢廢素志也、身生皇國、而不知皇國之爲皇國、何以立于天地、故先讀日本書紀三十卷、繼之以統日本紀四十卷、其間有古昔懾服四夷之術、可法于後世者、必抄出錄之、名爲皇國雄略、蘭夷之航我邦、必發自瓜哇、乃瓜哇之事、不可不審、故讀海島逸誌、古今論策、切于時務者多矣、獨宋人陳同甫論華夷之弁、君父之義、及天下之大計、古今之得失、尤爲痛快、故讀陳龍川文、玉木彦介來、爲讀詩經、口羽壽來、爲講小學、佐々木小次郎來、爲讀蘇轍文、而近日與家兄讀名臣言行錄、久保清太來會、與清讀鴉片隱憂錄、玉丈人亦來會、歸國後至今六月初旬之事、大略如是、別無日錄、六月八日、故置一簿、爾後將記其詳也、

六月八日 玉彦介・羽壽次・佐小次來、皆如例、夜久保來、讀言行錄、亦如例、九日 彦介來、如例、與周田源八・久保清、會讀八家文、卒初卷、與小次郎會讀、卒轍文一卷、卒八紘通誌三冊、卒續日本紀四十卷、

六月十七日 始日本逸史、廿日、孟子會、序說了、廿五日、二章了、止爲口羽壽講小學、更會讀溫故私記、使壽抄錄人名、與小次郎讀詢文、與清・源・小講孟子、自寫了犯疆錄初卷、皆今前數日間事也、六月廿六日記之、(謂源小は久保清太郎、周田源八、佐々木小次郎である)

六月廿六日 晴天、炎威太甚、○彦介來、○小次郎・口羽來、○夜、久保來、

廿七日 少翳、而炎則如昨、彦介・小次郎・壽皆來、久保來、讀隱憂錄、夜、久保不來、
 廿八日 口羽來、夜久保來、自今日爲始錄私記中人名、分門、以四十八字爲號、
 七月朔日 口羽來、三子來、會講孟子、比散、雲與雷轟、薄暮驟雨大至、已而或止或來、達曉、
 二日 大風、未時始止、阿兄登山宅、檢風損、御帳松仆、兒玉大柿樹亦仆、晚間風聞、或云屋倒、或云人壓、或云舟覆、未得確報、
 三日 晴、日本逸史卒業、彦介・小次郎來、夜、久保來、 四日 晴、周田・久保來、
 五日 晴、口羽來、三子來、會講孟子、夜、久保來、
 六日 晴、玉叔來、少讀海防彙議、今日爲始、從松岡醫生說、浴藥湯、口羽來、
 七日 佐々木來、 八日 口羽・佐々木來、夜雨、久保來、廢業、
 十二日 佐々木來、統日本後紀讀始、卒二冊、阪本俊貞、浪華梅ヲ寫し初、即日卒ル、彦介來 前三日玉叔來、亦讀海防彙議、追記、
 廿一日 續日本後紀卒ル、職方外紀亦終ル、
 廿日 (未考) 孟子會、 八月十一日 口羽壽來、 八月十五日 晚、半鐘、水、 八月廿二日 晚同斷、
 八月十一日後卒業書目
 十一日 職官志一終ル 十六日終ル 溫故私記十一二始ル、言行錄後集二始ル
 十二日

十三日 職官志二終ル 十八日終ル 文章軌範正編一始ル 十五日 職官志三終ル
 十六日 職官志四終ル 十八日 職官志五終ル
 十九日 職官志六終ル 全部卒業 下野蒲生君藏 白河家政錄乾坤 著秀實伊三郎
 廿日 魯西亞本紀上 魯西亞本紀下 文章軌範正三始ル
 右八月中旬卒業書十冊、一日僅一冊耳、
 廿一日 令義解一終ル 白川家政錄乾坤終ル 廿二日 令義解二終ル
 廿三日 令義解三終 文章軌範三終 新策一終ル
 廿四日 令義解四終 孟子一會講終 廿五日 令義解五終
 廿六日 新策二 孟子二會講始 廿七日 令義解六終ル
 廿八日 令義解七終 誠忠イロハ文庫二冊 文章軌範五六 海外新話五 外史毛利氏
 廿九日 令義解八終 海外新話四 誠忠いろは文庫三四、二冊
 右下旬九日所讀十八冊、一日僅二冊、而如文庫小冊子、不足錄、徒充數耳、
 ○職官志○魯西亞本紀○白川家政錄○令義解○誠忠いろは文庫初二三四○新策○文章軌範正編○職官志雜話○櫻鳴館遺草○大岡仁政實錄○溫故私記○史記
 九月
 一日 誠忠いろは文庫五六 新策二 二日 文章軌範五六七 令義解九終十終全部卒業、文庫三編三冊

三日 文庫三冊四編 四日 新策四全部卒業 五日 史記一二 滄漢文選四 六日、
 七日 駿臺雜誌一 史記三四 八日 吉田物語二 駿臺雜誌二 史記五
 九日 外史毛利氏終ル 十日 政記三
 右九月上旬廿三冊卒業、每旬末總錄、未嘗不悔前日之怠、而至後旬則忘矣、小人之情可憐已、書此以爲後車之鑑、

十一日 史記六 十二日 吉田物語三 駿臺雜誌三 十三日 史記七八
 十四日 吉田物語五 十五日 史記九、十、十一、十二、十三 駿臺雜誌四 言行錄後集二
 十六日 史記十四、十五、十六、十七、十八 十七日 史記十九 十八日 史記廿 万治寛文延寶斷策一冊 十九日 史記廿一 大岡仁政實錄二三四 廿日 史記廿二 雜話五物語七 實錄六 右九月中旬所讀二十八冊、而史記年月表在焉、不足言矣、而例不敢不數也、
 九月下旬、十月上旬、史記廿三 溫故私記十三 實錄七九 十三四、十五六、十七八、史記二十四至二十八 九月下旬、十月上旬、病且懈、其間非斷不讀書、然闕不錄矣、

十月中旬卒業書錄

十一日 史記二冊 二十九 四十八冊 史記卒業、櫻鳴館遺草六冊卒業、十一月十四日記、
 十一月十六日 始讀漢書、 十七日 始讀二十八史略、

十一月下旬卒業書目

二日 漢書二十一 二日 三朝實錄一 漢二十二 三日 錄二 漢二十三 四日 錄三四
 五日 漢廿四 六日 漢廿五 錄五 七日 漢廿六 錄六 八日 錄七 九日 錄八 漢廿七
 十日 漢廿八 廿九 計十七冊 ○三朝實錄探要八冊卒
 十二月上旬
 一日 漢卅 七日 十八史略卒業 康濟錄一 八日 錄二 漢卅六

(原本、この間に白紙三枚を存す)

九月朔日 孟子會 周田・佐々木・久保來 四日 與齋藤新太郎書成、
 五日 竟日使玉彦介・口壽次習誦詩經、而手写犯疆錄、耳聽讀法之善惡、而爲正之、
 六日 中村百合三至、談論至夜半、 七日 與久保清太郎對讀駿臺雜誌、始于今日、
 十一日 夜、來良三來話、話中及冬讀書餘、尾藤 土佐日記之紀貫之事、
 十六日 夜、松岡良哉來、云、嘗療三世所謂狗神患者、即西洋醫所稱神經病、而唐人則目以中惡病、治之以紫圓六分、其說快甚、

十一月廿三日、聞越中富山藥商話、富山平坦之地、東西廿七里無山、城外有神津川、西數里有親部川、富山侯好盤樂、旧有劇場一所、近更增置一所、金沢曠平之地、然不甚華麗、離海一里、福井亦與金沢相類、離海三

里、越前獨府中敦賀最繁華、藥商之來、發自富山、經金澤・小松・大聖寺・福井、至今莊、左折出木本、至大津、自坂航、至我富海、其重裝則船致之馬關、自阪致物于富山、經內地、亦不甚艱、自阪舟至伏見、陸行三里、出大津、泛湖至海津、又陸行七里、出敦賀、船達富山、越後市フリ・アヲミ之間、所謂親不知之險也、親不知一町、長走七町、糸魚川、前有姬川、

一御末家岩國之學士ヲ募リ明倫官へ入度事

一御發駕御歸城之節御馬上にて有レ之度事 米澤

一武役之面々又ハ御小姓等郊外七八里へ遠乗せし免其優劣ヲ較へき事 清世祖

一宮女江戸御供は被召連ニ義被差止ニ度事 南部臣瀨山命助嘗建言此事、鋼ニ其終身、

一常平倉之意米穀ニ限らぬ麻布木綿其外何ニ依ず其制度被レ初度事

一保任之事 清法甚好

一僧月性あるもの頗る詩ヲ好する由取立て儒員ニ置度事 爲用レ村令ニ還俗、多見ニ于國史、

一策問又ハ氣付書差出候人々ハ其建白取へき事有レ之ハ可召對ニ事 陳亮

一御代初より之上書類悉ク史局ニ附シ類編致度事 乙卯十二月七日錄

(萩市松陰神社藏 校合濟)

癸丑遊歷日錄

解題并凡例

- 一、癸丑遊歴日録は嘉永六年正月、士籍を削られた松陰が、藩府の許可を得て十箇年間諸國遊學の途に上るため、萩を發して江戸に落着くまでの日記である、沿道の學者を歴訪したこと、殊に森田節齋に從學したこと、鎌倉に叔父竹院を訪ふたこと、ペルリ浦賀に来るときいて直に其地に赴いたことなどの記録も、この中に詳しく記してある、卷末の雜録は主として節齋に從學中の備忘録かと想像せられる、
- 一、自筆原本は萩市松陰神社にある、空色厚紙表紙、半紙二つ折の用紙に書かれてある、表紙には、遊歴日録と標題し、右傍に癸丑歳としてある、
- 一、本全集に於ては右自筆本を原本とし、なるべく原本の趣を存する様にし、地名の如き當字、假名書きのものもそのまゝとした、
- 一、本書は既に明治十六年活字本として世に出たことがあり、又吉田庫三編「松陰先生遺著」第二編にも収録してあるが、若し兩者共に本全集に採用した原本に據つたものとすれば、若干の省略と錯簡がある、

(委員 玖村敏雄)

癸丑遊歴日録

癸丑正月廿六日、雨

卯時發萩城、家兄伯教、及佐々木小龜・高洲又・玉木彦送吾、到大谷繩手、赤川淡亦迎吾于天神祠前、相與至大谷繩手告別、獨久保清、送至三田尻、此日、雨寒路滑、所經諸地、皆平日熟路、別無可記者、酉時投警固街飯田氏、普喜新熊亦至、同宿焉、

廿七日、晴、已而晴、將航大阪、待舟延留、訪高井・橋本、訪與久保及飯田行藏、訪羽州庄内人辻新内于其堀口寓居、辻與犬塚友之助、同以去年九月來此、學船上打砲之法、犬塚遊九州、辻以病留焉、聞其語羽州事、庄内侯所領、羽田河・瀧海二郡、而田河郡、有田河村溫泉、地生芒硝、又羽黑山後清川村旁近アテラ沢、採砂金、夜飯田主人有詩、次其韻云、
恩裁舎旧更圖新、報德他年何所因、一語尙聞古人道、爲君爲國不知身、

廿八日、晴、尙留焉、久保婦、作一詩爲贈云、會稽有辱吾敢忘、負爰自憐嘗膽情、吾子遠來送吾行、臨別一語與君評、講學徒與口舌爭、盡作經國大文章、人生得喪一毛輕、英雄常要身後名、嗟吾微志或有成、巴城之下尋旧盟、又題四句、贈家兄代簡云、華浦

桑山天氣和，僕舟行意亂如飛麻，膝下无書君莫咎，離家未遠未思家，送久保，至桑山下，又次主人詩韵云，懷國思家遊子魂，區々名利詎須言，喜君贈我二篇作，語々說來自性源，是日，天晴風好，而舟未具矣，富海距此二里，亦發舟，而三田尻之舟稍大，多載賈人貨物，又不敢犯狂風怒浪，是以其達阪，不及富海之速，富海皆反之，然間有危難，

廿九日，東風吹雨，尙留焉，訪飯田彌七郎，看浪華阪木氏答越前敦賀志摩鳥羽築城鑄砲問書，

晦日，晴，舟未發，因將赴富海，至飯田高井橋告別，行藏送吾至富海焉，無舟，遂宿，同宿有藝商云，藝作新鈔，々々一錢當錢一百二孔，初舊鈔之出，當一百十孔，漸々失權，發新鈔之日，乃至于五錢當一孔，旧鈔悉致之大竹，漉爲紙，藝產物甚多，硝石漆柿

尾道柿漆，多芋類也，而絕無闕市之征，商旅便之，但芋則十貫爲一團，每團征六分五厘，漆致之上國，同宿藝鋼商，鋼取之雲石，繫之周防，二豐肥筑及四國，銅品十數等，價亦相倍蓰，藝銅金銀坑，近皆廢云，△富海戶數五百，舟載人而到于各地者，曰東海舟，此地所有六十餘隻，三田尻則三十隻耳，

登舟，舟中載人八名，一名藝商，一名船木櫛商，皆昨夜同宿者，餘六名須佐百姓，二月朔日，晴，已時發舟，風甚強，至大津島，遂泊焉，僅二里，舟人嘔吐者甚多，既泊臥蓬底，久之，忽聞金鼓之聲喧嘩，與櫓聲人聲雜者，驚起視之，關舟一隻，櫓

如蜈蚣足者，艇過行走如飛，下帆約幕，記号不可識，少焉，又聞鼓聲，近則幕章九曜，而槍号白毫，如是者二隻，皆近吾舟而泊焉，聞其所語，發鶴崎而至馬關，迎候駕者，避風而過于此也，予素望濬疾舟行，又恨本濬舟楫多不適用者，視之不覺淚下，舟子云，九州諸濬多善舟，而其最犯大風怒浪而不顧者，肥後爲尤，

二日，晴，天明發舟，風甚順，比過室積，風始逆，潮亦逆，遂至室津泊焉，十三里許，上陸散步，山上有砲臺，發室津，至小松，舟人有自是上陸，發小松，至津々泊焉，室津至是十二三里許，時夜子時，

三日，晴，天明發舟，至新湊，四里，上陸至岩國，觀錦帶橋，往復路程百町，橋架錦川，々注海処，爲今津，發新湊，至宮嶋，五里，時夜亥時，

四日，晴，早起上嶋拜神，發舟至音門之屋形石止焉，五里許，風止潮逆，已而天亦曇，申時起錨，至音門迫戶，日已暮矣，遂泊焉，迫戶倉橋島與陸地相對爲戶処，人戶稠密，雨頗多，倉橋嶋船匠甚衆，夜雨，

五日，雨，午後乃止，未半起錨，至猫瀬，々甚急，暫止，喫晚飯，瀬稍緩，風稍起，舉帆過瀬，至ノウジ泊焉，夜丑時，音門至猫瀬三里，猫瀬至ノウジ十里，晨起推蓬，則大三嶋在後，四山皆麥綠，

△三里許

丸龜京極佐渡守
五万石

六日、微陰、未明發舟、風頗強、左視田嶋而過、舟師云、田島鯨夫、雁至五島、未時、達讚岐之多度津、十七八里、多度津、丸龜之枝封、京極壹岐守一萬石之陣營所在、戶口繁殷、貨物具備、登高敞望四望、田皆麥隴、丸龜山城、距此一里、甚近、有渠容舟、而潮退則水涸、外面疊石爲堤、以泊舟焉、造築甚壯、岸上多積薪、云、致自藝、渠內有陣屋及士人家、

七日、晴、早起舟皆赴金毘羅、余亦同焉、此至于金毘羅市、中間有善通寺、相傳弘法大師誕生所、又、市中、十八町而有祠、祠地高敞、遠望頗快人意、市戶口、以意料之、不下千戶、壯麗繁華、為一都會矣、未前還舟、往還七里、道傍皆麥田、間種天竺豆、此間多以車載物、有獨輪者、有雙輪者、土地平坦、推挽甚便、天皇陵、而問人多不知者、如金毘羅、拜參者累々不絕、余於是有感作詩曰、海程十日舟爲家、登山一日發悲哥、曾聞此邦駐警蹕、山陵寂莫今如何、神乎佛乎人爭詣、娼家酒樓擅華奢、下瞰鱗々千戶市、鰯口惣是金毘羅、下山有寺曰善通、說是弘法生此阿、以佛混神汝何意、名教千歲爲蹉跎、尔後名分蕩掃地、王法佛法亦同科、佛法之興皇道衰、滄溟何日何日雄風迴奔波、申時發舟、行里許、雪霰忽至、風來不定、至于與丸龜相對處而回舟、泊于石堤內、而終夜、多度津之

八日、晴、曉發舟、風順波宜、行舟十餘里、至于備前之京上藤島、暫休焉、又起錨張

帆、過牛窓、々々戶數稍衆、舟匠居其半、左視大田婦、而至播磨之室津泊焉、夜已午矣、京上藤、至牛窓六里、至大田婦又四里、至室又六里、是日、風不甚強、或帆或櫓、天晴氣晶、甚可愛也、

九日、晴、曉發室津、夜亥時至兵庫泊焉、十八里、室至明石二十三里、所謂播磨洋也、馬關至于大坂、此及周防洋、爲最難險矣、此洋受阿淡間之大洋風、往々有意外之難、而陸地高砂、一見諸浦、無灣港、少有風浪、則斷不可寄碇、是所以艱險也、是日、風甚微、海面如熨、予作詩云、無風無浪海面平、淡山阿山淡水煙、楫師說我是播洋、陰風濁浪動覆船、吾曾兩度過此洋、風浪如意船安便、事有三幸何可常、狂安侮險每覆顛、請看萬事自古皆如此、所以包桑之戒存韋編、淡路之一角、與明石相對處僅一里、爲迫門、至是午時、潮逆不可過、投碇於中流止焉、申前潮順、左視舞妓濱而過、及二谷而日暮矣、遂泊于兵庫、是日、用帆朝間少時耳、餘皆倚搖櫓之力、亦予少學櫓、

十日、晴、曉發兵庫、午時達安治河口、五里、河口左右立柵、每町立柱標云幾番、安治川口水尾木、一番至十番、曉至此、稍用帆、是後專倚櫓棹之力、以繩挽舟、亦數町、安治川橋以下、万橋林立于兩傍、不知其幾千萬、橋以上稍減、湊橋之下、河有三分岐、是爲三木津川、過越中橋、至常安橋下而寄碇、河口至是三里半、裁三家書、夜金毘羅祭日、高松藩邸

△岸上無家之所則△
○過安治川橋而上數町、有湊橋○

中有詞、人多詣拜、余亦造觀焉、

十一日、晴、訪坂本鉞之助于其桃谷邸、鉞之助、号鼎齋、諱々善談、出其所著暴母迦農說評題、鼎齋云、土佐老侯嗜砲技、藩制每年鑄砲八門、口径長短、皆聽砲家建白、皆填以周興嗣千文各一字、其制所由來旧矣、將以盈千爲期云、可羨、又云、浪華人語、仙臺・薩摩、更相貧富、蓋東西之豊凶、大抵相反、而國之貧富、則豊凶之所致也、近時薩摩稍富、仙臺稍貧、訪後藤春藏于梶木町、一見而乃出、還舟、作與三田尻兩飯田書、數日來、体中帶熱、哺食乃寢、(繞城四面、有四門、曰追手、玉造、青十、京橋)

十二日、晴、辰時出舟上陸、將過大和五條、見森田謙藏、大阪有高津宮、云、祭

仁德天皇、過而拜之、土地頗高敞、遠望甚宜、過四天王寺傍、出コボレ口、入河内國、過平野、戶數一千八百、有第御代官平野圖書頭居焉管十二万石、有大和川、々自大和來、故名、平時水甚少、只架板爲橋、川廣百二十間、兩傍築堤、々内植樹有甚古者、川中只平沙、然少雨則大水云、至藤井寺、々一大智檻也、以爲地名、經野中古市諸村、再渡大和川、此間御代官設樂八三郎所管、代官第則在大坂鈴木町、諸村多鍛馬勒者、至春日、自發大阪、至是七里、皆平田中、蓬麥共綠、一望無涯、地蓋生草綿、家々軋々、機制、與所謂下機者相類、而前面極高、譬如險崖峻嶺、所織即所謂河内稿者、有二阪、曰竹内越、阪下有山田

有土井大炊頭

下阪有竹内村、屬葛下郡、焉、及他五村、村、阪嶺爲河内大和界、宿竹内春日至是一里、竹内旗下之士桑山鎮之允所領也、采地二千

石戶數百五十、是日有詩云、一日踏三州路、出攝經河入大倭、榮葉麥芽接空綠、一望澹々春正和、処々道標幾拭目、芳野金剛又當麻、夜雨、

十三日、雨、午時乃晴、發驛經今市、至新所、々々公領、(託カ)之高取侯植村出羽守、竹内至今北、土地開廓、風羽殊惡、作詩云、風雨侵囊笠、殘寒粟生肌、春半和州路、花柳未入詩、獨行况生路、墨子數泣岐、今北至三在、四山稍近、三在至五條又開廓、五條、代官内藤木工左工門治所也、訪森田謙藏、々々名益、号節齋、江幡五郎之師也、謙藏至堤孝亭家、追至其家、是日、行程六里、午後乃達、爲語五郎之事、又聽其論文、至于夜半、快甚、遂宿焉、五條戶數三千、

或曰六百戶、

十四日、晴、從節齋至富田林(錦部郡 仲村德兵衛家、增田久左工門亦從焉、)富田家、出五條驛、登千窟、山頗高峻、千窟城在阪、金休寺、赤坂・嶽山教碧、列于前、爲連珠壘、下山則千窟村、過村至富田林、行程六里、出和入河、其界千窟嶺脊、而與所過竹内越、相連山脉也、富田林八百戶、河内國以石川爲界、即大和川上流、曰上河内・下河内、甲斐庄喜右工門楠公後、食采河内錦郡四千石云、夜宿焉、富田林戶數六百

十五日、晴、尙滯焉、觀董其昌・趙禮叟・空海書、及雪舟畫龍虎、皆希親者、節齋先生甚賞

嘆焉、聞近神戸領在河州者七千石、近藩甚貧困于用度、新揭令云、出金百兩、許苗字、大刀、止于其身、百五十兩、苗字世襲、大刀止于身、二百兩、苗字、大刀世襲、二百五十兩、苗字、大刀、持槍世襲、二百兩、苗字、大刀、槍、騎馬世襲、七千石地、三千兩、國債悉復矣、河内大和公料之地、管轄組頭、即伍長年寄庄屋、代官總之、代官之屬、有本貫者、往々權婦焉、

大和ノ内奈良、郡山、五條、高田、上市、下市、八木、今井、

十六日、雨、聞安藝角力緋威及若州小濱僧山明德説、○象戲高手天野富三郎、小林東四郎、紀州、○肥ノ角力白ヌ火ノ事、○本因坊道玄、與朝鮮人二囲碁、鮮人碁経、用三元之碁経、十七日、晴、大和郡山十五萬石松平甲斐守、泉州岸和田五萬三千石岡部内膳正美濃守、大和高取二萬五千石植村伊勢守出羽守、植村氏出土岐氏、與明智光秀同族也、今諱之、改土岐、稱土喜云、章割結梗、○河泉之間、女工甚盛、男子亦閑則紡綿、亦一奇也、

岸和田戸敷三千

廿三日、晴、十四日至今日、滯富田林、又從節齋至和泉岸和田、發富田林、越小坂、經南野田村、館林領也、至福町午食、制札云、小出伊織、經ハブ、至岸和田、行程六里、△左視、藤山第二而過、△是日、節齋與中有詩云、人情反覆雨耶雲、久似吾樓(江藤江郎)一、四面皆榮睦麥畝、土地肥沃、生色蒼々、△夜訪相馬一郎、名譽字元基、歸時夜已丑矣、馬相居教習館、々、官新造營、以居二郎、許土農工商、皆至受業、有講堂、老候手書額、曰、文行忠信、今侯手書額、曰、教習館、一郎本讚岐人、三年、應藩命來客于此、祿十口、外有五口、

然不列三臣籍矣、

相馬來、

廿四日、晴、是夜又從節齋訪相馬、劇談至旦、以明日巳時歸、○李伯紀忠義編、李綱字

家田多門訂選、東都書坊嵩山房、衆星閣、○明儒學案、黃宗義著、○魏叔子文抄六冊、○壯悔堂文集、侯朝宗

廿五日、晴、

廿六日、晴、訪相馬宅、逢庄屋岸長太郎、岸和田五萬三千石、有中左近、中左大夫、根來藤右衛門、岸長太郎等、其容貌、頗自尊大、延留間、日々與相馬往來、藩人亦稍々來話、岡部十左工門、古屋惣兵衛、濱田雄二郎、宮崎要人、皆抱志者也、山田文英者、雲人也、來泉岡田業、醫、亦來一宿、○

小藩三名大夫、丹波龜山與五右衛門、備中岡田浦池左五郎、及村松、浦池拔、庄屋三宅諸介、爲中老、○紀州有姦臣、曰山中筑後守、有故仰藥而死、安藤帶刀大改弊政、和之間、声名籍甚、有三哥、可爲徵、山筑カ按摩ノ様ナ名ヲ付テ上ヲモンダリ下ヲモンダリ

○山中ガ眞黒ニシタヨノ中ヲ安藤ヘ火ヲ灯シタリケル、○山中ニ栖シ狼追出テ國ハ兼千代民ハ安藤、玉木縫殿亦姦臣、奢侈特甚、○岸藩三百石以上家老職ヲ務ム、

廿九日、訪三宅源之介、儒員也、○節齋論學術、取伊藤仁齋、中井履軒、又尤左三祖姚江、其文章在本邦、取室鳩巢、太宰春臺及瀧彌八、○又常曰、議論皆出自孟子七篇、敘事皆大經、二十四、松堂集、四書釋地、經傳釋詞、經義述聞、王引之、平清館叢書孫星衍嘉慶十七年、出、自史記、而諸子中獨推孫子、○相馬開口、言李忠定、魏叔子、

三月朔、昨夜有雨、至旦而止、終日陰翳、濱田・宮崎來、聞三柘植彌左工門復讎之事、抵其後世繁勝家、叩其詳、有別錄、夜至岸長太郎家、長太郎、每卯過所管農家、推戶覺睡、亦一奇里正也、

三月三日、發岸和田至熊取中左近家、二里、醫生左海祐齋數來焉、

五日、發熊取至岡田山田文英家、行程二里、岡田一漁村也、文英門生西川俊齋、紀人也、ト云モノアリ

十七日、發岡田至堺、行程七里、道經佐野三干、貝塚朴飯、岸和田、泉州繁盛之地、此四処而已、

十八日、訪增田秀齋・小林新介、午後至富田林、行程四里、

晦日、發富田林至大阪、行程六里、宿難波邦五郎家、

四月朔日、晴、訪後藤春藏・藤澤昌藏、即東咳也、高松

二日、晴、訪阪本鉞之助・奥野彌太郎、遠藤但馬守臣

三日、晴、訪後藤春藏、○泉州熊取人左海祐齋、有故屢來富田林、祐齋本商、爲泉豪商食野氏番頭、後食野氏太衰、産落祐齋亦敗産、改名爲醫、頗好讀書、初逢於中氏、後常爲文辭交、有送余詩、余次韻答之云、熊谷騷人未出村、偶聞文戰欲銷魂、勢州消息何須報、名義由來有定論、節齋翁亦有作云、津城文運異寒村、藤氏筆鋒世擬魂、如遇勢人君試問、

大阪城代土屋相模守

○八木高取侯植村出羽守所領、去高取二里許、戸數六百、八木近地有今井戸口頗殷、侍用武功、敵打ノ條ニ入ルヘシ

*この間十數日の記事は原本にもない、恐らく前巻について學ぶに忙しかつたのであらう。

距三五條二里許、三在有二旗本土、小堀直次郎宅、蓋其所領也、

小家孰與大家論、○阪本云、清國廣西辺朱姓ノ人起リ、三州計リキリトリ、元ヲ天徳ト立ツ、北京兵ヲ差ノ是ヲ討ス、一度不レ克、四年前ヨリノナリ、犬塚友之丞辻新内長崎ニテ其詳ヲキ、來話ス、留別南波邦五郎云、故人在東方、生死未レ可知、主翁罹篤疾、性命旦夕危、千里尋君忽辭去、談緒紛紜如亂絲、

四日、晴、發大阪、將抵八木、訪谷三山翁、從坂赴八木、道踰田尻嶺爲便、余不レ詳地理、越竹内嶺、至高田、日已暮矣、此至八木二里、途宿高田、行程九里、

五日、雨、至八木、行程五十丁、謁谷三山翁、畝傍山・無耳山・カク山爲三山、

六日、晴、至五条、投堤孝亭、行程六里、中經峠駅、踰邊阪、京師新町奉行淺野中務少輔、声名籍甚、先是、其同僚某、及諸司代脇阪淡州、皆有令名、衆期其相得有爲云、增田久平婦自京、歸爲余語之、○責而草二編十一、鳥居左京亮忠政、父彦右工門元忠ノ首ヲ得タリシ雜賀孫市重次ヲ待スルコト、并忠政石田三成ヲ預ラシ、レ脱カ或云、非是忠政、即弟土佐守成次ナリ、

廿一日、晴、發五条、至田井莊、行程三里半、投藤井隆菴家、隆菴弟曰重平、子曰柳亭、訪森哲之助、三山之高足弟子也、夜雨、田井庄、高取侯所領、高取今侯、肥大村侯弟也、高取距此一里、山上城樓在眼中、而君侯所居則土佐也、距此半里耳、

廿二日、曇、訪森論孫子訓話、森之嫡曰吉太郎、河州サ山侯、漁獵淫蕩、幕府賜死、事

外篇目次、天地、
世運、聖賢、品
藻、治道、人
情、物理、廣喻、
詞章、

癸丑遊歷日錄

在昨年四月、重平爲余道之、
呻吟語內篇三册、外篇三册、寧陵呂坤字叔簡甫著、四庫簡明書目ニモミ
ユ、孔子是五行造身、兩儀成性、其餘聖人、得金氣多者、則剛明果斷、得木氣多者、則朴
素質直、得火氣多者、則發揚奮迅、得水氣多者、則明徹圓融、得土氣多者、則鎮靜渾厚、
得陽氣多者、則光明軒豁、得陰氣多者、則沈默精細、落花飛絮、豈無死生、落葉窮通、
浮雲生死、不徇習以居非、能違俗而任道、

廿三日、晴、巴鳴三嗅而起、啓啓吾手、啓啓吾足、ナホキ故尙、請請、盡盡日步足呂氏、漢物ノ
アラハル、フ云フ、猶アヲ或若ナリ則而待行痛通涉血涉瀝ノ意ニミタシ、者則ソレハ以由方リ
水草浮水、與レ懸同而疾疾守遺待主、始於盜牛教化之功也、漢始興、郡守某者、御三州兵、常操之

內、免操二月、繼之者罷操、又繼之者、常給之外、冬加酒銀人一兩、倉庫不足、括稅給
之、猶不足、屢畝加賦給之、兵不見德也、而民怨、又繼之者曰、加吾不能、而損吾不
敢、竟無加、兵相與鼓譟曰、郡長無恩、率怨民以叛、肆行攻掠、元帝命刺史按之、報
曰、郡守不職、不能撫鎮軍民、而致之叛、竟棄市、嗟夫、當棄市者誰邪、識治體者、爲
之傷心矣、治道古之人、神謀鬼謀、以レト以筮、豈真有惑於不可知哉、定衆志也、此
濟事之微權也、其講學不語精微、不談高遠、惟以躬行實踐爲本、在明季、最爲醇
正、

子部一、儒家、
呻吟語摘二卷、

寧樂尹ノ一、四
庫書目ニ多ク兵
家者ヲ不載、
放助重華ノ一、
古文不レ可レ取

癸丑遊歷日錄

廿五日、晴、發田井莊歸五條、
廿六日至晦日、貞二郎節齋任日來、爲講三項羽紀、卒一週、
五月朔日、晴、發五條至田井莊、亦宿投藤井氏、訪森氏、小徳川流、大徳教化、川、
小誤、流、化也、敦、大也、猶言小徳小化、大徳大化、互文耳、浮大白、浮罰也、白杯
名、
二日、雨、已而晴、伴吉太郎、發田井莊至八木、訪三山翁、漢王即皇帝位史皇帝
即位五代爲有又化或訛譌鮪音爲ニ郁音或ニ九有、九國、九域、武人爲于大君、
夫婦有別、夫妻ト異ナリ、男女ト云カ如シ○夫婦之愚、西夫西婦、左傳、不レ作夫婦、夫妻側目、沈安頓吾ノ一、
三日、晴、夜微雨、午後發八木至郡山、四里半、中間經後本、旗下士平野兵庫介所領、
有陣屋、郡山、柳澤時之助都城也、和州小泉鈔、行河内、山城諸國、小泉、片桐侯所都、
鈔表面云、阿堵一物、大益貨殖、于農于商、此焉棄斯、裡面云、交易不待權而足、來往無
裝而可、節儉之政、不易之器、千金子貨之、况編戶民乎、表面又云、寶曆十庚辰歲改製、
四日、晴、訪藤川禎二、未後發郡山、至奈良、宿垂井、行程五十町、拜春日社、觀
大佛、々々高五丈三尺五寸、見河路聖謨所建植櫻楓之碑、大和之地勢、五條在四山中、
至田井莊、山稍廓、至八木、至郡山、至奈良、曠廓極矣、凡入大和之地、四方皆無不踰

癸丑遊歷日錄

山而入者、

五日、晴、發奈良、入山城、經加茂、笠置、大川原、嶋原、宿上野、行程九里、加茂以往、皆藤堂侯所領、獨大川原則柳生侯所領也、大川原、嶋原之間、為山城、伊賀界、奈良以往、皆丘陵高下、絕無平田曠野、至上野、地形稍開廓、笠置（驛前）橫絕一川、是為木津川、下川十八里、即大阪也、笠置、後題胡天皇行在、山勢頗險、山下隔二川、而有二聚落、一為南笠置、一為北笠置、々々々、即余所經也、土人云、山南飛鳥路村、二十戶許、元弘之役、以賊徒陶山小見山導、至今他村人民、不與通婚嫁、村中亦有不黨賊家二戶、山傍有嶋城、當時淺倉佐兵衛所守也、木津之上流、至嶋原、再渡、至上野三渡、並謂之伊賀川、上野有城、藤堂采女居焉、

六日、曇、發上野、經山田、平松、登長野嶺、々々上初見勢州海、是伊賀、伊勢界也、經長野、至三軒茶屋、左折取路、經カタ田、入津、宿堅町、行程十二里、山田、平松、長野、三軒、カタ田皆驛也、而寥落一小村耳、夜與延岡藩人三宅喜太郎、同宿、喜太郎者、槍客也、為余道、井上八郎及久留米安豐吉、興志之由、豐吉、魚舖子也、八郎、町家奴也、延岡藩、多定府士、君侯親于江戸、在國士送至大坂、在府士迎至大坂、蓋嘗聞館林制、亦類此、（其就藩亦如此）七日、晴、藤德太郎、水沼外衛至、訪參謀河村貞藏、津有川、曰岩田、水勢不甚大、

柳田宮川之間、有稻木、齋宮二村、山田五千石

津一萬戶

一身田五百戶

桑名戶口、與津相如、

而橋頗壯、延岡藩風、百石以上用棉織、以下用紙織、

八日、晴、朝發津、至雲津、有川、舟渡之、至月本、是稱追分、蓋自伊賀、經三軒茶屋、可以出此、々々其分岐處、至松坂、々々、紀州侯所領、有城焉、戶口繁殷、人家相連里許、至柳田、々々則津所領也、有川、架板為橋、至宮川、舟渡之、至山田、詣外宮、訪足代權太夫、談話久之、山田之法、必求社人送來符章者、宿之、吾因遣村山遠江家、宿之、津至此九里、此至內宮一里、

九日、晴、朝出村山家、復訪足代、松田縫殿亦至、談論至午時、出足代、取來路而歸、晡後達津、旅宿逢大垣藩土野村竜之介、

十日、雨、午後訪藤氏山莊、拙堂翁及德太郎、勢之松坂人家里新太郎名衡、備中中島人三島貞一郎名毅字遠叔會焉、談話久之、夜野村三島家里、來會、

十一日、朝雨、已而晴、至演武處、與水沼久太夫及七里勘十郎、稻葉傳兵衛、深井半左工門、服部專八郎會焉、申時發津、于一身田、訪家里新太郎、遂宿焉、

十二日、晴、經大野、出白子、々々、紀州所屬也、過神戶、松平伊豫守都城也、出追分、是為東海本路、過四日市、至桑名、訪森仲助、行程十里、仲助弟為丸山莊左衛門、時仲助、將赴濃之今尾、莊左衛門及市人磯邊滿次郎、將走大垣神戶、因艤舟、三人欲下以

桑名學校、曰立教堂、

桑名至今尾六里、

大垣五千戶、學校曰敬教堂、野村爲余道之、

今夜發、遂要余同載焉、夜莊左衛門、作詩似余、々歩其韻云、行舟交臂學航船、半夜豪談不就眠、朝來起揭蓬窓見、觀改青山三五嶺、舟中夜明子時上舟、初有微雨、至曉而止、十三日、晴、巳時、舟至今尾、自是登陸、與伸助別、獨與莊滿向大垣、路經三渡、出大垣、同酌一杯而別、訪井上莊次郎、山本多右衛門、各談話少時而去、去大垣、里許、大道、是爲中山本路、渡呂久川渡、川一名久瀬、宿見石、是日行程、今尾至大垣四里、大垣至見石二里、大垣地勢、坦衍肥沃、水流縱橫、其城固可浸也、十四日、晴、發美惠志至河渡、舟渡河、過薩州侯儀狀、過加納、永井肥前守都城至切通、過磐城陣屋、訪和田萬彌、至鶉沼、大垣至此、皆平坦地、過鶉沼、有小阪、曰歌阪、阪上遇尾張人士守大田水番所者福寄又兵衛、相伴而行、鶉沼、右視成瀬隼人正所居犬山城、相距僅里許、過城山下、聞往昔河尻甲斐守居焉、織田右府一夜自岐阜來襲取之、此所始見木曾川、至高窟阪、有石碑、大誇其風景、因戲翻之云、何地無山秀、何山無水流、二句、碑中所有子誠濃人也、曾識東西不、至大田、福寄強請留余宿其官舍、遂至其官舍、々々俯木曾川、仰土田山、實兼江山之美、福寄求詠松詩、々云、鬱々蒼々色、不同桃李春、後凋樹、相見永相親、其隣舍阿部丈右衛門、亦其同僚、來出書画卷、求叙、余乃書與之、有別錄、大田屬加茂大垣至此、諸藩封地、犬牙相接、有大垣領、有磐城領、有尾州領、有加納領公料、

*（東京市長原垣氏藏其稿校合、行間書は相違の點である、尙歌文に、詠松近製一篇、長原雅見乞部正、吉田生、ある）

行程九里

有二代官岩田歛二郎所管、有飛彈代官福王三郎兵衛所管、是日所經、有各務郡、十五日、朝爲福寄作書画卷跋、亦有別錄、發大田行少許、舟橫絕木曾川、過伏見、御岳、細久手、宿大久手、行程八里、就宿後、大雷雨、乍而止、驛訪村瀨某、々云、御岳近村中村、屬可見郡、可見才藏、生于此地、某子有芳、求余字、乃書與之、余有芳贈余以自画二葉、此日馭過本戶人、作一書贈葉山鏗軒翁、此日所過、大抵尾州封地也、伏見以往有齋藤坂、謠坂等、尔後山阪高下、到处不絕、十六日、雨、已而止、終日陰翳、發大湫至大井、此間道左有僧西行墓、經中津川、午食、與江戸人田邊定輔、々々、村瀨誨輔之二子也、相伴而行、經落合、至マコメ、此間爲美濃、信濃界、經妻籠、宿三戸野、此間又出木曾川旁、是日所經、亦皆連山複嶺中也、行程十一里、十七日、晴、發三戸野經野尻、須原、上松、宿福島、行程九里半餘、道常與木曾川相隨、連山複嶺、重々相依、山水可愛、別無一事可記、駒嶽峻絕衝天、殘雪點白、是可觀者、上松駅前、寐覺山臨泉寺、名甚鋪、而過視焉、福島、旗下土山村甚兵衛所居、而地屬尾州、戶數一千、内士家三百、十八日、雨終日不已、發福嶋、有関、々法不要符券、唯脫笠而過木曾之連山、至是

木蘇之地、蚤事甚盛、新秧插後、麥穗猶有未熟者、

△過三奈良井、
而有二驛、曰、
二河川、

稍斷、道路稍垣、(垣)經三宮越・藪原、踰三鳥井嶺、至本山過時、嶺以西之水、西流爲三木曾川、嶺以東則入三筑摩川、是其分界所、嶺頗高峻、嶺上多三橡樹、下嶺有_レ駅、曰三奈良井、△曰、本山、二

地則七万石云、宿三洗馬、行程九里、是日、雨甚、窘迫極矣、

十九日、雨、發三洗馬至三潮尻、々々、洗馬二驛、々々、傍置三貯穀倉、潮尻嶺、上下三里、下嶺

朝霧、已而晴、

有_レ諏訪湖、々旁有_レ諏訪駅、過_レ駅有_レ和田嶺、上下五里半、宿三和田、行程十里半、

廿日、發三和田至三長久保、越三嶺、經三アシタ・望月、々々遇三津和野侯龜井隱州西歸、經三

塩ナダ・八幡・岩村田、々々々者、内藤豊後守陣屋所_レ在焉、豐州見爲_レ伏見奉行、有_レ声名、經三

蘇道梅天不_レ耐
涼、山郷風物
異_レ他郷、新秩挿
後麥猶綠、正是
家々蚕事忙

小田井・追分、宿三沓掛、是日、所過大抵左視_レ淺間嶽、環_レ其脚_レ而過、所_レ經有_レ小諸侯牧野遠州

封地、及代官鈴木大太郎所_レ管、行程十一里半、木曾之地、山深氣清、夜間無_レ蚊、三戸野以往、

夜寐不_レ用_レ帳幕、而追分・沓掛、亦地在_レ大山之脚、清涼異_レ他、絕無_レ蚊患_レ矣、

廿一日、終日霧、發三沓掛至三輕井沢、(確氷)有_レ嶺上十八町、下二里半、嶺上爲_レ信・上界、信之

佐久郡之地、鈴木所_レ管止_レ于此、上之安中侯板倉伊豫守封地、確氷郡起_レ于此、嶺下爲_レ坂本駅、

右顧則妙義山在焉、左視則榛名山_レ聳焉、至安中、遇_レ彦根侯西歸、過_レ安中、有_レ確氷川、々西

坂本・安中之間、
有_レ横川関

安中封地、而川東則代官林部善太左衛門所_レ管也、經_レ板鼻、入_レ高崎、々々、前有_レ川、爲_レ高崎

川、高崎、松平右京亮都城也、至此宿焉、是日所_レ過、尤多見_レ黃蚕殼、行程十一里、

廿二日、晴、發三高崎經三倉加野・新町・本庄・深谷、宿三熊谷、行程十里廿三町、倉加野・新町之

間、岩鼻有_レ林部陣屋、本庄・深谷間、普濟寺邨、有_レ安部虎之助陣屋、倉加野・新町間、有_レ鳥川、

舟渡_レ之、又有_レ上_レ武界、(二小川一爲_レ)武州賀美・兒玉・榛沢・大里・旛羅、

廿三日、晴、發三熊谷至三鴻巣、此間四里八町、鴻巣經三桶川・上尾・大宮・浦和、宿三蕨、行程

十二里、所_レ經皆屬_レ足立郡、其屬_レ大里郡者、熊谷一驛耳、地有_レ忍侯所_レ封及代官江川太郎左衛

門・林部善太左衛門・望月新八郎・勝田次郎所_レ管、錯雜相接、此間畝中多植_レ桐樹、

廿四日、晴、發三蕨、經三板橋、亦勝田次郎所_レ管也、至三白山、與三田邊定輔_レ別、過三齋藤彌九郎

塾、訪三桂小五郎・松村文祥、赤根宰輔、至三桶町河岸、訪三鳥山新三郎、々々々出而未_レ歸、北條秀

英在焉、致_レ書瀨邸瀨能吉二郎及工藤半右衛門・井上壯太郎、瀨能遺_レ僕、并贈_レ在_レ國所_レ託書籍衣

服、又得_レ家大人・家大兄・宮部鼎藏・松岡良哉・近藤源右衛門・妻木彌二郎書、詳_レ父兄朋友無_レ恙

狀、晚間、新三郎婦、壯太郎亦至、談論快甚、蕨至_レ江戶五里、

廿五日、晴、發三鳥山家、至三西窪、訪三長原武、立談少時、去而西、經三品川・々崎・神奈川、

保土ヶ谷・戶塚、皆代官齋藤嘉兵衛所_レ管也、左折入_レ鎌倉、訪三瑞泉寺、行程十三里、上_レ人方掃

門、相見喜甚、終夜談論不_レ覺_レ倦、上人甚稱_レ黑田藩士〇〇平八郎、及土岐丹波守之事、(浦賀奉行タリシ時ノ)脇坂

戶塚、屬_レ山内
莊

八幡
由比濱
頼朝やし
法華堂
頼朝墓
荏柄天神

故淡州、爲三寺社奉行、掌三吾先公夫人喪事、
廿六日、晴、取三新編鎌府志二読之、三十年前、寺院奴僕、歲給三二兩左右、今則五六兩至
七八兩、

相州鎌倉郡、大織冠鎌足公埋三鎌子大藏之松岡、郡名本于此、鶴岡祠背有大臣山、
鎌倉七郷 七口、

壽永元年三月十五日、鶴岡社至三由比浦二造三直道、頼朝言親指揮乎手自沙汰、北條殿以下各々運三土石、
八幡社、永樂錢八百四十貫文、石階、阿闍梨公曉弑三實朝二処、下宮若宮大權現、仁徳天
皇、
「淨国院以下十二ヶ院ハ當社ノ供僧ナリ、

鎌倉十橋、頼朝屋舖跡、八町四方、関東十刹、

義堂日工集ニ保壽院ニ入テ燒香ノ次、余貞觀政要ヲ献シテ乃云、唐太宗天下ヲ治ム、皆此書ニ在
リ、幕下天下ヲ治メントナラハ亦宜レ准ニ此書、府君領、府君トハ源氏滿ナリ、

荏柄天神神宝 詩板、井伊直孝臣岡本半助、石上宣就筆、

江亭記一卷、詩序跋、贈三太田左金吾源道灌二者、

足利直義使三淵辺伊賀守義博弑三兵部卿親王、

永福寺旧跡ハ二階堂ノ跡ナリ、頼朝奥州ニテ泰衡ノ精舎ヲ御覽、當寺ヲ企テラル、彼梵閣ノ中有二

一 建長時額立建長三
二 圓覺時宗建弘安五
三 壽福
四 淨智時立
五 淨妙

東鑑
△錦屏山

階堂、号三長壽院、專摸之、依テ別ノ二階堂ト号ス、

画写鏡法、雌黄一錢、粉霜硝砂各一分、右細研以膠水調、任意於鏡上描三画人物花草故事、俟
乾、火燒片時、以磨鏡、藥磨去、其画自見、古今豎統

長壽寺、基氏爲三父尊氏二所レ起、長壽寺殿妙義仁山大居士、在京日三等持寺、

首藤刑部丞俊通、始居三山内、因氏焉、鎌田兵衛正清從兄弟也、

上杉憲顯ノ末流を山内上杉ト云、ヲ脱か上杉定政扇谷ノ上杉ト云、

長坂氏血鑓九郎、本名彦五郎信政也、早立三勇志、享祿天文間、每レ臨三戰場、毋レ不レ覺三其鑓、源

清康公辱称三血鑓九郎、禪興寺
鐘銘

六国見山、在三圓覺寺背、二總房相豆武

瑞泉寺、基氏建、寺領三十八貫文、公料、貫ニ付一石八斗
朱印、貫ニ付一石六斗

文治五年七月廿六日、頼朝奥州退治ノ時、宇都宮ニテ佐竹四郎秀義常陸ヨリ参加ル、

佐竹旗無紋白旗ナリ、二品是ヲ答メ、月ヲ出スノ扇ヲ佐竹ニ賜ヒ、旗ノ上ニ付シム、遂以爲レ章、

三艘浦、六浦ノ向ヒ、昔シ唐船三艘此浦ニ着、因名焉、武州六浦莊

金沢文庫、北條越後守平顯時所レ建、儒書墨印、佛書朱印、皆楷字、金沢文庫四字豎書、後上杉

憲実再興、憲実亦修三足利学校、々々々々、承和六年、小野篁爲三上野国司二時所レ創、僧義堂、應

南向山補陀落寺、源賴朝爲文覺所營也、修眞言宗、

安時人、有觀金沢藏書一作、

廿七日、晴、僧惠純至、惠純長州字部人也、申時携瑞泉寺維僧梵責、至大塔「清陰」王土窖及法華堂、々々々賴朝公及島津忠久、吾廣元公墓在焉、賴朝忠久二墓、安永八年、島津重豪所修、拜在栴天神、至補陀洛寺、步海濱、遙望富山、日暮而歸、

廿八日、晴、蝦夷有三寺、近者爲善光、遺增上寺僧爲主、次者爲芳樹、遺寬永寺僧爲主、遠者爲報國遺鎌府五山僧爲主、皆七年而更、江州商在蝦夷者、柏屋某有聲、蝦夷有陳平者、声威震于夷中、

冷齋夜話、宋僧惠洪著、善學者、讀其書、唯其理之求、有合吾心者、則樵牧之言猶不廢、言而無理、周孔所不敢從、○平生萬事足、所闕唯一死、○采石渡鬼○至今京洛間、多爲小兒擊毬圖、○富貴中、不得言貧賤事、少壯中、不得言衰老事、康強中、不得言疾病死亡事、○張睢陽生猶罵賊、嚼齒空齧、顏平原死不忘君、握拳透爪、

深二寸二分 廣五寸七分	深二寸二分 廣五寸七分
錦屏山圖	景福軒
延寶九辛酉年九月日	延寶九辛酉年九月日
周栢記	周栢記

廿九日、晴、與竹院上人及僧惠純梵續梵書遊江嶼、先觀大佛觀音、出袖浦一步海濱、至江嶋、歸路取道于龍口、化裝坂而還、○杖履飄々到处休、年來世事我無求、今日天涯却悲喜、三人說尽故鄉遊、次惠純詩韻、

六月朔、晴、發鎌府、取來路入江戶、過長原武所、寓鳥山家、夜已初更、

二日、晴、長原武來、至藩邸訪井壯道、道竟瀨吉、

三日、晴、訪佐久間修理、近澤啓藏來、

四日、晴、訪渡邊春汀、々々不在、訪永原武、至麻布邸逢工藤新山、還至櫻田邸、

逢道家竟助、聞邊警、直至佐久間塾、々々諸生皆以今朝至浦賀、還急發焉、

六月四日、浦賀邊警齊至、余時與客講兵書、乃投書而起、振袂而出、將趨浦賀焉、是日

初夜、至鐵砲洲(做カ)做舟、而風未生、船不可廢、(發カ)懸旅店數時、寅時發舟、々行里許、遇

船燈以會字爲号者、櫓声軋々而來、蓋房總會津營、報事于江都也、已而夜明、風潮共逆、

已時始得達品川、遂上陸疾步、經河崎神奈川、至保土谷、左折至金澤之野島、(北)做舟至

大津、舟程三里、猿嶋之陰、列燈甚多、蓋備舟以備不虞也、直至浦賀、則夜已二更、(土人有)旅宿

與関沢小林鉄五郎相會、設樂莞爾、聞三日未時賊艦來泊、問有不法事禁之不敢從、佐久間象山翁、(土人有)甚愛之色、然絕無騷擾之態、

亦率其門生中尾定次郎等、以昨四夜來、賊「請官」云、此次來此、非有禍心、請勿以

△偶聞打砲聲、靜聽之、則大森演技也、愈進聲愈大、使人英氣奮發、聞擊鼓之聲、思將帥之才、信夫、(*)野鳥置舟會所、以便往來、

警衛船^{鎮府}為^{以今日一時}、奉行從^{鎮府}之、賊以四日上陸、奉行爲^{鎮府}不知、不禁^{鎮府}之、

葛巢河越 龜崎河越 鳥崎河越

砲三門 一隻十町、三隻八町、相距五町、

野比口 ^{伯耆山}津久井 ^{陣屋}上宮田 菊名 松田 金田 松輪 ^{大浦口} 毘沙門 三崎

*（只尺か、尺は段の當字か）

曰、其一砲十二門、其一砲二十門、

船号



六 野比口 長沢口 津久井 上宮田 菊名 松田 金田 松輪 ^{大浦口} 毘沙門 三崎
五日、早起至^望加茂井臨^望海、離^里陸十町許、繫泊賊艦四只、相距皆五町許、内二只係^{其係北亞墨加洲話聖東國人船、}蒸氣船、各身四十間許、備^{三十五}砲三十余門、二只係^{コレカ}コルヘツト船、各身二十四五間、備^{備脚船}砲二十六門、每船皆寂然無^唯聲、但以砲聲報^唯時耳、而我諸砲臺 帷幕砲位未^安備、河越^安矣所^安管^安葛巢・龜崎・鳥崎、皆帷幕蔽^{各八}之、兵士守^令之、加茂井「西浦賀」會津船兵、西浦賀・彦根船兵來守焉、「浦賀奉行土田伊豆守」已時傳^令聞賊言、至^令後一日午時、所^令請不^令允、則打^令砲相接矣、奉行土田伊豆守令^令營後寺掃清、曰、「若^令事不^令可^令為、則屠而死耳、豈^可使^可吾頭與^可賊手、乃^可又聞^可四隻内蒸氣船一只、駛入江戸、「佐久間象山」急^{來見者往々}歸^{來見者往々}江戸、而賊船至^{杉田、導以脚船四只、測量海深、會津船兵往止之、不從、於是彦根・河越・忍船兵亦會、環而進、申時還前泊之處、}三本 牧 海 而 還 申 時 還

或云、是亦訛傳初賊艦之來、與力通詞、往到^{其内}其艦、賊有^{其内}国書、蓋具^{其内}三條、其一、就^請陸地^請假置^請石炭^請之処、其一、請^請通市、其一、請^請締交、而其書係^{其内}彼国主所^{其内}手書、緘封^{其内}鄭重、不^{其内}妄附^{其内}人、欲^{其内}必待^{其内}奉行^{其内}親來船而後出^{其内}書、與力通詞、以^{其内}無^{其内}故事^{其内}拒^{其内}之、夷頭目云、我在^{其内}国不^{其内}為^{其内}

賤員^自、非^決奉行、我不敢^決陳^決使事、與力通詞、對^此以下^此請^此幕府^此待裁而後為^此處置、而官府之令不^此耻^此國体、不^此激^此禍變^此爲^此主、決^{事如}無^{事如}前所^{事如}傳者、

間、賊卸^置脚船、來^置燈籠臺及觀音崎、一二名上^置陸、守兵呵、賊握^置沙于掌上、吹而散^置之、笑而去、或云、賊蓋嘲^置我爲^置沙也、果然否、

此度異國船渡來ニ付御警衛追々嚴重ニ相成候より自然町方之者共心配致候様子ニ相聞候尤之事ニハ候得共心配ニ及候儀ニ相成間敷候既ニ家業も差留不^候申事故靜謐ニ以^候ぬし罷在候様可^候致候

右之通一同に可^候相觸^候旨被^候仰渡^候以上
六月六日 町頭

備前守殿御渡六日觸
大目附 堀伊豆守に

今度浦賀表に異國船渡來ニ付万々一内海に乘入候儀茂難^候計候間若シ左様之節芝辺^候品川最寄之屋敷有^候之万石以上之面々ハ銘々屋敷固候心得ニ而罷在候様無^候漏^候急度可^候被^候達置^候事

六月五日

草偃和言
水府賦策

七日、晴、〔過西浦賀、人家盡處、有彦根藩兵假舖、々右〕西浦賀列〔砲五門、皆二百錢銃耳、海濱列番舟數十隻、至平根山〕、至平根山、〔西浦賀番所前海、列舟數隻、番所右列砲數箇〕、千代崎燈臺下、望賊艦、未後赴〔蛙舖樓上、望遠鏡以望賊艦〕、

八日、晴、越尻コスリ坂出、巡視沿海、至松輪御崎、歸路過久里濱、聞賊以明日來

于此、呈国書、奉行二員親臨焉、〔一員素所居戶田伊豆守、一員井戸石見守、昨発江戸、今日來于此〕、沙濱上預樹幕柱竹欄、浦賀以

西礮臺五、日、千代崎、日、伯耆山、砲二門日、大浦、日、劍崎、皆彦根而臺地過高無二適

用、〔平根山〕上宮田・三崎、皆陣屋在、〔多役〕宮田聚農民盛春米、又做飯爲丸、以給士卒、今日所炊僅

十苞耳、三崎稍多、乃至七十五苞、西浦賀尤多、平根山則仰飯丸于浦此、三崎多聚漁舟、

陣屋兵士將赴久里濱也、

傳聞、賊艦内有病人三百人許、已時上陸久里濱、以索藥草、且測海深、前後二次、

前數日來、往々有牛馬載家具而過者、〔放脚船二隻、來〕蓋問之云、家有老人小兒者、慮災避于内地佐原

也、

九日、於久里濱兩奉行出張、夷書受取、是日晚發浦賀、十日午時櫻田邸に着、九日夕方

々夷船四隻共、本牧沖迄乗込、十三日退帆、江戸中大鼎沸、廿二日々九鬼式部少輔・本多越中

守・河路江川等、相藏總房海岸御順視、

廿五日ヨリ宮津藩醫員古田仙隆に行ク、

井上河内守臣
赤松孫太郎

百金
即帛金
且ト通ス

○費雷彌爾ト同 不レ修ニ其功ニ 修收、同音同義 懸權而動 懸空ナリ、埋輪ハ止ナリ、人死埋名、張綱埋輪ハ車ヲ止ムルニ、推埋、追止也、 行者不レ埋、居者 傳ニ於敵間、此說妙、 九交高錯簡說可レ從 拘連鉤ノ鉤、曹劌曹沫同人ナルベシ、クワイ、 不責於人、 載、呂氏春秋 近シ、 順詳リ 作ナ 礮 夷關關ハ類、士人尽レ力△乃治レ産積レ居、與レ時逐、故善治レ生者、能扱 レ人而任レ時、擇レ人擇、釋、屬治ナリ、内納ナ 輔直ニ一輔佐ト訓ス、 ○武進孟進ト同シ、 疾ナリ、疾ハ 衆爭爲レ危、衆爭ノ字、 廣雅ノ訓 義同 短亦急、 ○且モシト 始計篇 將レ聽ニ吾計、 ○其用 レ戰也、 疑衍、三山ノ説、 攻字更添ニ久字ニ看 役不ニ再籍、糧不ニ三載、 駟或作レ乘、非、 馳車奔志、馳驅之 車、甲冑弓弩一作 苾苾 丘役 丘牛 軍形措勝 虛實措ニ勝於衆、 軍爭合和而舍 和、桓ナリ、華 用ユ 地形故兵有 九形不レ修而戒 得備 是故不レ知ニ諸疾之謀ニ句 ○ 將者、 潛夫論、引作ニ智仁信敬 勇嚴ニ將者、 七計岡白駒 計利以聽、 試制ニ利字ニ而分 居途慮 梯機之 女戸鬼拒、 經義述聞 春秋名字解 玉篇礮 都乱切、礮石也、 礮下加切、礮礮高下也、 礮礮、字体各異、音義俱別、 又安可下説ニ礮屬 之礮、爲ニ礮礮之礮上乎、 史韓信傳 陷ニ之死地ニ而後生、 置ニ之亡地ニ而後存、 犯旋也、列子周犯中レ讖、三山ノ説

○ 下関ヨリ長崎 長崎ヨリ薩州

下関廿一里 筑前相嶋廿一里 肥前奈古屋十三里 平戸七里 牛カ首五里 ヲモダカ五里 松島十三里 長崎十
八里 カバシマ (不明) 六里 江野津二里 古城二里 洲智輪一里 唐崎七十里 是ヨリ薩州 川嶋十八里 鬼ヶ崎七里
悪根八里 京泊三里 鹿兒島茂木十里 早崎ノ瀬戸三里 口の津十八里 川尻

萩ヨリ青森

萩八里 須佐廿一里 石州濱田十リ 湯の津十七リ 雲州 (雲州) ウリウセリカ、四リ 雲津三リ 三尾ガ関 三十リ
(因州) 諸寄八里 美作二フノ柴山八里 但馬朝日二リ 夕日五リ (丹後) 經ヶ崎二リ 稻五リ 宮津廿三リ 若狭小濱十六
リ (越前) 敦賀六十リ 能州福良十三リ 和嶋十リ 塩津崎 三十五リ 佐渡澤崎、十五 根津関十三リ 酒田九リ 塩越
六リ 本庄十六リ 秋田十六リ 渡鹿十六リ 能代十八リ 深浦廿七リ 竜飛崎二リ 三厩十六リ 青森

大阪ヨリ江戸二百四十五里、

両川口 木津 安治十三リ 紀州加田六リ 大崎六リ 由良三リ 日比ノ岬十一リ 網シラズハリスサミセリ 二ブノ
袋一リ 沙ノ岬半リ 大嶋五リ 浦上三リ 勝浦十五リ 二本島三リ 葉枝半里 九鬼八リ 錦二リ 古和六リ 二江
州 (志州) ニリサ、ラ九リ 安乘四リ 鳥羽七十五リ 下田三リ 外浦十六リ 相大網代十九リ 御崎五リ 浦賀八リ 神奈
川六里 品川

○江戸ヨリ南部マテ

品川卅リ上總メラ崎十三リ奥津八リ大ドウ十八リ犬棒十八リ常州中ノ湊十六リ平方五リ塩屋崎四十二リ佐武沢五リ石巻十リ金山廿リ氣仙七リ獵利八リ大ヅラ南部大ツチニリ田ノ濱三リ大浦四リ宮古十五リ久慈矢間十五リ八戸十八リ泊リ七リ尻ヤ崎六リ大畑八リ弁天一リ半奥戸ニリ佐井十ハリ青森二十五リ松前

○

源西山宴花下詩 梧窓詩話、加賀儒官
林瑜孚尹 蕨坡

有レ花有レ酒兩相宜、酒已闌時花亦奇、此日看レ花添酒興、今春啣レ酒問ニ花期、花如レ珠也酒如レ蜜、酒入レ杯兮花入レ詩、一笑愛レ花還愛レ酒、花之與レ酒我生涯、

○

(不明)耐無禮水戸 爲這親隨 准(不明)筵(不明)再サラニ小的 披掛

才豊人罕講(不)學(不)蘭(不)曾楚鄴 大和・河内・和泉・近江・播磨・但馬・備中・攝津

石井繼(不明)

○

節齋先生

落魄江湖卅歲餘、放浪詩酒費居諸、慨然今日碎(江崎五郎)盃去、欲著人間有用書、

養成氣節我門流、不許庸兒徒從遊、愛子眉間存(示松陰)豪氣、吾樓以後一吾樓、

辛苦經營纔作文、々壇建職獨張軍、何如炭漆窺(寄懷江崎吉樓)姦賊、一劍橫衝陸奥雲、

疾ユキテ家ノ風ヲモ起ヨト言シハ永キ別レナリケリ 哭レ母

文筆愧難攀難古賢、匹如瓦礫不レ當錢、何圖僧父誤為レ玉、梓布人間未定編、

○(表紙の見返しに次の如くある)

三在ヨリ左スカワ、風ノ森、舟地、鳥井戸、

撫育草 佐田村 八百藏

送珉山禪師(豊カ)鎌倉淨智

藤森朋友長野芳山

伊豫ノ小松ノ大阪留守居 三名士傳 松陰快談

引ソメシ心ノ儘ニ梓弓思ヒレへさで年も經レけり 源頼武

君の為メ世ノ爲メナニカ惜カらん捨て、甲斐アル命ナリセハ 宗良親王

戸田 伊豆守

三二一

癸丑遊歴日録

三二二

井戸 鉄太郎

水野 甲子二郎

(萩市松陰神社藏 校合濟園)

長崎紀行

解題并凡例

一、長崎紀行は、松陰、嘉永六年九月十八日、江戸を發して九州に向ひ、長崎に赴き、それより萩に歸るまでの五十日間の旅行日記である、

一、松陰夙に萬國の形勢を聽いて、國事に思を繋けて居たが、この年六月、米艦浦賀に來てより、時事を憂ふること益切にして、謹慎の身ながら、將及私言其他の意見書を藩主に呈し、又、その師佐久間修理等同志の士と、日夕時事を討究して居る内、七月露艦が長崎に來たので、修理等と謀つて、航海の志を決し、竊に露艦に投せんと欲し、さてこそ、九月十八日に江戸を發したのである、然るに、長崎に至れば、露艦已に去つた後である故、志遂けずして、空しく萩に歸省した、この紀行中には、憚る所があつて、旅行の目的を明言はせぬが、その意は、暗に文字の間に隠見して居る、

一、この記は、固より旅行當時に、毎日書き繼いだものであるとは思はれるが、記中の詩は、別に書き留めて置いたのを、後年、江戸の鳥山確齋の家から、久保清太郎を経由して、松陰の所に返された後に、記入したものであることが、松陰神社にある紀行原本の添紙に書附けてある松陰自筆の文松陰詩稿中西征殘稿の序で察せられる、故に、この紀行文の體裁の整へられたるは、安政四年久保の江戸より還りたる年以後であらう、

一、今萩市松陰神社に藏せられてある長崎紀行は、稿本のみ、の體裁で、半紙二つ折形の假綴に、表紙は普通の半紙

を用る、標題はなくして、そこに書附けてあるのが、即ち西征殘稿序文の草案である、表紙の見返しには、當時長崎に來た露艦の名稱、主役、船頭、乗組人員等が詳細に列記してある、本文は無罅紙で、行数も毎行字数も一定せず、總て松陰の自筆である、これより外に淨書したのも見當らぬから、本全集編纂には、これを原本とした、

一、原本には、右に述べる通り標題がないから、長崎紀行の名称が、當時有りしか否かが分明でない、今は、その帙に長崎紀行原稿と書いてあるのと、吉田庫三編輯「松陰先生遺著」に、回顧録附録長崎紀行など、あるに據りて、書名を定めた、

一、刊行本としては、右の「松陰先生遺著」の外に、明治十九年、京都の文求堂から回顧録附録として木版で出たことがあつた、

一、書中、十月二日拜鳳闕（第二巻口）詩（繪參照）は、後年屢改修した形跡がある、これは、尊王の意のよく表れた作で、世に稱揚せられ、その詩幅は、御物にもなつてゐる程ゆゑ、特にその改修の跡を考證して、末尾に附載した、

（委員 安藤紀一）

○嘉永丑七月十七日申刻白帆四艘注進明十八日暮入津ヒートルブユル子十月出船

第一フレカット主役ブーチャーチン長三十二間九合餘幅七間九合餘乘組四百二十六人

ヒートルブユルグ船

第二ストムボート船頭コルサコーフ長十九間三合餘幅四間二合餘乘組三十八人

第三コルヘット船頭ヲリウツサア長二十三間三合餘幅六間三合餘乘組百六十三人

カムシカット船

第四タランスボルトシキツブ船頭フウトルヘルム長十五間八合餘幅四間九合餘

乘組二十八人

八月十九日上陸、元船幸崎に有、御檢使健幸丸御連レ、大はゞ上り、西御役所江御呼出しニ相成、惣人數四十五人上り、バツチーラ六艘、

(以上表紙見返しに記載)

長崎紀行

嘉永癸丑九月十八日

晴、発江戶、將西游、是行、有深密之謀、遠大之略、象山師首爲之嚮導、友人鳥山新三郎義所・長

永島三平・桂小五郎

取・圭木亦爲之贊成、其他深交旧友、莫一識者、朝発三桶街寓居、過象山師告別、出品川驛、義所・長取追送焉、

待圭木不至、悵然久之、決然振袂而去、有二詩、留贈象山師及義所、長取・圭木、云、名利無心世上求、一

生不願被三人尤、獨悲驚駭報恩計、詭遇常爲君父憂、宿金水、此日有詩、云、心藏乘桴思、笑向故人辭、道過

浦郎塚、感嘆立多時、

土谷松如旧交也、而不預此議、但留一詩云、經生說經々亦亡、何望於國有所成、文士作文々雖美、到

底不免覆敗醬、挽回此弊世誰有、堂々之身未可輕、朱絃綠竹半宵歛、勿誤英雄千歲名、

十九日 晴、発金水、宿平塚、是日天光精品、空無片雲、見芙蓉全容、作詩云、吾曾兩度過芙蓉、芙蓉何心

(上欄)更向五字、作余將趨西海、心作意如何、(肥山) 結一句、少露鋒穎、當時義卿意中可想見(同)

潜三峯、今日更向三峰行、芙蓉含雪呈全容、料知芙蓉亦有心、欲向真崙評雌雄、

二十日 雨、已而晴、発平塚、越函關、宿三島、有懷治心氣齋山田先生、作一詩、初出國時、先生贈以四

條誠、今乃背其二、無堪感慨、今作此言、亦強項耳、先生四誠二不違、自非誰知他先生亦不嗔、不違却有深違處、

二十一日 雨、已而晴、發三島、宿由井、
 二十二日 晴、發由井、宿藤枝、
 二十三日 晴、發藤枝、宿袋井、
 二十四日 晴、發袋井、宿荒井、邂逅肥後藩士津田山三郎・河瀬典次、作詩贈之云、東下西上客、邂逅荒井亭、一見無他語、先惜日西傾、說出東西事、一嘆又一驚、東海東夷狀、西海西夷情、悲哉尙武國、宴安忝神京、君行六七日、東將入武昌、武昌都會地、世途觀經營、俗士固耽利、才子徒偷名、紛々萬億人、孰期皇道明、吾亦去遊西、肥豐接豪英、再會定何日、屈指數行程、行程亦邈矣、離合將何常、分手續回顧、難捨心緒繁、
 二十五日 發荒井、宿藤川、
 二十六日 發藤川、宿宮、
 二十七日 發宮、航桑名宿焉、訪森仲助、
 二十八日 發桑名、宿坂下、
 二十九日 發坂下、宿草津、
 十月朔日 發草津、航琵琶湖、達大津、入京、訪梁川星巖、
 二日 朝拜禁城、有詩、云、山河襟帶自然城、東來無日不憶帝京、今朝盥嗽拜鳳闕、野人悲泣不能行、鳳闕寂寥今非古、空有山河無變更、聞說今上聖明德、敬天憐民發至誠、雞鳴乃起親齋

戒、祈掃妖氛致太平、從來英皇不世出、悠悠失機今公卿、人生如萍無定在、何日重拜天日明、繞三條城、出伏見登桃山、夜舟下淀川、至大阪、
 二日 求西下舟、訪南波邦五郎宿焉、
 三日 至旅亭、待舟至于八日、八日上舟、而舟未發、夜有雨、作詩云、狂夫未必不思家、為國忘家何可嗟、中宵夢斷家何在、夜雨短篷泊浪華、
 九日 舟下安治川、泊天保山下、
 十日 早發舟、到高砂、泊焉、
 十一日 早發舟、到日比、泊焉、
 十二日 早發舟、過輦到御手洗、泊焉、
 十三日 雨、猶留泊焉、夜訪大原屋清三郎、々々々作詩示吾、々次其韻云、未掃虜氛不險詩、會因新句得新知、相逢苦口君當恕、豈是嘲花弄月時、
 十四日 發舟到黑島、泊焉、
 十五日 發舟過家室、到室津、泊焉、有詩、云、歸鄉夢斷涕漣々、舟子喚醒是上闕、篷窗勿怪起來晚、去國忍看故國山、
 十六日 發舟絕硫磺洋、達鶴崎、初同船有豐後雜僧、臨別、作詩贈之云、十日同船亦因緣、交淺言深非突

然、子是釈徒吾是儒、々釈異同本天淵、々々異同措不_レ論、目前工夫且相傳、一切佛經陀羅尼、字々句句要_二精研_一、初
學要務在_二誦誦_一、靜坐只當_レ如_二參禪_一、子以_二年少_一苟自安、知否孔聖志学年、血氣切勿_二酒色_一、經營切勿_二利名_一、生
前因緣復相逢、爲_レ子更說_二孟韓編_一、夜訪_二毛利到_一、

十七日 發_二鶴崎_一、宿_二古武田_一、夜夢_二諸友_一、因作_レ詩云、會於_二夢寐_一見_二知音_一、覺來落月在_二庭陰_一、吾唱誰和歌誰舞、
獨有_二乾坤知_二是心_一、裏_一遇_二見_一知音、覺來落月在_二庭陰_一、吾唱誰和歌誰舞、

十八日 宿_二坂梨_一、

十九日 達_二熊本_一、宿_二坪井_一、是日、越_二三重嶺_一、望_二阿蘇山_一、雲霧濛々、不_レ辨_二咫尺_一、有_レ詩云、東道望_二富士_一、三峰
白粲々、西道望_二阿蘇_一、向_レ背雲漫々、富士恰有_レ情、不_レ愧_二天下冠_一、阿蘇何怯懦、見_レ吾乃逃道、奇哉名山靈、識取英
雄漢、

二十日 宮部鼎藏來、伴訪_二横井平四郎_一、荻角兵衛亦會焉、夜至_二宮部_一、留宿、

二十一日 矢島源助・莊村助右衛門・國友半右衛門・今村乙五郎・丸山運介・佐々淳二郎・湯地丈右衛門・村上鹿之助來
話、

二十二日 與_二宮部_一同訪_二横井_一、終日對話、夜訪_二村上_一、澤村義右衛門・神足十郎助・今村、
村上作之允・原田作介、

二十三日 横井久右衛門・吉村嘉膳太・木村彦四郎・廣田久右衛門・岩佐善左衛門・森崎平介・丸山・佐々・今村來、夜横
井來、

二十四日 丸山・佐々・今村・森崎・野口直之允來會、訪_二池邊彌一郎_一、國友半右衛門、半右衛門以_レ疾不_レ逢、

二十五日 松田・神足・吉村・村上・丸山・今村來會、午後、發_二熊本_一、松田送至_二高橋_一、至_二尾嶋_一、而舟未_レ發、

二十六日 曉發_レ舟、至_二嶋原_一、同舟加來傳兵衛・桐原作右衛門・伴九左衛門、亦肥藩土地_二着於阿蘇_一、高森_二者也_一、宿_二
守山_一、

二十七日 達_二長崎_一、宿_二濱町_一、訪_二中村仲亮_一、高見杏菴、皆不_レ在焉、

二十八日 訪_二中村高見_一、大木藤十郎、高見家逢_二中村吾道_一、

二十九日 訪_二大木_一、夜會_二栗崎道意_一、會者深田齋齋、高見正菴也、

卅日 訪_二大木_一、夜會_二栗崎_一、會者齋齋・正菴・岩永養菴・大田祐慶也、

十一月朔日 昨夜藝人琴崎謙藏來宿、朝伴_二鎌藏_一至_二栗崎_一告_レ別、又過_二中村仲亮_一告_レ別、宿_二千々波_一、

二日 宿_二大湊_一、

三日、四日、留_二大湊_一、夜佐々・丸山來、五日、歸_二坪井_一、六日、松田・矢島・江口純三郎・森崎・廣田・木原・村上_一作兼、
坂熊四郎・野口・丸山來、申時、與_二宮部_一訪_二有吉老夫_一、千石田中大阿・荒木權之進會焉、夜、森崎來、七日、竹崎

律二郎・矢島・江口・丸山・廣田・野口・宮部兄弟追送、宿_二山賀_一、矢島來_レ此一宿、八日朝、分_レ手、宿_二柳川_一、九日宿_二松
崎_一、十日宿_二青柳_一、十一日歸_二赤馬關_一、宿_二伊藤氏_一、十三日入_レ萩、

(萩市松陰神社藏 校合濟)

〔編者考證〕本書十月二日條下にある拜禁城の詩、後年、人に示す此稿を對比するに、文字に小異同がある、今之を左に掲げる、

一、第五句の寂寥を寂寞と改めたもの、（東京市益田元亮氏所藏の稿に據る）

二、第二句帝京を神京とし、今朝云云の句と野人云云の句との間に風闕寂寞今非古、空有山河無變更の十四字を置き、第七句今上を今皇とし、第十句妖氛を妖夷としたもの（嘉永六年十二月七日 益田節齋に贈る書中）

三、第二句の無日不を日に帝京を神京に、第五句を上林黃落秋蕭瑟に、第七句の今上を今皇に、第十句の掃を讓に改め、此句と次の從來英皇云云の句との間に、安得天詔勅六師、坐使皇威被八紘の二句を、新に置いたもの、（松陰詩稿所載に據る、改稿の年月は分らぬが、安政二年の末頃であらう）

四、第二句の日不を不日に、帝京を神京に、第五句を上林零落非復昔に、第七句の今上を今皇に改め、第十二句悠々失機云云と次の人生如萍云云の句との間に、安得天詔勅六師、坐使皇威被八紘の二句を置いたもの、（安政三年六月揮毫の大書幅、原本は、御物となつて居る）

五、第二句を形勝依然舊神京に、第五句を上林黃落秋寂寞に、第七句の今上を今皇に、第八句憐民を愛民に改め、第十一句以下を、安得天詔云々、直使皇威云々、從來英皇云云、悠々失機云云の順に列したものを、是が拜禁城の詩の改修の最後らしい、因て、左にその全部を掲げる、

山河襟帶自然城、形勝依然舊神京、今朝盥嗽拜鳳闕、野人悲泣不能行、

上林黃落秋寂寞、空有山河無變更、聞說今皇聖明德、敬天愛民發至誠、

鷄鳴乃起親齋戒、祈掃妖氛致太平、安得天詔勅六師、直使皇威被八紘、

從來英皇不世出、悠々失機今公卿、人生如萍無定在、何日重拜天日明、

是寅癸丑十月拜禁闕作也、後六年、有八十八卿詣闕抗疏之事、

天子聽納、勅諭汗發、而四方不能違、則外藩更可愧也、己未五月下浣、藤寅錄、

（尊攘堂版松陰詩集所載に據る）

甲寅乙卯丙辰丁巳

野山獄讀書記

二十一回猛虎

解題并凡例

一、本書は、安政元年十月二十四日から同四年十一月に至る迄の間に、松陰の讀了せる典籍名を主として記録し、時に對讀者の姓名を附記し、稀にその短評を加へ、又時々練習せる書道の記録を挿み、或は自らの作文著作の題目等を月次によつて列記したものを本文とする、右期間のうち、安政二年十二月十五日までは萩野山獄に在り、其後は杉家の幽室に在つた、思ふに、この三年餘は、松陰が實に渴せる者の水に對するが如き關係に於て、讀書と思索に没頭し、遂にその思想を確固たる基礎の上に統一した重要な期間である、而もこの間に、獄中でも幽室でも、自らにして囚人や親戚の少年等の教育が行はれるに至つて居るのである、かくてこの讀書記は極めて貴重なる修養と教育の記録であると言はねばならぬ、

一、本書には、右の本文以外に、弘化四年から嘉永三年までの間に書かれた雜錄、抄録の一部が合綴してある、これは元來三小冊であつたものを、何人か、後に前記本文と合綴したものらしく、裏表紙の方から紙が逆に綴られて居る、

一、本書の原本は萩市前原彦八氏所藏である、蓋し同氏の先々代佐世八十郎（後の前原一誠）が、其師なる松陰より贈られたもので、本書の雜錄の終りに（綴り方が逆であるから原本の中間になるが）「吉田先生所賜」とあるのは佐世の筆である、原本は厚紙濫引表紙（表面にはたゞ「甲寅乙卯丙辰丁巳」の八字があるのみ）の附いた半紙四つ折

横綴八十枚から成り、反古紙を裏返して使ったところもあり、空白が十七枚ある、記載は多く墨書であるが、朱書のところもある、本全集に於ては空白、朱書の箇所は別に指示せず、すべて墨字であらはし、又頁数の關係上、二段組とした、文字の排列はなるべく原本の趣を存する様にし、人名の略稱には註を施した、漢文の句讀點返點は殆んど全く編者が加へたものである、因に本書の中扉は原本内表紙の文字をあらはしたものである、

一、本書は、昭和六年、京都市の貴重圖書刊行會から、原本と同型にした精巧なる寫真版によつて公にせられたことがある、今これを原本と比較するに、厚表紙のないこと、朱字の若干が墨字になつて居ること、空白紙數が足らぬこと以外には誤謬はない、

(委員 玖村敏雄)

甲寅

十月念四日入獄

- 一 蒙求三冊
- 一 延喜式三十冊、廿七日返した十一月十七日卒業
- 一 史徴八冊卒業 返す
- 一文選
- 一 唐詩選掌故
- 一 和漢合運
- 一 日本輿地路程全圖
- 一 歷代州郡沿革地圖
- 一 坤輿圖識三冊 新製輿地全圖壹軸
- 同日
- 一 海國圖志
- 十一月廿三日 同廿七日返す
- 一 令義解十冊
- 十一月廿九日 十二月三日返す
- 一 智囊三冊

野山獄讀書記

- 十二月三日
- 一 資治通鑑 第一帙序一冊七冊了十二月三日
- 一 草偃和言一冊畢
- 同日
- 一 楚辭編一冊畢
- 一 詩韻含英異同弁
- 一 秦平年表完
- 一 天保武鑑
- 一 七書正文
- 一 唐宋八家文讀本三冊
- 十二月九日
- 一 宋名家詩選二冊
- 同日
- 一 夢比志路 七八九
- 一本朝武林傳二十三冊 卒業
- 一 唐人絶句選
- 一 詩類函
- 一 信玄全集
- 一 弁州詩集

三三九

- 十二月廿八日
- 一日本外史
- 一入蜀記二冊 一讀了十二月廿八日
- 十二月廿八日
- 一四書集註
- 一周易傳義
- 一易學啓蒙
- 一三體詩
- 一靖獻遺言二冊并講義共四冊
- 大畧百六冊許

安政乙卯正月

- 一靖獻遺言一之四五六 講義一冊
- 一信玄全集十二冊 十一卷ヨリ終迄
- 一日本外史
- 一北條五代記五六

以上四十四冊

三月

- 朔日初
- 一信長記十八冊 四日了
- 四日ヨリ 廿九日了
- 一通鑑二十冊 四十五冊ヨリ六十四冊ニ至ル、五日了
- 一韃靼勝敗記二四五 十日了
- 一和蘭兵書一冊 十八日ヨリ十九日了
- 一世事見聞錄初編三冊 論三時弊痛切、
- 一山谷清涼一 譯了 廿二日了
- 一近世名家文抄二 廿三日
- 一水府公與三福山侯論海防書付一 廿三日
- 以上四十八冊

- 四月
- 朔日二日讀了
- 一西洋列國史畧四

- 正月十二日ヨリ 廿二日返ス
- 一通鑑第十冊至廿四冊二十五冊
- 正月廿六日 廿七日返ス
- 一宋李忠定公奏議詩文選上下 不レ可レ不レ讀之書、正月廿七日
- 一識田軍記二十三冊 又摭見記ト云
- 一 二三四了ル
- 大畧二十六卷計

二月

- 七日了
- 一織田軍記十九冊 五冊ヨリ
- 廿五日了
- 一通鑑廿冊 廿五冊ヨリ四十四冊ニ至ル
- 十二日ヨリ 即日看了
- 一地學正宗四冊 内圖一冊
- 一靖獻遺言一冊 七八
- 廿六日了
- 一海國圖志二冊
- 廿九日了
- 一地學正宗後篇五冊 内圖一冊
- 一孟子正文一二三四
- 晦了
- 一韃靼勝敗記三 此書戲作ナリ、非ニ実録ニ也、

- 二日了
- 一戰國策抄一 土谷蕭海所抄

一坤輿圖識補四

一讀書餘適二

- 一枕山樓詩話一了 可レ讀之書 十四日了 譯
- 一訂正增補采覽異言七冊 十一日ヨリ 廿九日了 六十五冊ヨリ
- 一通鑑二十冊 八十四冊マテ 校讎二日ヨリ五日孫子了
- 一七書正文 四日ヨリ 五日了
- 一魯西亞風土記五冊 有識之書、尤 事實ハ旧シ旧シ、
- 一鳩巢秘錄一 十一日ヨリ 十三日了
- 一聽訟彙案二 不レ可レ不レ讀之書也、 十二夜ヨリ 講初ム
- 一孟子四冊 六月十日全部卒業
- 一梁惠上 十六夜 同下 廿二夜了
- 一公孫丑上 廿九夜 同下 五月七日夜了
- 一滕文上 十日夜 同下 十六夜了
- 一離婁上 廿四夜 同下 合語類ニ讀、 晦日了

万章上

同下

告子上下

尽心上下 告子ハ已ニスム、
尽心

一制度通

一宋詩選二冊

廿一日了

一海國圖志二冊

廿二日了

一采覽異言六冊

廿四日了

尤孫子孟子之數(マ、)ハズ

以上四拾九冊了

五月習書錄

董其昌行書

朔日廢

二日六十八字

三日六十五字

四日六十字

廿四日三十六字

五日六十字

廿五日三十六字

六日六十字

廿六日卅六字

七日百十八字

廿七日三十六字

八日六十字

廿八日三十六字

九日六十字

廿九日卅六字

十日六十字

卅日 休

十一日七十二字

十二日六十字

十三日六十字

十四日六十字

十五日六十字

十六日六十字

十七日六十字

十八日三十六字

十九日三十六字

此間五十余字脱ス

二月

一朔日四十五字

一二日卅字

一三日卅字

一四日卅字

一五日九字

一六日九字

一廿六十五字

一廿七日十五字

一廿八日廿一字

三日ツ、ク

三月

一二日廿四字

一三日三十字

一四日三十字

一五日十八字

一六日三十六字

一七日卅字

一八日卅字

一九日三十三字

是日千字文一遍相澄候夏、已下行体

日 三十六字

廿一日三十六字

廿二日三十六字

廿三日三十六字

習書錄

乙卯正月九日ヨリ 以歐陽詢楷字千文爲師

一九日 卅一字

一十日 卅八字

一十一日卅二字

一十二日卅一字

一十三日四十字

一十四日四十字

一十五日四十字

一十六日四十字

一十七日四十字

一十八日四十字

一十九日 四十字

一廿日二十六字

一廿一日二十四字

一廿二日欠課

兩三日前ヨリ 用新墨

十三日相ツマク

一十日五十二字 一十一日四十八字
十二日五十六字 十一日ツ、ク

四月 以文徵明行書為師、

一二日五十四字 三日廿一字
一四日四十二字 五日五十字
一六日六十四字 七日四十五字
一八日四十五字 董其昌行字
九日六十字
一十日六十字 十一日六十字
一十二日六十字 十三日六十字
一十四日六十字 十五日六十字
一十六日六十字 十七日五十六字
一十八日六十字 十九日六十字
一廿日 七十字 廿一日六十字
一廿二日六十字 廿三日六十字

一廿四日四十五字 廿五日七十五字
一廿六日六十字 廿七日六十字
一廿八日六十字 廿九日六十字

五月

一清人汪琬文十一篇 三日了
一鳩巢秘錄一 四日了
一檜窓漫錄一 四日了
一國史畧五 五日始 內二册了
一安井息軒 讀書餘適二 五日了
一皇朝史畧論一 五日始
一制度通八 內二册了
一通鑑二十 自三八十五册 九日始
至三百四册 廿六日了
一海國圖志二 再開十二日始
十二日了
一関ヶ原御陣已後之次第一 九葉耳

(全取于坤輿圖識、故不復精讀、
新製萬國輿地圖說二)

一鑿範提綱三 十七日了
廿四日了
一朱子語類卷五十七離婁下ヨリ
廿六日了 廿七日了
一醫學源卷一卷二二册
以上三十五册

此月甚無精

外ニ諸藩建白物一册

六月

朝日ヨリ 九日了
一增訂内科撰要十二卷 合為四册
外二册不足
一孟子集註并語類 朝日始六日了 七日始十日了
萬章上 同下
二日ヨリ 〇内一册了
一續八家文十二册
二日ヨリ 廿八日了
一 通鑑二十册 百五册ヨリ 百二十四ニ至ル
六日了
一 映咭喇紀畧全

一十一日ヨリ 十二日了
一海國圖志三 五七八合為四册、
十七日了

一濟生三方并鑿戒共三册 外壹册不足
九卷為之
一荒政輯要二册

一近世叢語八卷為四册
十八日ヨリ 〇十册了
一日本外史二十二册
同日

一孝經 刊誤本正文及講

一扶桑蒙求三册

一蒙求拾遺三册

一近世叢語
廿九日ヨリ

一遠西醫方名物考三册

〇自卷四 為二册 自卷七 為二册
至卷六 為二册 至卷九 為二册
自卷二十六 為二册
至卷二十八 為二册

四十四册

自正月至六月、二百五十六册

七月

- 一 朝日ヨリ
 - 一通鑑二十四冊 自二百廿五冊至二百四十八冊
 - 一 外史十二冊 十一冊ヨリ 二十二冊ニ至ル 十八日了
 - 一名物考二冊了
 - 一 八家文一 犀所レ読(福川屋之助)
 - 一 八家文二 同上
 - 一 東山紀行 批閱 十日
 - 一 外史六 十七日了 與吉・河ニ對読(吉村善作・河野數馬)
 - 一 外史七 廿四日
 - 一 謝選拾遺一 廿七日了 為福読(福川)
 - 一 廿二日ヨリ 廿七日了(高橋藤之進)
 - 一 禹貢蔡傳 為藤読
 - 一 廿一日ヨリ夜
 - 一 論語講 廿四日
 - 一 北陸日誌二冊 校読了
 - 一 外史八 廿六日始 廿八日了、
- 總計四十七冊

- 一 六月十三日始
- 一 孟子輪講 合語類讀
- 一 六月十三日始 七月十九日了 八月廿九日始
- 一 梁惠王上下 離婁上下
- 一 七月廿二日始
- 一 公孫丑上下 八月九日了 万章上下
- 一 八月九日始廿四日了 告子上下
- 一 滕文公上下 尽心上下
- 一 六月十日始
- 一 武教全書 為藤之進読
- 一 孫子 為同人講
- 一 論語 講釈毎夜
- 一 学而廿五了 為政八月二日 八佾八日 里仁九日始
- 一 公治長 十三日始 雍也廿四日 述而
- 一 十九日了 雍也廿四日 述而
- 一 統八家文卷五 歐陽
- 一 右為三摩之助一読、此冊了
- 一 十五日頃より
- 一 唐詩選絶句
- 一 右富永子講レ之

六月習書録

- 一 朔日 三十六字
- 一 二日 三十六字
- 一 三日 三十六字
- 一 四日 三十六字
- 一 五日 三十六字
- 一 六日 三十六字
- 一 七日 三十六字
- 一 八日 三十六字
- 一 九日 三十六字
- 一 十日 三十一字 已下臨趙子昂行書赤壁賦、
- 一 十一日 三十五字
- 一 十二日 五十字
- 一 十三日 六十二字

- 一 十四日 六十字
- 一 十五日 六十字
- 一 十六日 六拾字
- 一 十七日 六拾字
- 一 十八日 六拾字
- 一 十九日 六十字
- 一 廿日 僅々二字而已
- 一 廿一日 六十字
- 一 廿二日 六十字
- 一 廿三日 卅字
- 一 廿四日 以下廢業
- 一 廿五日
- 一 廿六日
- 一 廿七日
- 一 廿八日

一廿九日
一卅日

八月

- 二日ヨリ 八日了
- 一謝選拾遺二三九日始
- 同日始 四日了
- 一近世叢語四冊 八卷
- 三日ヨリ 七日了
- 一外史二 與村對讀三九日了 四十日了
- 五日ヨリ (音村)
- 一外史二十二冊 自読 内二冊了
- 十一日ヨリ 十三日了
- 一保建大記打聞三冊
- 七日
- 一北陸日誌二冊再読
- 五日ヨリ
- 一八家文十二冊 六至二十二七冊
- 二二三四五六七八九十一十二
- 十六日讀
- 一中興鑑言完
- 十七日了 與村 十八日了 廿二日 廿八日 卅日
- 一外史五對 九同 十 十一 十二 十三
- 十八日ヨリ 廿二日了
- 一蒙求拾遺三冊

廿二日了
一俳諧正語抄完
廿三日ヨリ 卅日了
一制度通十三合為三八冊
卷

孟子會・論語講在レ外、

通計四十二冊

九月

- 二日了
- 一八家文統二冊 四ノ冊
- 二日始
- 一莊子口義十冊了
- 二日始
- 一日本政記八冊 對讀内四冊了
- 一接魯問答一冊 校合了
- 一東山紀行一冊 校合
- 十一日
- 一常陸帶四冊了 内二冊再讀
- 一佛國曆象編五冊 内四冊了
- 一柳文一冊 高青邱詩集一冊
- 共二十九冊

莊子正文在レ外

- 一哈喇呼吐畧誌一冊
- 一西婦日譜一冊
- 一癸丑異事記錄一冊
- 一魯西亞碇泊始末一冊 連上三十三冊

十一月

- 一元資治通鑑三冊 卷十二 五日了
- 一柳文九冊 自第卅一至三九日了 第四十一
- 一制外危言一冊 七日了
- 一杵原松桂紀行二冊 九日了
- 一銀臺遺事一冊 十日了
- 一有斐錄一名備藩典錄 二冊 十三日了
- 一瀨城鑑四冊 十八日卒
- 一江家年表二冊

十月

- 朔日ヨリ 五日了 自三卷二
- 一柳文 四冊 至三卷七
- 朔日ヨリ 四日了 再讀抄錄了
- 一高青邱詩集二冊
- 朔日了
- 一佛國曆象編一冊
- 朔日ヨリ 六日了
- 一清狂吟稿二冊
- 二日ヨリ
- 一外史三四
- 五日
- 一東山紀行一冊 校合畢
- 五日ヨリ 九日了
- 一常陸帶二冊 校合
- 六日ヨリ 十五日了
- 一莊子正文
- 八日ヨリ
- 一宋元資治通鑑十六冊 内十三冊了
- 右宋五十二卷元十二卷
- 廿七日了
- 一遐邇貫珍一冊 第壹号
- 廿八日了
- 一弘道館記述義一冊
- 通計二十九冊

一明朝紀事本末三十冊 十九日ヨリ

○ 内十冊從卷一至卷六、又三冊晦日、廿三日了

○ 一柳文十冊 從卷十四至卷二十九、廿四日ヨリ 廿九日卒

通計四十五冊

嘉平月

○ 一紀事本末十七冊 朔日始 十日終

○ 一虞初新志十冊 卷二十 朔日始 内四冊了

○ 一歲寒窓放言三冊 十日始 十二日卒

○ 一劉向說苑纂註十冊 十二日始 廿九日了

○ 一居易堂集七冊 卷二十 十四日始 廿五日了

以上四十冊

從七月二十二月二百五十六冊

通一年五百十二冊也

外

孟子一二三冊迄會講濟、且作割記、

全部四冊講釈濟

諸藩建白物一冊

孝経刊誤講了

論語一二講了

莊子正文溫読一過

安政三年丙辰 小大正四六八九十十二

正月大

○ 一待宵物語三冊 元日ヨリ 二日マテ

○ 一史記評林五十冊 廿九日了

内序目一冊 讀史總評 短長説

○ 一山陽先生書後題跋四冊 十一日了

○ 一新論、為レ人校讎了

通計五十八冊

二月小

○ 一白氏文集四冊 一卷ヨリ 十一日了 十二卷マテ 六日了

○ 一虞初新志六冊 五冊ヨリ 七日了

○ 一浦の男物語一冊 同日了

○ 一芸窓筆記一冊 同日了

○ 一家臣令條書一冊 十三日了

○ 一梧窓漫筆二冊 十五日了

○ 一白氏文集三冊 卷十三ヨリ 十六日ヨリ 卷二十一マテ

○ 一武学拾粹八冊 内三冊廿日了 十八日了

○ 一隣痴臆議 大橋順藏著 一冊 十九日了

○ 一訥菴上書稿 同人一冊 十九日ヨリ

○ 一下學通言一冊 卷一 校讎 廿日ヨリ 廿四日了

○ 一今世名家文鈔八冊

通計三十七冊

三月大小

○ 一西湖佳話三冊 五日了

○ 一白氏文集三冊 七日了 十九日了

○ 一逸史十三冊 八日ヨリ 十九日了 廿日ヨリ 廿九日了

○ 一漢書十二冊 卷一ヨリ卷二十九マテ、此内年表アリ、五行 天文等ノ志ハヨマズ、徒ニ卷數ニ充ルノミ

○ 一歲寒窓放言 三冊 校合了 十三日了 卷一

○ 一下學通言 一冊 校合了 廿五日了 記

○ 一弘道館述義一冊 校合 三月十八日快晴

殿様益御機嫌克被遊御帰城ノ事、 十八日ヨリ 廿四日了(高須屋之尤)

○ 一外史 十四 為ニ流生ニ読、

- 廿四日了
- 一仁齋先生日札一冊
- 廿五日ヨリ
- 一外史十五

通計三十八冊

外、孟子講告子上篇終ル、且作^(劉)劄記、

三月廿八日ヨリ所レ欲做

- 一野山獄記 五月一日成
- 一吉田氏系譜 四月十三日成
- 一行昭明卿說 四月五日成
- 一與矢介皇天震怒說 ^(土屋矢之助) 與^(矢介)
- 一杉氏珍藏印記
- 一送^(佐々木小次郎)序 四月十五日成
- 一七生說
- 一雙刀記 ^(玉木産助)成
- 一穀甫相模日記序

- 四月十八日成
- 一統二十一回猛士說
- 四月廿八日成
- 一二歌批評
- 四月成
- 一書^(松柳詩後)
- 五月十日
- 一與^(坪氏)書

六月廿九日 跋^(講孟餘話)

七月ヨリ

- 天下非一人天下^(說) 與^(某氏)書 八月九日
- 復^(某生)書 七月十八日 松下村塾記
- 弔^(中谷生)書 七月七日 渡辺墓誌 七月五日
- 中谷翁遺事 與^(山田)治心^(氣齋)書 七月十三日
- 與^(赤川)淡水^(林) 百非翁遺事
- 虎助遺事
- 送^(武人) 與^(良三) 與^(玄瑞)
- 四月大
- 一漢書二冊 五日了

- 一外史十五 ^(二冊) 二日終
- 一詩觸八冊 内五冊了
- 一外史十二 ^(一冊) 十五日終
- 一豈好辨 ^(一冊) 八日了
- 一文章軌範統三冊 為^(穀甫)
- 一諸國漂流記一冊 九日了
- 一外史補八冊 十八日了
- 一武家小学一冊 雖^(小冊子)、例不^(レ)得^(レ)不^(レ)錄焉、
- 一九里香園先生文集一冊 同前
- 一外史十三 ^(一冊) 廿三日了
- 一古学先生文集四冊 十九日ヨリ
- 一同行狀墓碣一冊了
- 一漢書十六冊 從^(卷三十九)至^(卷百六)尾 四冊了
- 一聖学一冊 僅^(々)六葉耳了
- 一外史十六 廿四日ヨリ

- 一配所殘筆一冊 廿二日ヨリ
- 一外史補卷十一十二 一冊 校合再過
- 一外史補卷六七 廿八日了
- 一外史補卷六 廿八日ヨリ
- 一同 卷八九
- 一読史劄記三冊 凡^(八) 二冊了
- 通計四十冊 是月多^(小冊子)、
- 外、告子下篇講釈、劄記了

五月小

- 一詩觸三冊 五日了
- 一隨園詩話 兩帙十二冊 僅讀^(二冊)
- 一漢書十二冊 内六冊
- 一読史劄記一冊 朔日了
- 一外史補一卷一 再校了
- 一丙丁烟戒錄一冊 上

〇〇 一外史補二 再校了

〇 一配所殘筆一冊 五日了

〇 一放翁詩話一冊

一讀史餘論三冊 卷六 內一冊

一雨窓問話三冊

〇 一外史補三 初校十一日了 再校了

一杜詩偶評三冊

〇 一外史補七八 再校了

〇 一外史補四

〇 一外史補五六

一七書正文

通計三十一冊 甚情

外

盡心上高講尺、劄記了

六月大

〇 一漢書六冊 了

〇 一通鑑 一冊 卷一 與三佐龜對讀

一配所殘筆一冊 至七月乃卒、

〇 一下學通言三二冊 與三家兄一校讎

〇 一讀史餘論二冊了

〇 一下學通言二一冊

一通鑑一冊 卷三

一外史補六一冊

一潘祖實錄一冊 至七月乃卒、

〇 一武學拾粹五冊 四卷ヨリ

〇 一鸚鵡之詞 僅々數葉耳

〇 一盡心下高講尺、劄記了

〇 一言志晚錄一冊了

〇 一言志晚錄一冊了

〇 一言志晚錄一冊了

〇 一杜詩偶評一

通計十九冊、從自有此簿以來、未曾有之怠惰也、

從正月至六月、總計二百二十三冊

七月以後、每月當以四十七冊為課、

七月小

〇 一山鹿語類統集枕塊記二冊

〇 一同君道十二冊

〇 一外史一 與三家兄一對讀

〇 一杜詩 偶評 二冊

〇 一潘祖實錄一冊

〇 一小学三四 為三佐梅一讀

〇 一講孟劄記六冊 與三久保翁一校合

〇 一南汎錄一冊

〇 一漢書六冊 了

〇 一通鑑 一冊 卷二 與三佐龜對讀

〇 一配所殘筆一冊 至七月乃卒、

〇 一下學通言三二冊 與三家兄一校讎

〇 一讀史餘論二冊了

〇 一下學通言二一冊

一通鑑一冊 卷四

一外史補六一冊

一潘祖實錄一冊 至七月乃卒、

〇 一武學拾粹五冊 四卷ヨリ

〇 一鸚鵡之詞 僅々數葉耳

- 廿九日了
- 一安藝津川生詩稿一冊
- 廿九日了 卷三 一冊
- 一通鑑 卷四 一冊
- 通計四十三冊 欠四冊
- 又一冊 隨園詩話
- (紛字) 以上四十四冊

- 八月大
- 朔ヨリ 十一日了
- 一隨園詩話四冊
- 二日了
- 一陳龍川文一 去月ヨリ
- 二日了
- 一明德記一冊 去月ヨリ
- 一月性乙卯稿 評閱了
- 九日ヨリ 六
- 一後漢書 五冊 十三日了
- 一講孟判記一冊
- 十一日了
- 一遊中禪寺記一冊
- 十一日了
- 一東毛復讎始末一冊

- 十五日了
- 一神代卷二冊
- 一後漢書了(五)了(六)了(六)冊
- 一通鑑(五)了(七)了(八)了(一)冊
- 一小学了 四十九日ヨリ
- 十九日ヨリ
- 一外史補八冊 校合 内四冊了
- 廿二日ヨリ
- 一武教小学
- 三二十六冊

- 九月大
- 二日了
- 一(貝原翁大疑錄一冊
- 一通鑑(六)了(七)了(第一冊表) 八九
- 一清名家古文所見集五冊 陳兆麒編
- 四日了
- 一柳子新論一冊 上下
- 五日ヨリ 十一日了
- 一經濟要錄六冊
- 六日ヨリ 十八日了
- 一後漢書九冊

- 十八日了
- 一古語拾遺一冊
- 大同三年從五位下齋部宿禰廣成撰
- 十九日了
- 一外史補八一冊 校合
- 十九日ヨリ 念七日了
- 一隨園詩話六冊
- 二十日ヨリ
- 一陰德太平記 内一冊半了
- 二十日ヨリ
- 一經濟要錄八冊 内四冊了
- 念六日
- 一廣瀬約言一小冊
- 一古今妖魅考三冊 内二冊了
- 通計四十二冊

- 十月
- 朔日
- 一幽谷上書一冊
- 朔日 五日了
- 一經濟要錄十一二十三十四共四冊
- 二日了
- 一古今妖魅考一冊
- 二日ヨリ 五日了 八日了
- 一左氏傳 一 三二 為(增野) 德民 一五三 七四 九五
- 二日ヨリ 四日了
- 一要集錄二冊 中下ナリ

- 三日ヨリ
- 一陰德太平記四(五)(六)(七)(八)(九)
- 四日ヨリ 七日了 十一日ヨリ了 廿一日了 全部卒業
- 一後漢書 三冊 一冊 三冊
- 六日
- 一武教小学講了 一冊
- 七日 九日了
- 一柳子新論一冊 上下 校合
- 九日了
- 一中興諸侯傳全卷 五一冊
- 了
- 一(道之一言) 一小冊
- 十九日
- 一弘道館記述義一冊 與三家嚴二校合
- 十五日了
- 一松崎天神鎮座考上下二冊
- 一東萊博議四冊 三冊了
- 十六日ヨリ 廿四日了
- 一武家女鑑三冊
- 十七日
- 一中谷章貞代中御沙汰書其外扣一冊
- 十九日
- 一關城逸史一冊
- 一左傳十冊 十一十二ヨリ 三十マテ 四冊
- 廿一日ヨリ
- 一陰德太平記五冊 卷十一ヨリ 一冊了
- 一四庫全書簡明目録 春秋部 一冊讀

- 一本朝列女傳
- 一唐書三冊了 新唐書 共五十冊
- 一古事記傳
- 一陳龍川文二 為彦介、一冊 廿八日了
- 一海防備論一冊校了 廿八日了
- 通計五十一冊
- 唐書五冊 卷七十六ヨリ一百六マテ

十一月

- 一東萊博議一冊 朔日了
- 朔日ヨリ 内七冊
- 一左傳十五冊 與家大人二読 併杜註 同日ヨリ 廿一日了
- 一左傳六冊 為德民、正文而已 朔日了
- 一講孟劄記評語下一冊 反評 五日
- 一唐書二冊了 九日了
- 一六經畧說一冊 太宰純著

十二月

- 一本朝列女傳六冊了 内一冊
- 一名臣言行錄六冊 與家兄二読 十二日ヨリ
- 一古事記傳九冊 十三日ヨリ 十五日了
- 一夢ノ代十一 十二 十七日了
- 一無盡集拔書三五二冊 校合 十七日了
- 一陰德太平記四冊 十三ヨリ 廿四日ヨリ 二十マテ
- 一國語八冊 内五冊了
- 一陳竜川三四 卒
- 通計五十冊
- 朔日ヨリ
- 一古事記傳 十ヨリ十五マテ六冊 同日ヨリ
- 一左傳八冊 卷十六ヨリ 二日ヨリ
- 一太平御覽三四 二日ヨリ
- 一外史一二三四五

劄記四上四中四下成ル

武教全書講錄一成ル

丁巳

- 大 二五六八九十一十二
- 小 正三四閏五七十

丁巳歲

正月

- 一四庫目錄二三四五六七八九 上帙了 五日
- 一金魚養玩草一冊 泉州堺 安達喜之
- 一外史六七
- 一方正學文粹四冊 内一冊了 為彦介
- 一孟子公孫丑ヨリ會講
- 一經濟要錄七八九十十一十二十三十四了

- 一國語三冊 九日了
- 九日了
- 一二十六佳選五冊 書雖俚非演也、 六日了
- 一農家益三冊 同後篇二冊 八日了
- 一御園叢書二冊
- 一唐鑑六冊 念七日了 十四日了
- 一吉野拾遺四冊 十八日了
- 一父師善誘法上下一冊 為岡部、^(繁之助) 十九日ヨリ
- 一兵要錄本文三冊為岡部、^(繁之助) 廿三夜為三久保翁
- 一羣書類從卷百卅八 雲州消息
- 一回號考一冊 廿九日了
- 一經濟要錄六冊 校合
- 一簡明目録一冊 易類
- 以上五十九冊
- 通計五百五冊
- 著書

- 十三日了
- 一常栄寺殿御家督御相統之詳考一冊
- 十三日了
- 一御系圖辨疑一冊
- 一禹貢蔡傳輯錄纂註 為玉木
- 一古事記傳十六十七
- 一坤輿圖識三冊 為榮太(吉田) 德民
- 一山陽詩鈔四冊 為彦介・榮・德
- 一外史補四五六 久保本校合
- 一長門金匱一冊了
- 廿四日
- 一童子訓三冊 内二冊了
- 一藩翰譜 毛利氏
- 一敏鎌一冊 中嶋廣足
- 一中朝事實二冊
- 計三十七冊
- 又兵要錄一冊 為岡部
- 通二十八冊

- 二月
- 一陰德太平記十冊 卷二十一ヨ 内二冊
- 一方正学文粹三冊 二ヨリ 為彦介一冊
- 一農隙餘談一冊
- 一外蕃通書十冊 第一册ヨリ 第十八册マテ 又五册 第二十七册了
- 一四庫書目下帙九冊
- 十一日了
- 一周南文集六冊 為榮
- 十二日了
- 一春水遺稿一三ノ 同別録一ノ卷
- 十七日了
- 一神皇正統記六冊
- 一関原陣已後御當家之次第一冊
- 一朱竹垞文粹六冊 内四冊了
- 廿九日了
- 一吉齋漫錄二冊
- 一正名緒言二冊 了
- 一直養漫筆四冊

- 一人比鏡一名涙襟集一冊
- 十八日ヨリ
- 一農業全書十一冊 内四冊
- 廿二日了
- 一羣書類從第四百一 尺素往來
- 一外史八 廿四日了
- 廿九日了
- 一農稼業事五冊 僅々小冊 子耳
- 通計六十二冊

- 三月
- 七日了
- 一名臣言行錄後集 二三 與大兄
- 一農業全書一四 與德 榮
- 一朱竹垞文粹五六 與德・榮・龜
- 六日了
- 一人比鏡一冊 了 獨
- 一陰德太平記(廿五)(廿七)(廿九 與梅 内三冊了 廿六)(廿八)(卅) 八日了
- 一直養漫筆四冊
- 一備考三冊

- 十一日ヨリ
- 一吉田物語一
- 一詩經集傳八冊 為龜・德・榮、三 廿七日了
- 一明良洪範三冊 了
- 一好生緒言二卷
- 一三老記一冊 閏月乃卒
- 一巴岐鑑八冊 内一冊了
- 一外史九十一
- 一稱謂私言一冊
- 一三國志
- 一禹貢錐指
- 一後言三冊 并評一冊
- 一嚶々筆話一冊 二編
- 計二十七冊

四月 是月有^三肝臟病、讀書之少可^三先卜^二矣、十二日後初復^レ常、

○一三国志五冊 與^二榮・德^一

一茶山詩五冊 內一冊 與^二榮

○一幽室文稿一冊 自校一過、又一通

○一稱謂私言一冊 僅々小冊子耳

一嚶々筆語二冊(初篇)二篇

○一玉翁を祀一冊

○一勸善夜話一名畫 四之卷一冊

一孫子國字解 內一冊了

○一補史備考一冊

通計十四冊、何少也、

五月

一八家文柳歐六 為^(有言無次郎)熊・德、至六月乃了

一 同老蘇 為^(馬島春海カ)玉・春^一

一 新策四冊 為^(國司仙吉カ)榮・繁^一 七日了

一 蒙求拾遺 為^(國司仙吉カ)佐・國^一

一 孫子國字解 內一冊 三五六

一 同十家注初冊 畧見大意耳、

一 嚶々筆語二篇一冊 朔了

一 原城紀事十二冊 對校 內十冊了

一 アメツチヒ哥并解 寥々数葉耳

一 見聞私記一冊

一 雌鳩草紙一卷

一 世子告文一卷 御著一篇

一 容徳院殿御示書一卷

一 宵話 未完本一冊 了

一 困学紀聞

一 天工開物

一八家文大蘇 為^(有言無次郎)藤生、來月乃了

一四書釈地三統 經解二十三

一孟子生卒年月考 同二十四

一潜邱劄記 同二十五

一五山堂詩話補遺三冊 五卷

一藤田東湖詩一冊

一甘雨亭叢書三集八冊

一蒙求

一 項羽本紀一冊 會読 十九日了

一 三国志蜀 內二冊了

一 同吳 至來月乃了

一 長井記一冊 與^二佐梅^一

一 甘雨亭三集八冊

一 山陽詩鈔四冊 為^二彦介輩讀^レ之、經五月初了、

通計三十八冊

閏五月

一 原城紀事二冊 戌亥

一 八家文一冊大蘇 前月ヨリ

一 孫子國字解六一冊 朔日了

一 銃術問答 小冊 校合

一 甘雨亭五集八冊

一 長井記一冊 四日了 五月ヨリ

一 三老記一冊 六日了 三月ヨリナリ

一 茂助申上一冊 登和一件

一 精里三集一冊 五月廿六日ヨリ岡部

一 吉田物語 語(一)(三)(五)(七)(九)

一 國王称号論 小冊子 校合

一 恤刑茅議 同

一 勸善夜話 四ノ冊一 同

- 廿日ヨリ 一陰德太平記(冊一)(冊三)(冊二)(冊四)
- 一假字本末四冊 内二冊了
- 通三十一冊
- 正月至是二百十二冊耳、

六月

- 朔日ヨリ 六日了 一詩經品物圖攷五冊 與德民
- 朔日ヨリ 蜀 一三國志廿七廿八廿九卅 四冊了 與德・榮
- 朔日了 一女誠記述一冊 與佐梅・德民・榮太
- 六日了 一假字本末二冊
- 十三日ヨリ 十六日了 一神字日文傳一冊
- 了 一陰德太平記(冊五) 與佐梅
- 六日ヨリ 一吉田物語(七)(九)
- 三日ヨリ 一精里三集二 岡部
- 四日了 一八家文柳歐六ノ冊 五月ヨリ 熊・德

- 五日ヨリ 一三國志孫子国字解七八九十 七日ヨリ十九日了
- 一画断三冊
- 一六合叢談抄 一桑梓景賢錄
- 一関原合戦記 一
- 右各小冊子、與三久保清太二校合、
- 十四日ヨリ 十六日 一八家文歐 徂徠一冊 玉・德・榮
- 十五日ヨリ 一同歐一冊 范司諫 熊・德
- 韓一二三四五六七八九歐十十一十二十三十四老十五十六 大十八十九二十廿一 小廿五廿六 王二十九 曾二十七二十八 廿二廿三廿四
- 十七日了 一和字大觀鈔二冊
- 十八日ヨリ 一懋忠錄四冊 内二冊了 佐謙
- 同 一外史豊臣中
- 廿一日ヨリ 廿七日マテ 一玉鋒百首解二冊
- 廿三日ヨリ 一吉田物語附尾三冊 内一冊了 梅
- 廿二日ヨリ 一魏叔子文鈔六冊 内三冊了 榮・德

- 廿七日ヨリ了 一翁問答二冊
- 了 一大扶桑國考上下
- 通計三十七
- 通計四十四冊
- 自三正月至三六月、惣計二百四十九冊
- 是ヨリ月々四十二冊宛可レ課者也、

七月

- 朔日ヨリ 一孫子国字解九十一十二十三一冊
- 同日 一吉田附尾(中)下
- 同日 六日了 一魏叔子文鈔三冊
- 十三日了 一明良洪範一冊
- 十三日了 一懋忠錄二冊 終
- 十四日了 一集義和書本三冊 六九十
- 同日了 一鶴臺遺稿七 一冊
- 了 一川角大閣記五冊

- 十七日了 一桃洞遺筆卷上一冊
- 十八日了 一觀古雜帖 一冊
- 十八日了 一魏批孟子牽牛章一冊
- 十九日了 一御園書集一冊
- 同 一或家藏書目錄一冊 (二冊雖レ非レ書、亦皆瀏覽、)
- 了 一享保三四十一江戸長崎御尋苔之書一冊
- 了 一春草堂詩鈔四冊
- 了 一義士流芳一冊
- 了 一澡泉餘草 拙堂 數葉耳
- 了 一朝鮮物語一冊 來月乃了
- 了 一精里三集二ノ卷 去月三日より了ル岡部
- 了 一出定笑語四冊
- 通計三十四冊